1990

日本の作曲

JAPANESE
CONTEMPORARY COMPOSITIONS

1999

サントリー音楽財団創設30周年記念

1990

日本の作曲

JAPANESE
CONTEMPORARY COMPOSITIONS

1999

サントリー音楽財団創設30周年記念

日本の作曲
1990–1999

C O N T E N T S

座談会
日本の作曲 1990–1999 …… 3
石田一志・上野　晃・白石美雪
長木誠司・楢崎洋子・武田明倫（司会）
1990 …… 5
1991 …… 9
1992 …… 12
1993 …… 16
1994 …… 20
1995 …… 24
1996 …… 27
1997 …… 32
1998 …… 36
1999 …… 40
総括 …… 47

資料・作品一覧 …… 55

サントリー音楽財団主催 **演奏会記録 1974–1999** …… 77

あとがき …… 110

座談会

日本の作曲 1990–1999

【出席者】

石田一志

上野　晃

白石美雪

長木誠司

楢崎洋子

●

武田明倫
（司会）

出席者紹介

石田一志（いしだ かずし）
1946年生まれ。音楽評論家、武蔵野音楽大学、慶應義塾大学、玉川大学各講師。訳書に『現代音楽小史』（グリフィス著／音楽之友社）、『現代音楽――1945年以後の前衛』（同、共訳／音楽之友社）、『アルマ・マーラー～華麗な生涯』（ヴェスリング、共訳／音楽之友社）などがある。

上野　晃（うえの あきら）
1927年生まれ。音楽評論家、文化庁芸術祭執行委員、芸術選奨・音楽部門審査委員などを務めた。日本近代音楽館資料委員。音楽執筆者協議会、東京音楽ペンクラブ所属。

白石美雪（しらいし みゆき）
音楽学者、音楽評論家、武蔵野美術大学助教授、サントリー音楽財団評議員。著作に『はじめての音楽史――古代ギリシアの音楽から日本の現代音楽まで』（共著・音楽之友社）、「ミュージサーカス――コラボレーション論序説」（国立音楽大学研究紀要）、「海から ふたたび雨となり――武満作品 手法の変遷をたどる」（音楽芸術）などがある。

長木誠司（ちょうき せいじ）
1958年生まれ。音楽学者、音楽評論家、東京大学助教授。著作に『前衛音楽の漂流者たち～もう一つの音楽的近代』（筑摩書房）、『グスタフ・マーラー全作品解説事典』（立風書房）、『フェッルッチョ・ブゾーニ～オペラの未来』（みすず書房）、『第三帝国と音楽家たち』（音楽之友社）などがある。

楢崎洋子（ならざき ようこ）
音楽学者、音楽評論家、愛知県立芸術大学助教授。著作に『武満徹と三善晃の作曲様式――無調性と音群作法をめぐって』（音楽之友社）、『日本の管弦楽作品表1912～1992』（日本交響楽振興財団）、『山田耕筰作品全集 第1巻 管弦楽曲1』（春秋社）などがある。

武田明倫（たけだ あきみち）
1937年生まれ。音楽学者、音楽評論家、武蔵野音楽大学教授、サントリー音楽財団評議員。著作に『現代音楽ノート』（深夜叢書社）、訳書に『アルバン・ベルク』（ライヒ／音楽之友社）、『シェーンベルク』（ローゼン／岩波書店）などがある。

1990

▼石田

近藤　譲　《林にて》
林　　光　《八月の正午に太陽は……》
高橋　裕　《シンフォニック・カルマ》
池辺晋一郎　《シンフォニーⅣ》
吉松　隆　《カムイチカプ交響曲》
武満　徹　《ア・ストリング・アラウンド・オータム》

▼上野

伊藤康英　吹奏楽のための交響詩《ぐるりよざ》
北爪道夫　オーケストラのための《昇華》
金光威和雄　《沢内解釈甚句》《ソンデコ由来節》《さんさ踊り伝説節》(三部作)
松永通温　ピアノとオーケストラのための《切絵図》
吉松　隆　二十絃箏独奏曲《もゆらの五ツ》
松尾祐孝　《飛来Ⅳ》―独奏ピアノを伴う室内オーケストラの為に

▼白石

近藤　譲　《林にて》
池辺晋一郎　《シンフォニーⅣ》
林　　光　《八月の正午に太陽は……》
三輪眞弘　《夢のガラクタ市》～前奏曲とリート～
高橋悠治　《ありのすさびのアリス》
武満　徹　《ヴィジョンズ》
西村　朗　ファゴット協奏曲《タパス》

▼長木

林　　光　《八月の正午に太陽は……》
吉松　隆　《カムイチカプ交響曲》
近藤　譲　《林にて》
高橋　裕　《シンフォニック・カルマ》
池辺晋一郎　《シンフォニーⅣ》

▼楢崎

林　　光　オペラ《ハムレットの時間》(萩京子との共作)
間宮芳生　オペラ《夜長姫と耳男》
三善　晃　ギターと弦楽四重奏のための《黒の星座》
溝入敬三　《ドント・タッチ・ザ・ラーフィング・ストーン》
西村　朗　ファゴット協奏曲《タパス》
武満　徹　《ア・ストリング・アラウンド・オータム》

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

武田　90年に初演された作品から選んでいただいて挙がっているのが23曲。このなかで、複数の方の支持があった作品から、まず話し合っていただきましょう。

近藤譲の《林にて》、これは3人の方が挙げていらっしゃいますが、彼の作品というのは、一貫して変わっていないと思いますが、そのなかでとくに印象に残ったのはどんなところでしょうか。

白石　室内楽作品での近藤の書法にはこれまで広く親しんできたのですが、オーケストラでそれをどう実現するかというところが、興味の対象でした。オーケストラを彼流に分断した形で使ってい

白石美雪

くやり方に、他の作曲家にはない個性を感じたのが印象に残ったいちばんの理由だと思います。

石田　第16回の民音現代作曲音楽祭が初演でした。彼には珍しい四管のオーケトスラ、それをシンメトリックな2群に分けて使っているんですね。白石さんが言われたような、空間的な配慮というのが特徴で、点描的に呼び交わす音がクールに時空間を充たしていきました。

長木　僕も同じです。室内楽の大きさでは方向性とか空間性とかわからないようなものをオーケストラを左右に分けて、あの空間の広がりでやってみたというのが、結構面白かったと思います。

長木誠司

武田　池辺のⅣ番が挙がっていますが、Ⅴ番の《シンプレックス》が挙がらなかったのはなぜでしょう？

石田　はっきり書き分けられていました。Ⅳ番のほうは夢から発想されたという、たゆたうような形式の夢幻的な音響的作品という感じがしましたが、Ⅴ番の《シンプレックス》のほうは文字通り軽妙な作品だった。

長木　充実度というとⅣ番のほうじゃないかと思います。ただ、この年から、シンフォニーを書くということに、かなり燃えてたから、そのはじまりみたいに面白かった。

武田　林の《八月……》、これは「作曲家の個展」でした。99年のサントリー・サマーフェスティバルでも再演されたので、わりと記憶に新しいんじゃないかと思うんですが。

石田一志

石田　前年の89年は、北京の天安門広場の事件があった年です。その惨劇を目の当たりにした三木稔も、この年《北京祷歌》という、北京をテーマにした作品を書いていますが、林のほうは、ペイ・タオ（北島）という詩人の詩からタイトルをとって、内容的には、もっとさかのぼった展望を示しました。そして五・四運動と、それから民主革命の4月5日を象徴する4+5と5+4という、そのリズムを方法論にして、メッセージをかなり象徴化したところに、彼のいままでの作品のなかにない凝った使い方があったと思います。

長木　その時代性というか、天安門の翌年書かれているという、一定の時宜性みたいなのが感じられて、ちょうど東と西が統合されてくるメルクマールな時期にあって、林のいままでの活動のなかでも、ちょっとエポックメーキングな作品じゃないかと思いました。

武田　同じ林で、《ハムレットの時間》が、楢崎さんから挙がっていますね。楢崎さんは《八月……》も聴かれたでしょう？

楢崎　ええ、聴きました。ただ、《八月の正午……》よりも、このシアターオペラのほうが、萩との共作ですが、林らしさは、よく生きていると思いました。

武田　ハムレットをどう使っているんでしたっけ。

楢崎　劇中劇として、日常のサラリーマンの生活のなかにシェークスピアのハムレットを引用する形で使っていました。音楽と演劇がいいバランス

楢崎洋子

ででき上がっていました。そのあとこんにゃく座は演劇の要素が強くなっていった。

武田　他には、高橋裕の《シンフォニック・カルマ》。

石田　彼は松村、黛の二人の作風と考え方の一部を、若い世代で展開しているという作家ですが、松村門下の「時の会」というグループで発表したんですね。オーケストラ作品ばかりを並べたということで、指揮の岩城も感銘を受けたという会だった。なかでも、いちばん力作だったのが、この《シンフォニック・カルマ》で、いわゆるパンエジアニスティックな楽興を高揚させた力作ですね。

長木　僕は積極的ではないんですけど、ただ、こういう作品も、やはりオーケストラレパートリーとしてはあるべきだろうとは思う。ものすごく音のいっぱい鳴る作品で、聴いていると途中で耳が痛くなってしまうんですが、力量があるということもわかるし、世界を持っている人だろうとは思うんです。そういう個性がよく出ている最初の作品だと思って挙げました。

武田　同じぐらいの世代になるのかな、吉松もこの時期、かなり量産していたんですね。《カムイチカプ》は交響曲の1番。

石田　ええ、鳥シリーズの一つですが、全5楽章の大作になっていて、創造、保存、破壊、眩惑、開放という、それぞれのテーマに従って、彼の持っているボキャブラリーを当てはめていった作品ですね。僕は特別に共感したわけじゃないんだけれど、いままでの小品の範囲から、大作のほうに踏みだしていった、彼のなかでは大事な作品ではないかなと思います。

長木　このあと91年に《地球（テラ）にて》というのが出てきますけど、だんだんドラマ路線を走りはじめるわけで、そのギリギリのところにいた、《朱鷺》以来の鳥のモチーフなんかも出てくるわけだし、その意味では、これを最後にして、吉松という人を、この限界で評価したいと思うんですね。ここから後は、僕はわかりせん。

90年だったら《もゆらの五ツ》のほうが面白いと思うんです。彼は二十絃箏は慣れていなくて、逆にそれで非常に真剣に考えて書いたような気がしたんで、そういう持ち駒のオーケストラじゃなくてやっていたという意味では、どっちか一つというならば、《もゆらの五ツ》のほうがいいのかもしれません。ただ、この《カムイチカプ》も力作ですね。彼としては、時間をかけて書いた曲だし、どっちとも言いがたいですね。

武田　では武満の《ア・ストリング・アラウンド・オータム》。

楢崎　武満の80年代は新ロマン主義の傾向があったと思いますが、90年代は調的なイデオムを使っていても、そこから武満独特のテクスチュアが開かれていく。《ア・ストリング・アラウンド・オータム》はその始まりにある作品と思います。

武満　徹

武田　あと、それぞれ挙げられたなかで、これぞユニークなものでコメントを付けたいような作品はありますか。

石田　《赤ずきんちゃん伴奏器》の以後の三輪作品が面白いと思うんだけど。

白石　《夢のガラクタ市》は、ハープとコンピュータのための、ライヴ・エレクトロニック・ミュージックで、非常に三輪の持っているファンタジ

ーが生きた作品の一つだと思います。子供の声とか、車の音とか、喫茶店でのおしゃべりといった日常音が再生され、そこでハープが演奏される。民謡風のメロディをハープで演奏していく前奏曲は、とくに物語が描写されているわけではないんですけれども、物語性を感じさせるファンタジックな音楽で、ミヒャエル・エンデの同名の詩によるリートが続きます。ライヴ・エレクトロニック・ミュージックが非常に近づきにくい感じのものが多かったなかで、どちらかというとアナログ的な感覚を残している作品ということで印象深かったです。これは、長澤真澄のリサイタルでの初演です。

それから、高橋悠治の《ありのすさびのアリス》は、矢川澄子の同名の詩をテキストにした作品ですが、琴と石笛、土笛、打ち物といった奏者が言葉の抑揚に基づく音型で楽器を淡々と鳴らしているなかで、女の人が舞ったり、邦楽の発声で歌ったり、付け歌を歌う。そういう、なんとなく集まってきた人達が、なんとなく一つの雰囲気を共有して、またなんとなく終わっていくという、さりげなさが良かったと思います。そこに身を置いているといごこちがいいんです。それこそ、私は高橋悠治の最近の、人が演奏するに至るまでのプロセスを問題にするような作品へ向かう手前の、作品として残り得る最後の時期の曲じゃないかと思います。

武田　上野さんの挙げられた金光の作品は合唱曲

武田明倫

上野　晃

ですか？

上野　いえ、違います。ソプラノと、それと別に声が3人いて、器楽はフルートとピアノとパーカッションです。これは、一條静子というソプラノが盛岡出身で、テーゼとして数年前から津軽の言葉による声楽作品を作詞家と作曲家に委嘱し、金光は東北の出身でないにもかかわらず、方言の作曲に挑み、三部作《岩手民話に由来する三つの語り歌》を書きあげました。いままで日本歌曲は、標準語でつくらないと認められないという傾向が強かったんですけど、最近は方言による作曲が多くなってきましたね。内容的にもリージョナルな特色が味わい深く表出されているので、取り上げました。

伊藤康英《ぐるりよざ》は、吹奏楽のための交響詩として三楽章のスケールの大きい作品で、40曲ほども吹奏楽作品がある伊藤のこのジャンルの仕事のなかで頂点をなす曲として挙げておきたい。

北爪道夫《昇華》は、〈京都をイメージした作品〉として京都市交響楽団の委嘱で作曲された。雑色のカオスとか、また秩序とかでなくて、オーケストラの純化という理念の実践として聴く。

松永通温のピアノとオーケストラのための《切絵図》は、西欧ロマンティックのピアノ協奏曲でなく、ピアノとオーケストラが等価値の空間、色彩的な力学、見え隠れの術、細筆と揮毫の術といった、非西欧的な手法が独自な構図の協奏曲を生んでいる。

1991

▼石田

黛　敏郎　オペラ《金閣寺》
吉川和夫　《論議ビヂテリアン大祭》
西村　朗　二重協奏曲《光の環》
西村　朗　《暁の音楽》
南　　聡　《彩色計画V》

▼上野

田中友子　邦楽劇《藤十郎の恋》
吉川和夫　《論議ビヂテリアン大祭》
小畑郁男　管弦楽のための《虹の遊戯》

▼白石

黛　敏郎　オペラ《金閣寺》
武満　徹　《フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム》
江村哲二　《時に……》オーケストラのための
藤枝　守　《フランチェスカの分身Ⅰ》
細川俊夫　《アヴェ・マリア》

▼長木

松平頼暁　《尖度Ⅰ》
黛　敏郎　オペラ《金閣寺》
山田　泉　《一つの素描》ピアノとオーケストラによるⅡ

▼楢崎

松平頼暁　《尖度Ⅰ》
黛　敏郎　オペラ《金閣寺》
三善　晃　ヴァイオリンと弦楽合奏のための《弦の星たち》
武満　徹　《ハウ・スロー・ザ・ウインド》
武満　徹　《フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム》
吉松　隆　交響曲第2番《地球（テラ）にて》

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

武田　91年にいきましょう。満票に近いのが《金閣寺》ですね。これは、今年99年に東京でも大阪音大のザ・カレッジ・オペラハウスがやったわけですが、僕は、それを見て再認識したところがだいぶありますが、91年で評価するとどういうことになりますか。

楢崎　オーケストレーションができて器楽作品を書ける作曲家の書いたオペラという点で、それまでの日本のオペラの群を抜いていると思います。それと、黛の日本志向の部分があまり肥大しないで、音楽面が充実しているという点でもよかった。

石田　実際のところ、今年99年の上演で本当に再認識したという感じがありますね。このときの上演というのは、すでに世界初演から15年たっていたわけですが、美にとりつかれた青年の悲劇というより、不具の主人公の心のゆがみが暗く強調され、原作との相違が気になったという感じがありました。91年に記録的には入れなきゃいけないんだけれど、むしろ今年聞いて、はるかに音楽的な意図もよくわかったし、今年からいわば本格的な評価がはじまるんじゃないかという印象があります。

楢崎　どこが違うんでしょうか、91年の日本初演と今年の上演では。

石田　演出の効果でもあるが、まず合唱の扱い方が違いました。だから、そこで唱えられるお経が歌劇全体の基調となり、多彩な話法のオーケストラと立体的な効果をつくっていたと思うんですね。91年の上演では、いま言った合唱の存在というのが、あまり舞台上、意義を持たなかった。

白石　やっぱり91年の上演は初演から10数年たって、ようやく見られたという感慨が非常に強かったと思います。どんなものだかすごく楽しみにしていて、その分だけ衝撃も大きかったんです。このとき、日本の作曲家が書いたオペラのなかでも、この作品はずっと残るだろうという感触を持ちました。今年の上演では舞台装置に少し気になると

ころがありましたが、演出は映像を含めて、はるかに優れていた。それでも2度目なので、91年ほどの衝撃はありませんでした。

長木　僕も今年のほうが個人的には好きですが、印象の強さからすると、1991年上演のほうなんです。やっぱり最初に聴いたということもあったし、それから、われわれの世代にとっては、黛というのはすでに作曲家ではなかったんですけど。こういうのを書いてきた人があると、むしろそれで驚いたんですね。

やっぱり、あの台本は、ヘンネベルグが書いていて、ものすごくドイツ受けするというのかな、ドイツ人がその文化から見るとこうなるんだという取捨選択のやり方をしていて、かつ非常に歯切れのいい職人芸があったりする。

台本も、たとえば日本の他のオペラに比べると、痒いところに手の届く台本のつくり方をしていたというのがありまして、個人的にいうと、ドイツの現代オペラなんかを見ている目には素直に入れたというのがあったんですよね。

それからもう一つは、今回もわざわざ日本語に直さないというか、この先もおそらく日本語に直すことはないでしょうけども、オペラというものが日本語でやるとどうなって、ドイツ語でやるとこうなるんだというかな、単純なことなんですけど、やはり日本語のオペラというのはまだまだかなという感じはしたんですね。いわゆる前衛的なオペラという意味ですけどね。

たとえば頭のところなんかのドラマへの介入の仕方というか、主人公が出てきた途端に合唱が上から降ってくるみたいな、ああいう空間的なやり方というのは、今回のほうがよくわかりましたけれども、やはり非常にオペラの台本をつくり馴れた人のやり方だと思うんですね。ああいうテキストにない部分を合唱に回したりなんかするということ。そのへんが、オペラのつくり方としてうまくできていたし、もちろん音楽もわれわれにとっては衝撃的でしたから、そういう意味ではこの年でいいんじゃないかなと思います。

上野　田中友子の邦楽劇《藤十郎の恋》は、メゾソプラノとテノールが歌い、器楽のほうは二十絃箏が12人、三絃が2人、尺八という日本音楽集団の委嘱作品です。

武田　松平頼暁の《尖度Ⅰ》、これは82年の作品だということですが、初演はこの年ですね。

楢崎　松平も近藤と同じように方法論はほとんど変わらないんですね、室内楽作品もオーケストラ作品も。《尖度Ⅰ》もシステムにしたがってつくられていて、それゆえの意外な音の組み合わせがあちこちに聴かれたんですが、それにオーケストラがよく乗って、面白い演奏になっていた。井上道義指揮の東フィルです。

武田　これは長木さんも挙げていますね。

長木　このあとに、松平のオーケストラ作品を並べて聴く機会があって、そのときには演奏の問題もあり、皆同じに聴こえちゃうということがあったんですが、これを聴いたときには、わりと期待して聴いていて、その期待は充分に充たされたという印象が強いです。

武田　その他には武満の作品は2つ挙がったんだけど、これも作曲は前年ですね。

長木　武満は、毎年たくさんオーケストラ作品を書いていて、それなりの精度の高い作品ですから、それをどう取り扱うか、どういうふうな意味づけをするかということだろうと思うんですけど。

武田　そういう点でどうですか。

楢崎　ここに挙げた2作品に共通して言えることは、簡単に言えば、選ばれる音がより少なくなったところで作品としての持続力が緩まないという点です。

白石　《フロム・ミー》はカーネギーホール創立100年記念の委嘱作で、90年の世界初演にも参加したネクサスが日本でも演奏したわけですけれども、武満が演奏者の個性を非常に生かして、繊細な音を奏でるネクサスという打楽器アンサンブルを頭に置いて仕上げたことが、成功している作品というふうに受けとめました。

それから、細川の《アヴェ・マリア》は東混の委嘱作で、ルネサンスの合唱音楽にも通じる純粋で厳格な美しさにひかれました。《リアの物語》で

松平頼暁／photo: 柴野利彦

山田　泉

も主軸となるカオス／コスモスという宇宙観がこの曲にも反映しています。

武田　他は《論義》が、石田さん、上野さん。

石田　吉川和夫という作曲家は、僕は、とても言葉の扱いに関してアイデアが豊富な人だと思っています。これは宮沢賢治の材料を使っているわけですね。いわば科学と宗教と自然というのを一体化した、そういう宮沢賢治の世界を、ユーモアを含めて具体化していました。国立劇場の「聲明公演」だったのですが、狂言の山本東次郎だとか、伝統芸能も巧みに導入していました。いわば新しい語り物の実験と言えるようなところが評価できたと思っています。

上野　これは、いま言われたように、やはり言葉の扱い方が非常に面白いし、それだけではなくて、いろんな洋楽器を使っている。それとうまく組み合わさっているんですね。これは再演も何回かやっていて、この種の新作としては、珍しく残る現代声明あるいは狂言作品の一つだという気がします。

武田　あとは西村作品がいくつか挙がっていますね。

石田　《光の環》というのはヴァイオリン、ピアノとオーケストラのための二重協奏曲。これはN響のMIF（ミュージック・イン・フューチャ）の委嘱作品ですね。

武田　三善のカルテットはどうですか。

楢崎　《弦の星たち》は、独奏ヴァイオリンと弦楽合奏のための作品ですが、90年に挙げた《黒の星座》と合わせて、弦の響きが、密度が濃くなっても音が衝突したり入り組んだりしないで透明さを保っている点にすぐれたものを感じました。

武田　小畑の《虹の遊戯》というのはどこでやりましたか、上野さん。

上野　これは長崎で初演です。彼はずっと長崎にいるけれども、毎年1作ぐらいオーケストラ曲を書いて発表しているんです。これは私はスコアをもらって、音もテープで聞いて、実演は聞いてないんですけれども、どこにも紹介されずにおくのは惜しいと思ってピックアップしました。

武田　山田泉の《一つの素描Ⅱ》はどうですか。

石田　ピアノとオーケストラによるとても主情的に音を研いだロマンチックな作品です。ピアノは木村かをりです。

長木　その前にⅠが84年につくられている。

武田　そのほかの作品は？

石田　南の《彩色計画Ⅴ》は、現音の音楽展でオケの日に初演されました。まあ一種の引用と、それがきわめてスタティッシュにいろんな素材が重なっていくという、そういう音楽です。引用の原素材というのがあって、その原素材の変容というのがまたあって、変容がいっぱい重なっていくわけです。

武田　あと若手で江村哲二はこの年はじめてかな。このあと《インテクステリア》というシリーズを出しますね。作品としては90年。彼はこのあたりからオケを書きだしたのかしらね。

上野　近藤譲の主宰する室内オケ「アンサンブル・ムジカ・プラクティカ」があったでしょう。あのへんからですが、大編成オーケストラの曲はもうちょっとあとになってからですね。

武田　白石さんの評価はどうですか。

白石　私は江村のオーケストラ曲で最初に聴いたのが《時に…》です。この年の「現代日本のオーケストラ音楽」のコンサートで、先ほど名の挙がった吉松の《地球（テラ）にて》や、水野みか子のピアノとオーケストラのための《シャワーリング・メモリー》などと一緒に演奏されました。この曲自体が完成度が高いということではなくて、オーケストラの書法に力があって、これから新しい地平が開けそうだという予感を持った作品だったと記憶しています。とくに90年代前半の江村の作品というのは、結構注目していました。

武田　2000年からオーケストラ・アンサンブル金沢のコンポーザー・イン・レジデンス就任ですね。

1992

▼石田

新実徳英　《ヘテロリズミクス》
高橋悠治　《菩薩管絃電脳立》
西村　朗　《星辰神楽》
水野修孝　《交響的変容》
諸井　誠　《竹林奇譚巻之壱・斐陀以呂波》

▼上野

安部幸明　《弦楽四重奏曲第15番》
諸井　誠　協奏交響曲第3番《神話の崩壊》
佐藤　眞　《管弦楽のためのバラード》
土居克行　《ランドスケープ・オブ・ザ・ウインド》
福士則夫　フルートとギターのための《夜は紫紺色に明けて》
金田潮兒　オーケストラのための《輪廻Ⅰ》独奏尺八パートを含む
原嘉壽子　オペラ《那須與一》
中村　透　オペラ《キジムナー時を翔ける》

▼白石

新実徳英　《ヘテロリズミクス》
西村　朗　アストラル協奏曲《光の鏡》オンド・マルトノとオーケストラのための
猿谷紀郎　《息の綾》
湯浅譲二　《始源への眼差Ⅱ》
三輪眞弘　《東の唄》

▼長木

西村　朗　弦楽四重奏曲第2番《光の波》
水野修孝　《交響的変容》
川島素晴　《マニック・サイコシス Ⅰ》
猿谷紀郎　《息の綾》

▼楢崎

三宅榛名　合唱曲《かむとけの曇らふ空の》…〈万葉集より〉
西村　朗　アストラル協奏曲《光の鏡》オンド・マルトノとオーケストラのための
篠原　眞　和洋楽器のオーケストラと混声合唱のための《夢路》
一柳　慧　《汽水域》

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

武田　西村の作品がいくつも挙がっていますが、まずアストラル協奏曲《光の鏡》。彼は新しい素材に取り組むのが好きみたいだけども、この作品はオンド・マルトノのための作品ですね。

楢崎　西村は新しい楽器を独奏楽器に使ったら、オーケストレーションの語彙を確実に増やしますね。そういう新しさがあったのと、聴く前は、オンド・マルトノと西村のオーケストレーションは合うのだろうかと思っていたら、絶妙に合っていた。それは、さっき言ったように西村がオンド・マルトノの音を独自に聴き取って、それをオーケストラに反映させたことに繋がります。

白石　私もまったく同感で、《トゥランガリラ交響曲》のオンド・マルトノの音よりも、はるかにいろいろな響きがして、あっすごい、やっぱりオーケストレーションがうまい、楽器の色彩に敏感な人だなと思いました。

武田　西村の《星辰神楽》は。

石田　《星辰神楽》のほうは、国立劇場の民族芸能公演での初演です。仏教思想と古代中国の思想を構成、総合したようなコンセプトで、太陽讃、太陰讃、星辰讃という3部構成になっています。第3部が、朝鮮半島のリズム、インドのリズム、バリ島のケチャのリズム、いちばん最後のところでは、大阪天神祭のだんじり拍子が入ってきたりして、彼の持っているリズム上のボキャブラリーの総集編となっているわけですね。なかなか聞きごたえがありました。

武田　長木さんが挙げている《光の波》。

長木　これは、オーケストラをかなりたくさん書

西村　朗

いてきて、それが彼のヘテロフォニーを率直に出した作品というか、四声体だけで書こうということで、技法的な明晰さがよくわかった作品なんですね。オケなんかですと、ちょっとそろそろ常套的になりつつあるかなというのが、もう一度開けた形で、非常に明晰な形で出ていたと思います。アルディッティの演奏の質の高さもよかったんですけど、その意味で印象強かった作品です。

武田　新実の《ヘテロリズミクス》は。

石田　これは1月のオーケストラ・プロジェクト92で初演されて、それですぐに芥川賞の候補になった。前年に民音の現代音楽祭で初演された山田泉の《一つの素描Ⅱ》と競って、最終的には山田のほうが取ったわけですね。

しかし、この新実作品はなかなか完成度が高かった。オーケストラを巨大な尺八のように扱うという意図があって、彼のいままでの曲に比べると、非常に線が太く、持続力があって、音響的にもニュアンスに富んでいたという印象を持ちました。

白石　新実は、このへんからオーケストラ作品がすごく充実してきた。その円熟した書法がみえてきた最初の作品だと思ったので挙げました。彼はこの曲を皮切りに次々と豊饒な成果をあげていくことになったわけです。

武田　そして大作、水野作品の《交響的変容》。(笑)

長木　笑ってはいけない。大いなる勘違いなんですけど、でも、やっぱりあの持続力というのは、評価しなければいけないんじゃないかなと、つまり……、結局一つのことというか、出てくるものはすごく多彩なんですけど、基本的な発想は一つなんですよね。すべてを取り入れるというか、そういう信念でずっと26年間にわたってつくり続けるということは、やはりなかなか日本人にはできないことではないかと思うんですよ。結果的に4時間、すごいですね。彼の90年代の成果として挙げてもいいんじゃないでしょうかね。とくにいまさらという感じのところはいっぱいありますが、林英哲とかいっぱい出てきて、巨大なエンターテイメントですよね、言ってみれば。

武田　石田さんは主催の実行委員でしたね。

石田　ええ、副委員長でした。幕張に6000人集めて初演されたのですが、全曲完成以前に第3部までは個別に初演されていました。最後の第4部《合唱とオーケストラの変容》は、一種の総集編でした。しかし、彼自身が関心を持っていたところは、たとえば第2部の《メロディとハーモニーの変容》であるとか、第3部の《ビートリズムの変容》であり、そのあたりが、彼のいちばん狙っていたものが出ていたんではないかなと思いました。

ただ、ともかく全体で4時間かかるわけですが、その間一度も個別的な楽器のソロにあたるようなものが一切ないという、サウンド重視の珍しいオーケストレーションでした。

武田　新人としては猿谷紀郎、この《息の綾》は日本デビューみたいな作品ですね。小さな編成でしたよね。

長木　弦楽だけだった。

白石　楽器をとても自然に鳴らす人だなという印象を持って、いくつか聴いていくうちに、やっぱりそうだったという確信を持ちました。

武田　彼の方法論というのはなんなんだろうな。

猿谷紀郎

なんか日本人にあまりいままで聴けなかったような類の、一種のプレイみたいな要素が強いのかなと思ったんだけど、そのあと、あまりパッとしないな、僕の感じでは。

白石　もしかすると室内楽のほうが向いているのかなって、最近思うようになったんですけど、大編成のオーケストラを自在に操るタイプの人というよりも、メロディの美しさ、抒情的なテクスチュアで勝負するようになってきていると思うんです。やっぱりいままで聴いたオーケストラ作品なかでも《息の綾》が、私には清新に聴こえるので、この年に挙げておきます。

武田　その他、久し振りに作曲に戻った諸井の作品が2つ挙がっていますが、《竹林奇譚》は尺八独奏ですね。

石田　これは《竹籟五章》以来の現代尺八本曲です。文字通り古今東西の要素が盛り込まれています。新ウィーン楽派へのオマージュなども含まれているんですね。

長木　諸井の還暦の年に東響が「諸井誠60年の軌跡」というので初演されたのが《神話の崩壊》。

石田　そうです。それは4月の「現代日本の音楽の夕べ」でやっている。協奏交響曲で、独奏は三十絃箏とグランド・マリンバとコントラス・マリンバそれにパイプオルガンという巨大楽器ばかり。

上野　《神話の崩壊》は諸井が70〜80年代に戻ったような気がしましたけれども、こういうスーパー・マリンバと、三十絃というこれもスーパー箏、それにオルガンを使って、いわゆる空間音楽的なディスプレーの成果は充分だった。アコースティックな効果が目覚ましかった。

武田　その他バラバラなんですが、それぞれコメントのあるものを……。

石田　高橋悠治の《菩薩管絃電脳立》は、国立の伶楽公演の委嘱作品でした。たぶん雅楽にコンピュータが参加したはじめての作例です。

全体は様式化された雰囲気を持っているんだけど、コンピュータの音響が加わる中間部、舞いが加わる後半など、かなり大きな起伏があって、音響的にも現代と古代の出会いが、神秘的、かつ飛躍的に扱われていたと思います。

諸井　誠

安部幸明

上野　安部幸明の80歳の作品《弦楽四重奏曲第15番》は格別に画期的な作品ではありませんが、とにかく15番までカルテットを書いたというのは、日本人ではじめてだし、これはベルリンの弦楽四重奏団が、ベルリンで初演して、そのあと東京に来演したときに私は聴いたんですけども、ドイツ楽派の泰斗、安部の年輪が刻まれている作品です。記念碑的な意味で挙げました。

それからオーケストラ曲ですが、佐藤眞の《管弦楽のためのバラード》。佐藤は、すでにオーケストラ作品をいくつも書いていますけれども、彼はオーケストラの生理学というんですかね、オーケストラの機能美を発揮する、独自なオーケストラ力学を展開する。円熟したオーケストラ・ワークによる音響フィールドが、絵巻物語のように聴こえるこの曲。

土居克行《ランドスケープ・オブ・ザ・ウインド》は、金管バンドと打楽器のために書かれた作品ですが、日ごろ吹奏楽団がブラスバンドと誤称されているように、金管バンドのためのレギュラー曲がきわめて少ないので、打楽器セクションも加えた注目すべき作品と見ています。

福士則夫《夜は紫紺色に明けて》は、フルートとギターによる山への讃歌というデュオ曲ですが、それまでの福士作品といくらか異なる遠心的なパースペクティヴやぬくもりが感じられる。この分野の主要な現代作品として挙げておきたい。

それから《那須與一》の作曲者原嘉寿子は、まさに日本のロッシーニだと思っているんですけども、比較的短期間にに次から次にオペラを書いて、一つの筆勢がある。原オペラの特徴であるエンタ

ーテイメントの面が、この《那須與一》にもよく出ています。劇的な運びの面、展開の面では、さらに周密さがほしいと思った面がありましたけれども、音楽としては、やはりいかにも原らしい解りやすいオペラだったと思います。

中村のオペラ《キジムナー時を翔ける》は沖縄で初演でした。東京では去年だったか一昨年だったかにやりましたが、沖縄の初演が圧倒的にリアリティがありました。

これは沖縄の作曲家でなければ書けない題材であるし、沖縄でつくられなければならないオペラでした。お化けがいっぱいいる沖縄なんですけれども、伝説－現実－未来（没風景）といった遼遠な時空にわたるシーンを展開させた過・現・未の実験的オペラともいえるし、これは中村透のなかでも代表作品に選べるんではないかと思って取り上げました。

中村透は北海道生まれで、東京の国立音大を卒業して、沖縄へ定住してもう20数年沖縄に住んで、沖縄人よりもウチナーンチュですが、そういう彼の人生がよく、このオペラに発酵されていると思います。

石田　《キジムナー》は僕も沖縄で見ていまして、なかなかまとまりのいい作品だったという記憶があります。沖縄の森の精というんでしょうか、それが主人公なんだけど、SF的な時空のなかに文明批判も混じえて、地域的な問題から普遍的な話題をひき出した面白い作品でした。

楢崎　篠原眞《夢路》と三宅榛名《かむとけの曇らふ空の》はいずれも邦楽器と洋楽器を使った作品です。現代邦楽というと、尺八のむらいきのように一音への集中とか、あるいは邦楽器を西洋近代の音楽イデオムで扱う、というように二つの傾向があったと思いますが、篠原作品も三宅作品も、その二つの傾向と違って、自身の音楽語法からすっと手をのばしたところに邦楽器があった、という使い方をしています。

それから一柳の《汽水域》はフルートと弦楽合奏のための作品で、水戸室内管弦楽団の初演でした。一柳の作品では、パターンがオートマティック

一柳　慧

に動いていくときと、そうじゃなくてパターンが緊張感と推進力に化すときがありますが、《汽水域》は演奏の集中力と相まって後者の方だったんです。

白石　湯浅の、N響のMIF（ミュージック・イン・フューチャ）で初演された《始源への眼差Ⅱ》は、オーケストラを分断して扱うことを目指した作品です。湯浅のオーケストラ作品というのは、この10年ぐらい、2系列あると思うんですけれども、この曲は実験的な系列に属していて、特殊奏法をふんだんに取り入れたオーケストラ書法から生まれる、響きの乾いた感触というのが非常に斬新で面白かったです。ただ、聴き終わった後に、ちょっと整い過ぎたのかなというふうにも思いました。

湯浅は、わりあいきれいなメロディアスな作品も片やつくっているわけですけれども、一方で、こういう実験的な創作もずっと行っているのを嬉しく感じました。

三輪の《東の唄》はテクノロジーを駆使した大作です。高橋アキが初演したのですが、彼女の弾くピアノと、リアルタイムにコンピュータが作曲していく無人のピアノのパート、そこへサンプリングされた日本民謡がからんでいきます。ハイテクとローテクを織り合わせていくセンスに、三輪の独創性が感じられます。

1993

▼石田

松村禎三　オペラ《沈黙》
北爪道夫　管弦楽のための《映照》
田中カレン　《Initium》
西村　朗　《光のマントラ》
伊東　乾　《コスモストロフ　オーケストラの為の管絃／催馬楽》
村雲あや子　《黎明の時》

▼上野

北爪道夫　管弦楽のための《映照》
松下　功　《時の糸Ⅲ》
中村典子　《サクラ》
田村文生　《饗応夫人》
本間雅夫　管弦楽のための《ポリ・オスティナートⅥ》

▼白石

田中カレン　《Initium》
北爪道夫　管弦楽のための《映照》
松村禎三　オペラ《沈黙》
細川俊夫　《ランドスケープⅢ》
一柳　慧　室内交響曲第2番《アンダーカレント》
伊東　乾　《コスモストロフ　オーケストラの為の管絃／催馬楽》

▼長木

野平一郎　《挑戦への9の逸脱》
田中カレン　《Initium》
西村　朗　《鳥のヘテロフォニー》
松村禎三　オペラ《沈黙》
細川俊夫　《ランドスケープⅢ》
細川俊夫　《ヴァーティカル・タイム・スタディⅠ》
北爪道夫　管弦楽のための《映照》

▼楢崎

北爪道夫　管弦楽のための《映照》
間宮芳生　合唱のためのコンポジション第13番《白い貝の女》
松村禎三　オペラ《沈黙》
三木　稔　オペラ《静と義経》
新実徳英　《生命連鎖》
西村　朗　《鳥のヘテロフォニー》
猿谷紀郎　《ゆらら　おりみだり》

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

武田　満票というか、初めて5人が一致して挙げたのが、北爪の《映照》ですね。

長木　いい意味で熟練の手腕が見えてきた作品ではないでしょうかね。決して陳腐にも常套にもならないし、かといって、普通のオーケストラの演奏会でやって決しておかしくない。誰が聴いても、現代的な響きはするけれども、ちゃんと聴けるという、そういう非常にうまいバランスの上にたって、そういう創作の道を見つけたんじゃないかと思うんですね。ものすごく知的な感じがする作品でしたし、いろんな語法に通じているというのがわかるし、こういう作曲家の方は、言ってみれば超最前衛と聴き手を結びつけるという非常に重要な位置にいるんだと思うんですね。そういう意味では、この作品、皆さんが挙げているように、どっちから見ても評価できる作品という気がします。

石田　90年の暮れに京都で《昇華》というのを初演していますよね。だいたい作風はその延長線上にあるんだけれど、いま言われたような、たいへん端正で、固有の厳しいリリシズムを宿しており、完成度の高い作品だと思います。

楢崎　《昇華》から《映照》にいくのに飛躍があったと思います。《昇華》までは、これが北爪の音、と印象づけられるものが希薄だったんですが、《映照》ではそれがはっきりと感じられました。

武田　他の人にない、何か絵画性を感じますね。

白石　そうですね。北爪作品は、ガッガッと進んでいく動きをつくりだすのではなくて、煙がたなびくように自然に流れていく感覚というのを、いつも持っている気がする。

長木　だから、ものすごく強烈な印象や素晴らしかったというのは、僕は感じたことがないんだけど、なんか北爪の作品を聴いたというのは残るんです。そのへんが不思議な感覚なんです。

武田　あとは松村の《沈黙》ですね。

長木　これはオーケストラ作品ですね。オペラとしては、まあ何をオペラと呼ぶかということは難しいのですが、例えば歌でちゃんと続いていくような作品じゃなくて、ドラマを要所要所の語りでしかつなげていないという作品ですね。やっぱり松村のオーケストレーションがちゃんと出ていて、その意味で、歌の劇として書くよりも、もっとオーケストラに力を入れて書いたという作品だったと思うんですね。オペラとしては難点はあるし、台本も、もうちょっと何とかなったんじゃないかということがあるんですけど、それでもやはり90年代にできた音楽付きのドラマとしての活用は、充分あると思うんですね。

石田　三木稔が、前年に《ワカヒメ》を書いて、ちょうどこの年に《静と義経》を初演しています。これで5作目のオペラだったわけです。

楢崎　なかにし礼の台本がよかったと思います。音楽も、言葉がよく聴き取れるように書かれていて、その分音楽がくっきりと浮かび上がってきた。

石田　その三木の手慣れた作劇法。娯楽性もふまえた非常に歌にも富み、変化にも飛んだ、そういう舞台づくりと、《沈黙》は実に対照的な作品だったわけです。ただ、いま長木さんが言われたように、本当に目をつぶってというか、オーケストラの充実度というのは、日本のこれまでの創作オペラのなかでは類がないものであったということは、確実に言えると思うので、評価といえば、そこでしょうね。

武田　新しくはじめて出てきたのは、田中カレンですね。

松村禎三

田中カレン／写真：渡辺和

石田　《Initium》は、民音の第19回現代作曲音楽祭で初演されたもので、2台のシンセサイザーを含む編成でした。IRCAMを中心とした長期にわたるパリでの研究成果というのが感じられる、そういう作品だったような気がしますね。やや、構成が図式的だったような印象も残ってはいますが、彼女独特の透明なクリスタルのような冷たい光を帯びた、そういう響きというのは、他の日本の若手作曲家と、また違ったタイプのものだったですね。

白石　私も、小品だけ聴いていた間は、彼女の個性がよくわからなかったんですが、このシンセサイザーを使った《Initium》を聴いて、独創的な部分を認識した感じです。

長木　留学する前は三善の作品みたいな感じだったんですけど、その留学した成果はどこにあるかというと、やはりスペクトル楽派などを学んできて、そういう響きが大胆に出てきて、それでシンセサイザーとの距離感というか、そういうのが非常にうまくバランスがとれていて、コントラバスとの組み合わせのところも、あれっと思わせながら全体のなかでちゃんと生きているという感じがしましたね。

武田　西村の《鳥のヘテロフォニー》と《光のマントラ》を一緒にしましょうか。

長木　そろそろこういうオーケストラ曲は何作目かなという感じを《光のマントラ》では受けました。もういろんなものが出てきちゃってて、編成も大きかったし。

石田　たしかにこの周辺のオーケストラ作品と比べると、やや息短かったですよね。もっと彼だったら、これだけの合唱付きの編成で、圧倒的なも

のを書いたかもしれないんだけど。ただ、この三部作全体で見た場合には、いちばん、バランスが取れていた作品ではないかなと思ったものだから、三部作の最後の締めという意味で挙げました。

武田　なんかえらい物分りのいい作品だなと思ったけど。

石田　だから、何をするかということと、どうするかということは、すでに決まってつくられているような作品であったと。

武田　だから僕は、絵コンテがあって、そこからつくっているんじゃないかという気がしたのね。《鳥のヘテロフォニー》のほうはどうですか。

長木　僕は、《光のマントラ》はどっちかというと、合唱の扱いが、あまり好きじゃなかった。塗りこめられちゃってというか、響きがベタッとしすぎちゃったので、むしろこの年だったら、《鳥のヘテロフォニー》かなと思っただけで、とくにこっちが取り立ててどう違うということではないんですね。とにかく、この直前ぐらいまでの西村の、この手のスタイルとしては、演出がすごくよかった時期で、これからあとオーケストラ作品はちょっと少なくなりますよね。いろいろ委嘱を受けていた時期で、ちょっと書き過ぎているような気がしたんですね、この93年という年は。

楢崎　《鳥のヘテロフォニー》には西村の新しいアプローチを感じました。それまでは、個々のパートよりも、それらが集まった響きの方に関心が向いていたのが、《鳥のヘテロフォニー》では個々のパートをこれまでとは違った起こし方をしてみる、といったアプローチを感じさせる作品で、パートとパートの出くわし方にも新鮮なものがありました。

武田　細川の2作品は。

長木　彼はこのへんから垂直な時間というものを取り込んでいくわけですね。ラッヘンマンみたいな曲を書きはじめて、異化作用みたいなものを表面に出してくる。それが名前に直接表れた作品というのがこの作品。これはピアノ・トリオだったのですけれども、この後の作品は、こういったものと、他方では非常に持続の強いものと出てくるんだけれど、後者のほうが、この後むしろ主流になってくるんですね。もっと前は、いわゆる表出主義みたいな、そういう切れ味の鋭いのがあったんですけど、このへんから、そういうことじゃなくて、横に流れる時間とか、それから響きの静謐度とか、そういったもので勝負しようみたいなところが、すごくよく出てきた。その最初のほうの作品だと思うんですね。そういう意味では変わってきたなと思ったのは、このへんなんですね。

白石　細川の協奏曲には独奏者が人で、オーケストラが自然という発想で書かれている作品がいくつかありますけど、ヴァイオリンとオーケストラのための《ランドスケープⅢ》もその一つですね。これたしか、私、演奏もよかったという記憶があります。ヴァイオリンはアルディッティでした。

長木　野平の《逸脱》は、ライヴ音響のリアルタイム変換による作品で、ブーレーズの《レポン》、マヌリの《プリュトン》とか、まだみんな全然知らなかった。それの影響圏内にある作品だと思うんです。野平はマヌリの作品を弾いていたし、実際に本当の音響の同期的な変換というか、ライヴエレクトロニックのフィードバックした変換というのが、初めて日本人の手によって、かなり大規模な形で出てきた。それがおもしろかったのと、非常に長い作品なんですけども、単に空間のなかを動かすというアイデアだけじゃなくて、ピアノのライヴの音と、それから音響の交錯の仕方ですとか、そういったことが非常に豊かに響いてくる。だから、人にもよるのかもしれないけど、個人的には、まったく飽きないでずっと聴けた印象があるんですね。

白石　私は録音で聴いたんですけど、これはすごく印象に残っていて、野平のなかでも、重要な作品だと思います。

長木　音響のリアルタイム変換と空間移動。これをやるには、まだ日本では、ホストコンピュータが少ないんですよね。

石田　国立音大のを運ばなければならない。

長木　そういう弱点をさらけ出しちゃうような日本の、何がないかというのがよくわかるような作

品でもあった。

武田　それより問題は、コンピュータが新しくなっちゃうとできない作品になっちゃうわけですよ。

長木　ワークステーション、もう製造をやめちゃった段階で、それを他のコンピュータに移すことが、やっかいだと。演算のボードを他のコンピュータに入れるということが、かなり手間取るというか、そういう作品ですよね。

武田　上野さんの挙げられたなかでは……。

上野　中村典子《サクラ》は、ラテン語の聖なる意味と桜とを掛けた曲名で、2人のヴァイオリンによるデュオ曲だが、協調的なデュオでもなく、いわゆる対話でもない。つまり融合とも対立とも違い、あえて言えば邦楽の本手と替手といえるかもしれないが、不即不離の対位関係による新しいスタイルを同種弦楽器の併立に見出しています。これは「京都若い作曲家による連続作品展」の第XIII回で初演されていますが、彼女は京都芸大の作曲科のアナリーゼ教室で講師をしながら、今年、この作品展で新しいイデーの作品を発表しています。

田村文生《響応夫人》は、吹奏楽のための独自な音色機能と新しい領域を追究した作品として取り上げました。

本間雅夫の《ポリ・オスティナートVI》は、ポリ・オスティナートという運動シフトに着眼をして、オーケストラの新しい美学を追究していたと思います。

武田　あとはそれぞれコメントをどうぞ。

楢崎　間宮の《白い貝の女》は、合唱のためのコンポジション第13番にあたっていますが、民族臭が抜けたところに民族的なエネルギーが強靱に残っている作品です。

野平一郎

間宮芳生

新実の作品からは、前の年の《ヘテロリズミクス》ではなくて、《生命連鎖》を挙げました。《ヘテロリズミクス》では、出だしから終わりまで、細部と全体が整然と形づくられていましたが、《生命連鎖》では、そうした全体のバランスよりも、部分的なところへのこだわりが感じられました。猿谷の作品から《息の綾》よりも《ゆらら　おりみだり》を挙げたのも同じような理由からです。

白石　伊東乾の《コスモストロフ／催馬楽》。伊東の大編成の作品でいいと思ったのはこれが最初で、その前に聴いた《シルクロード》は、いいと思わなかったんです。伊東はオーケストラに新しい技法をどんどん取り入れていく筆力があるわけですけど、それまでの作品というのはその意欲ばかりが前面に出ていた感じがしたんです。ようやくそれが実りある形で作品にまとまってきたかなと思いました。《コスモストロフ／催馬楽》は、雅楽の素材をそのまま使って書いていますけど、この人は、オーケストラ作曲家だなという印象をこの作品で受けて、99年の武満徹作曲賞を受賞した《ダイナモルフィア》で、それを再確認したという感じでした。

一柳の室内交響曲第2番《アンダーカレント》は、オーケストラ・アンサンブル金沢の初演です。水をテーマにした三部作の最後のものということですが、近年の一柳のシンプルなスタイルがよく表れていると思いました。

石田　村雲あや子はかなり長いキャリアを持っているんだけど、途中からガラッと作風が変わったんですね。たしか松平頼暁に師事した後のことで、以来国際的にもいろいろ作品を発表する機会をつくっています。次の年にもオーケストラ作品を彼女は書いているんだけれど、この《黎明の時》というのは、弦の大きなうねりから激しく厳しいクライマックスが形成されて、それがカオスに突き進んでいくという強さを感じさせる作品だったと思います。

武田　力ある人で、この年は充実していましたね。

1994

▼石田

藤家渓子　《思いだす　ひとびとのしぐさを》
伊左治直　《畸形の天女／七夕（しちせき）》
福士則夫　《大原御幸》
北爪道夫　《悠遠》―鳥によせて―
三輪眞弘　箏とコンピュータのための《曙継承》
南　聡　《からくり草紙》
高橋悠治　《狐》～七段構成による音楽行法

▼上野

北爪道夫　《悠遠》―鳥によせて―
まえだしゅいち　オペラ《おなつ せいじゅうろう》
三木　稔　フォーク・オペラ《照手と小栗》
大前　哲　《シームズ：ダブル・トークNo.24》
佐藤　眞　オペラ《犀》
吉松　隆　《サイバーバード協奏曲》

▼白石

野平一郎　《夜のモノローグ》
湯浅譲二　《ピアノ・コンチェルティーノ》
伊左治直　《畸形の天女／七夕》
田中カレン　《Wave Mechanics》―20人の奏者のための

▼長木

伊東　乾　《フェスティーナ・レンテ》
伊左治直　《畸形の天女／七夕》
吉松　隆　《サイバーバード協奏曲》
高橋悠治　《狐》～七段構成による音楽行法
團伊玖磨　《素戔嗚》

▼楢崎

藤家渓子　《思いだす　ひとびとのしぐさを》
一柳　慧　《私の歌》
池辺晋一郎　《ストラータⅣ》
伊左治直　《畸形の天女／七夕》
湯浅譲二　《ピアノ・コンチェルティーノ》

❖❖❖❖❖

伊佐治　直

武田　わりと皆さんの票が集まっているのが伊左治《畸形の天女／七夕》、これはデビューみたいなものですね。これからいきましょう。

楢崎　日本音楽コンクール本選会で初演されて、その翌年、芥川作曲賞選考演奏会で演奏されたんですが、選考委員の方々がおっしゃっていたことがそのまま当てはまると思います。特殊奏法をいっぱい使って、特殊奏法のみでコンテクストを導いている、と評価されていました。普通、特殊奏法を巧みに使って部分的にはハッとするところがあっても、全体を導くときには一般的な形式形成と妥協してしまいがちなんですが、そうならなかったところが評価できる点です。

石田　そのフルートとオーケストラの関係がとてもよかったんじゃないかなと思います。まあ彼の想像力に応え得る木ノ脇道元という演奏家が出てきたということで、タイミングが良かった。大井浩明がその前の年にピアノ作品を集めたりしていますよね。新しい作曲家も出てきたんだけども、演奏家にも、という状況ですね。ちょうどこのあたり。

長木　伊左治はものすごく独特の響きで出てきた、最初から、日本人ばなれしているというか、そういう世代の一人ですね。それは僕の感覚にすぎないんですけど、なんかこういう人はいままでいなかったというような出方を、音の響きの面でしていて、それをずっと続けているという、その最初の作品ですね。それがものすごい強いインパクトを持っていた。

そのあと書いた作品のいくつかは、それがどうも空回りしてきちゃっているようなところがあるんですけど。

白石　伊左治は自分の作風を円熟させるというようなことにぜんぜん関心がないですよね。自分のやっていることを、一つ一つ終わらせていくという感覚をすごく持っていて、だから次々出てくるものがまた、違うことをしているというふうな印象を私は強く持ちます。それでいろいろやってきてどうかというと、中ではこの最初の衝撃的な作品がやはりいいですね。

武田　あと北爪の《悠遠》。上野さんどうぞ。

上野　これは良寛の宇宙観に共感して作曲され、良寛の短歌6首、季節の鳥をキーワードにして選んでいますが、それを3人の声で、というのは2人が長唄の声、それからもう1人は琵琶を弾きながらの琵琶歌の声ですね。それから箏と十七絃と尺八と打楽器という編成によるアンサンブルの多様な音色で、声たちを取り巻きます。国立劇場の委嘱作品で、国立劇場でのほかでも再演しばしばの作品です。北爪の美学とコンセプトがここに集まっている、といって、決して凝結した硬い作品ではなくて、中空に浮かぶオブジェのような音がきわめて自然な形でただよっている。気持ちいい作品です。

石田　良寛の和歌集から、季節の鳥を歌った6首の短歌をテキストとして取り上げたということ。唱法、語り方の幅がなかなか多彩で、楽器の音触感もとてもみがかれている。

武田　《思いだす　ひとびとのしぐさを》は尾高賞を取った作品。これはなかなか面白かったですね。

楢崎　その前から藤家の音楽は面白いと思っていましたけれど、アイデアを敷衍する過程でもの足りなさを残すことがあったんですが、この《思いだす　ひとびとのしぐさを》ではアイデアが次から次へと出てきて、その、いわば散漫さがスタイルになっていた点で飛躍的です。

石田　この語り口の柔軟さは独特ですね。

武田　僕はあの色彩感がすごく印象的でした。次に吉松の《サイバーバード》。

上野　これはサキソフォン協奏曲ですね。これは何としても須川展也という卓越したサキソフォン奏者が存在してこそ、このサキソフォン協奏曲が成立するわけで、こういうのこそ、本当にコラボレーションでしょうね。

長木　そうですね。僕もまったく同じ感想です。サキソフォンというのは完全にクラシックの楽器というわけではないので、そういったものを吉松がうまく彼の創作の文脈に取り入れたという感じですね。だから、変にこう、たとえばファゴットを使ってなんかエンターテイメントをやるのではなくて、サックスだから成り立っているような、そういう危うい作品の感覚というのはありますね。

白石　私は挙げなかったけど、吉松の作品のなかでは《サイバーバード》は好きです。須川が素晴らしいということがあって、そこから自然に発想されている感じがします。

武田　池辺の《ストラータⅣ》、これはどうでしたか。

楢崎　《ストラータⅣ》はオーボエとコントラバスという違うタイプの楽器を使っていて、同じ楽器のように奏法や音域が接近し合ったり、異質な特徴を強調したり、コンセプトの明快さを越えて音が生き生きしているところがいい。

武田　湯浅の《ピアノ・コンチェルティーノ》。

楢崎　ピアノ協奏曲という演奏形態を選んだことに古典的な作風に戻るということが示唆されていますが、湯浅の前衛的な姿勢が古典的な演奏形態に反映されています。この《ピアノ小協奏曲》は、古典的な面が取り沙汰される傾向にあるんですが、そうじゃなくて、湯浅の前衛的な作品から繋がる部分を評価すべきです。

白石　私はピアノのパートにすごく感動しました。

石田　ピアノを自分で全部弾きながら書いたと言っていた。

武田　あとは悠治の《狐》ですか。

石田　「身体作法としての音楽行法」をテーマにしたコンサートでした。中世の神仏習合の世界を扱った山本ひろ子の「変成譚」のなかに《狐》の部分があって、それを一種の儀礼のモデルとして音楽化するんですね。

儀礼とか儀事、祭事は、《たまおぎ～楚辞祭祀劇》という、73年の作品で彼は試みたことがある。

前作と違ったのは、パフォーマンスとしての様式化ということではなくて、ここでは現在の絃のアンサンブル活動に続いているのだけど、伝統的な歌唱法だとか、楽器の演奏法として伝承されてきた音楽的パフォーマンスとの新しい出会いがテーマになっていたと思います。

長木　パフォーマンスとして、どれくらい引きつけるものがあったかというと、わからないんですけれども、一つひとつの楽器の身体的な弾き方というんですかね、身体に密着させた形での楽器の弾き方というのが、いまどうあるのかといいますか、そういうものを初めて（このあと《音楽のおしえ》なんかにもつながってくると思うんですけれども）、かなり意図的にそれを出したものだと思うんですよね。

たとえばこのあと、ピアノを弾くときにも、五線を使わなくなったりとか、体で覚えたことを一回忘れて、それをもう一回現実に戻してやったときに、それはどう変化するかとか、そういったような問題を彼はやりはじめていて、そのときに、たとえば音楽を一緒にやるということが、どういうふうな根源的な欲求とか、身体的な欲求につながっているのかということを、かなりコンセプチュアルに問いかけている。それが頭ではわかるんだけど、実際に見ると、どうもついて行けない部分というのがあるんです。この作品に限っては、もう狐つきの話でしたから、まあそれは狐につままれたままでいいんだろうというふうに、うやむやにして評を書いた記憶があるんですけど。

でも、そういう彼のこの時期からの創作活動というか、演奏活動と創作活動と並行しているものだと思うんですが、そういうものがいちばんはっきり現れた作品として意義があると思いますね。

武田　あとは皆1人の推薦ということで、それぞれコメントしてください。

上野　前田守一は、“まえだしゅいち”という平仮名ネームで、かなりの舞台音楽作品を書いていて、ずっと京都を本拠に活躍している作曲家で、あまり東京では知られていないのですが、私が挙げたオペラ《おなつ　せいじゅうろう》は、お夏、清十郎の比翼塚がある姫路で初演されました。作曲家の丹精とか三昧とかをひたひたと感じさせる新作オペラでしたが、とりわけオーケストラの筆力が大きく、正味3時間のグランドオペラを確実に支えていました。

三木稔の《照手と小栗》は、名古屋の初演を見ました。これは音楽劇と言っていいのか、ミュージカルと言っていいのか、少なくともオペラではないんですが。「小栗判官」という説経節の題材による台本で、主役はソプラノとテノールですが、バスバリトンとバスのソロ、4人四部の声、その上に合唱があって、踊り手が配される。器楽は、金管六重奏というのがユニークで効果を上げていた。それから打楽器が2人。それからヴァイオリンとチェロと、二十絃箏と尺八。それらがオーケストラボックスにいるのじゃなくて、舞台を遠巻きにぐるりと囲むように巡らしているんですね。この3ブロックに分かれた器楽アンサンブルが、空間の濃度を変えながら、登場人物とトータルされて進むわけ。説経節といっても、現在ほとんど接する機会がない古芸能ですが、この独特な語り音曲が、浄瑠璃の原点、放浪芸の先駆といえるもので、それを実感させてくれた独特な舞台作品として挙げました。

関西で主に活躍している大前哲の《シームズ》という、クラリネット2本の曲。クラリネット・デュオの曲って、あるようで無いんですが、「ダブル・トーク」というシリーズを彼は20何年も書いてきて、つまり「ダブル・トーク」というのは、同一、または似た楽器の二重奏なんですが、その、24番目の曲が《シームズ》という曲。この曲で一つの結論に達してという作品、これを初演したのは四日市ですが、浜中浩一と二宮和子の夫妻でやるために大前哲に委嘱した、興味深いデュオ曲でした。

それからまたオペラ、佐藤眞のオペラ《犀》、これは広島で初演されました。やや一般的でないとも言えるんですけど、イヨネスコの不条理を扱った戯曲「犀」をもとにしております。まえだ純が台本を書いた、日本の創作オペラでは珍しく知

的なディスプレーで、佐藤眞は無調的手法を貫きながら豊かな音楽的シテュエーションをつくりあげていました。

楢崎　一柳の《私の歌》は「新しいうたを創る会」の委嘱作で、ソプラノとマリンバのための曲です。一柳がメディアの始源にさかのぼるというときには、土俗的なものも抜き取ってさらにさかのぼるという意味ですが、そのコンセプトが納得できる曲でした。シラビックに旋律化されたソプラノと、華麗な名人芸に向かうのでなく一音一音叩くマリンバとが淡々とアンサンブルするなかで、ソプラノのクリスタルな声と、マリンバの弾性のある打音との戯れが魅力的でした。

白石　野平の《夜のモノローグ》はジョイスの言葉を使っていて、東混で初演された作品でした。それまでの野平の器楽曲とはちがって、繊細な中にユーモラスなところがあった曲でした。フルートが合唱への導入とかオブリガードをつとめる作品で、言葉を普通に歌う声部、断片をかけ合う声部、物語る声部が自在に交代し変化していくんですけれども、なんか言葉がふつふつとわき上がってくる場面に立ち会っているような、面白い合唱曲でした。

武田　今年大阪でやったんですね。やっぱり彼独特のテクスチュアというのがあるみたいですね。

石田　前年に国際コンピュータ音楽会議（ICMC）の初の日本大会があったわけですけど、この年その流れを受けて、野平一郎、三輪眞弘、藤枝守、嶋津武仁らが継続して作品を発表していました。

三輪眞弘の《曙継承》というのは、そういうなかではいちばんコンセプトが変わった作品だったんですけれど、これコンピュータが具体的に音色とか音響面に関わるというんではなくて、もっぱら合成音声で、箏のパートの進行状況を受けながら、箏の次の奏法を指示するという、そういうアイデアの作品でしたね。

演奏者との理解というか、反応というか、そういうものが要求されるわけだけれど、この初演のときにはコンピュータと箏奏者のかなり刺激的な対話というのが聴けたように思いました。演奏したのは沢井忠夫の門下の十七絃の高田香里です。

長木　僕は團の《素戔嗚》をここでは挙げたい。やっぱりなんのかんの問題はあるにしろ、あれだけのグランドオペラという、いまどき時代錯誤的なものを、あの規模でできるいろんな意味（音楽的なものだけではなく）での力というのが團にはある。とくに《素戔嗚》の場合は、これも團の信念なんでしょうけど、古語を使ってオペラを書きたいと、それがどれぐらい成功しているかとか、わかりにくいじゃないかとか、あるいは古語を使うこと自体、作品の上でどれくらい新味があるのかということは問題ありますし、それから3時間ぐらいのオペラを持続するだけの音楽の語法の力というのは、さすがに團にはもうないとは思うんですけど、とくに前半部分で、オペラがはじまって最初の1時間ぐらいは、かなりそれなりに緊張感が保てたような気がするんですね。途中2幕ぐらいから、やっぱりどうしても散漫になってくるというか、それは否めないんですけども、あの世代の人がグランドオペラというものに持っている執念とか価値観というものが、非常に端的に表れたものですね。やはり彼の日本を思う気持ちが非常によく表れて、そういう意味では、やっぱり彼のこの時期の代表作であろうと思います。

もう一つ伊東乾の《フェスティーナ・レンテ》ですね。これはもともとスライド・トランペットとフルート用に1回やっていて、それを今度オーケストラ・バージョンでやったものです。両方とも同じ年なんですけど、東フィルの定期でやっている。これはかなりコンセプチュアルな作品なんですね。彼のその後の動力学的音楽論みたいなものの出発点になっているような作品で、スライド・トランペットという楽器があって、それのリアルタイム変換というか、音楽家同士のインターラクティブな音の移り具合、移り変わりというのを追究した作品なんですね。音としては、必ずしも成功しているとは思わなかったんですけど、彼の出発点として、インターラクティビティみたいなものを、初めて取り入れた作品としてここに挙げました。

1995

▼石田

松平頼則　モノオペラ《源氏物語》
三木　稔　オペラ《隅田川》
三木　稔　オペラ《くさびら》
湯浅譲二　交響組曲《奥の細道》
平石博一　《ドリームスケイプ》
高橋悠治　《音楽のおしえ》
新実徳英　《魂の舟》――葬送の音楽

▼上野

平石博一　《ドリームスケイプ》
川島素晴　《ポリプロソポスⅢ》
中村典子　《マナ》コロラトゥーラ・ソプラノのための
吉岡孝悦　《マリンバ協奏曲第1番》
肥後一郎　《巫女譜》
下山一二三　弦楽オーケストラのための《だぶりっじ》

▼白石

金子仁美　《フルート協奏曲》
林　光　ヴィオラ協奏曲《悲歌》
高橋悠治　《音楽のおしえ》
池辺晋一郎　《照葉樹林》
湯浅譲二　交響組曲《奥の細道》
権代敦彦　《怒りの日／嘆きの日》

▼長木

林　光　ヴィオラ協奏曲《悲歌》
高橋悠治　《音楽のおしえ》
野平一郎　《室内協奏曲第1番》
権代敦彦　《フーガ／ストレッタ》
金子仁美　《フルート協奏曲》
平石博一　《ドリームスケイプ》

▼楢崎

権代敦彦　《怒りの日／嘆きの日》
金子仁美　《フルート協奏曲》
寺嶋陸也　《尺八・二十絃箏と管弦楽のための協奏曲》
山本純ノ介　《紅焔》中国琵琶とオーケストラのための

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

武田　まず新人の金子仁美の作品から。

楢崎　以前、金子の作品を聴いたときは、課題のなかできちんと書いている作曲の学生という印象だったんですが、《フルート協奏曲》では音をじっくりと意志的に選んでいて、作家になっていました。

白石　金子は、周りに影響されず自分の書法のエチュード的なことをずっと続けている感じですね。この《フルート協奏曲》は、私はそんなに成熟した作品だと感じたわけではないんですけど、非常に理知的に考えたことを音の上できちんと表現していて、派手ではないけれども、しっかり書くという姿勢がはっきりと見えました。このあとの室内楽なども同じような形で続けていますから、そういう意味で金子の作品の中でも最初に私の印象に残った曲です。ひと言でいえば個性的になったということかもしれないんですけど、自分の歩みをはっきりわかっていて、考えたことをきちんと音にする、その仕方が手堅い作品でした。

長木　僕もお2人のおっしゃったのとまったく同じです。三善の門下とは思えないような作品でした。技法的にもかなり先端的なことをやっている。若いからできるような部分もあるし、なかなかそういった意味では力量もあるし、冒険もあるしと。

武田　3票というのが、高橋悠治の《音楽のおしえ》だけども、これは94年の《狐》とは違いがはっきり出てくるということですか。

石田　「脱欧入亜」が一層鮮明でした。これは舞楽法会を模したミュージックシアター作品で、チベット仏教から空海まで網羅したテキスト。思想

性が先行したことは確かだけど、大がかりなものでした。

白石　このときは結構観客というか、聴衆は舞台上の儀式から取り残されている、そういう感じがしました。

長木　正直言って、僕は全体のなかでちゃんと音楽として共感して聴けるのは、ほんの10分ぐらいなんです。だけど、そのテキストの目配りとか、そういう意味ではさすが現在最高の頭脳だなという感じがして、理論先行とは思うけれども、でも、先程言ったような、彼の創作の一種の集大成だと思うし、コンピュータを使った環境的な音の使い方の最後の作品だろうと思う。

武田　平石の《ドリームスケイプ》も3票ですね。

上野　平石の新しい領域を見たような気がして、それと同時にまたオーケストラ書法にも新しい発見を示唆していると思って取り上げました。

石田　ミニマルからポストミニマルへと歩んできた作曲家ですけど、一貫して追求してきたアイデアが、オーケストレーションの工夫と結びついて成果を上げていたと思いました。ちょっと変わっていたというのは、第2楽章のところで、一種の雅楽風の音響とかテクスチュアとかが出ていたことだと思います。

武田　次に林光の《ヴィオラ協奏曲》。

長木　これは水戸での初演です。ヴィオラの書法として、今井信子の深い歌というか、それをうまく前に出すことができた。書法的にはちょっとヤナーチェクみたいな感じなんですけども、林が書いた中規模アンサンブルの曲といいますか、そういった意味で印象に残っています。大作品ではないんだけども、なんかどこかしみじみと心に残る歌があって光っていたんです。ヴィオラとそれが非常によくマッチした、完成度の高い作品ではないかと思います。

林　光

白石　やっぱり今井信子のヴィオラのイメージが、曲に色濃く反映されている。そういう意味でよく演奏と作品が一体になった初演だったと思います。

武田　湯浅の《奥の細道》。

石田　《芭蕉の情景》から続いているシリーズで、かなり描写風にだんだんなってきた感じです。僕は最初の《芭蕉の情景》がいちばんよかったと思う。

武田　あとはだいたい1票ずつなんですが、楢崎さんは。

楢崎　権代は音づくりの独特さでデビューして、そのあと宗教的なテキストを伝えることに移っていきましたが、《怒りの日／嘆きの日》は、宗教的なメッセージと音の探究とが焦点を結んでいる作品だと思います。

寺嶋陸也の《尺八・二十絃箏と管弦楽のための協奏曲》は、とくに二十弦箏から流暢にさらさらと音が繰り出されるんですが、一つ一つの音に存在感がある作品です。

山本純ノ介の中国琵琶とオーケストラの協奏曲《紅焔》では、中国琵琶がトレモロに徹していて、オーケストラも楽想が混在しないですっきりしていました。

武田　権代は、いままで語られていないですね。95年の権代は《夜の祈り》《神の子羊》《オッフェルトリウム―聖マリア大聖堂のために》……とたくさんありますが、石田さんは何が印象的でしたか。

石田　権代は東京カテドラルで「祈りの空間、祈りの時間」という個展を開きましたが、そのときの《オッフェルトリウム》はたいへん印象的でした。

一つは響きのこと、一つはテーマの上でのことになると思うけれど、カトリシズムを前面に打ち出した確信をもった単純さと、それに鎧を着せたようなゴシック的な重厚さは、いままでの日本の

作曲家にない性格を強く主張していると思います。

この点から、カテドラルを使った個展ということも、オルガニストにジグムント・サットマリーを招いたことも含めて、かなり国際色を帯びた性格の個展であったと思います。

白石　私が《怒りの日／嘆きの日》を聴いたのは96年ですが、やっぱり権代がこの作品で出てきたときに、他にはない個性の持ち主だと思いました。題材がそもそも宗教的で、キリスト教の信者であることを前面に打ち出していて、しかも第2次世界大戦後にあっては抒情的に神をたたえることはできず、軍隊の行進を思わせる不気味な足ぶみを交えた、ああいう形で信仰を表現せざるをえなかったということも、加えて衝撃的でした。音ばかりでなく。

武田　石田さんはほかには？

石田　合唱でたいへんたくさんの作品を残している新実徳英が、40分ほどかかる5楽章作品の大作の《魂の舟》というのを書いています。谷川雁の「中世風」という詩をテキストにし、ラ・フォリアを音楽素材とした楽章を除くと、全体的に抽象的で、言葉が昇華されて、思念が結晶化されたような、そういう意味で、合唱の限界に挑んだような力作であり、熟した合唱曲であったと思います。

あと舞台作品で、三木稔の組オペラ《隅田川》と《くさびら》を挙げました。これは要するに能と狂言の古典に題材を得た小室内オペラということで、実際には《隅田川》のほうは、ブリテンの名作もあったりもするし、狂女を扱うそのテキストの現代性には問題はあるかも知れない。しかし、《くさびら》というほうは、たいへんさっそうとしていて、こういう室内喜劇、言い方をかえれば狂言の世界を小室内オペラにするということにおいて成功した作品ではないかなと思っています。

松平頼則の《源氏物語》は、オペラと言っても、ほぼシアターピースというか、筋書もあるとは言えないし、連作歌曲風の舞台作品ということでしょうね。でも、これ以降松平はまた非常に活気が出てくる、そういうものの予兆というか、前奏曲というか、そんな感じもありました。

武田　長木さんは？

長木　野平の《室内協奏曲第1番》。彼の独特のオーケストラの扱いを初めて見たという感じもしたんですけれども、たぶん彼だったら、実験的なことをいろいろやると思ったら、そうじゃなくて、むしろ響きの上で、それこそ音響スペクトルみたいなものを使いながらやっているわけで、アンサンブル金沢というのは、普通のオーケストラですから、逆に素材を限定してやっていたので、野平の普通の音の言語というのがわかったという感じがします。とくに彼の全体のなかで、これが重い作品だというのではないですけれども、そういう意味で挙げておきます。

武田　上野さんは挙げられたなかでとくに何かありますか。

上野　川島素晴の《ポリプロソポスⅢ》は、彼のパフォーマーとしての思想を織り込んだ作品ですから、いわば自作自演みたいなリアリゼーションになる。もう一つは、ゼフィロスというスライドの付いたトランペットの、曽我部清典を特定の演奏家として入れているんです。だから、ヴァイオリンとトランペットと篳篥とティンパニと歌です。彼のパフォーマーとしての才能が発揮された作品でもありました。

それから中村典子の《マナ》。最近では、東京でも作品を披露する機会が多くなりつつありますが、京都芸大でアナリーゼ科の講師を務めてきた廣瀬量平の愛弟子です。これは、ソプラノの無伴奏独唱で、高いd音まで要求するベルカントを基本にしながら、ヴィブラートをなるべく排して、インストルメンタルに「まな」つまり、真とか愛をメッセージしようという、ユニークな曲でした。

吉岡孝悦《マリンバ協奏曲第1番》は、マリンバ奏者としての技巧的でスケールの大きい作品。

肥後一郎《巫女譜》は、声を扱った曲が極度に少ない現代邦楽のジャンルで、弾きうたいよりも弾き語りといえる形の箏歌として新生面を示唆した忘れられない作品でした。

1996

▼石田

新実徳英　《宇宙樹》―魂の路
江村哲二　《プリマヴェーラ（春）》
藤家渓子　モノローグオペラ《蠟の女》
林　　光　オペラ《セールスマンKの憂鬱》（のちに《変身》と改題）
柴田南雄　《人間について》（三部作）
藤枝　守　《植物文様》第1集～第5集

▼上野

和泉耕二　尺八と弦楽四重奏のための《異系の譜》
金田潮兒　《色即是空・Ⅱ》―尺八とオーケストラの為の
小鍛冶邦隆　《デプロラシオンⅡ》
新実徳英　《宇宙樹》―魂の路
藤家渓子　《クラリネット協奏曲》

▼白石

藤家渓子　モノローグオペラ《蠟の女》
柴田南雄　《人間について》（三部作）
川島素晴　《デュアル・パーソナリティーⅠ》
高橋悠治　《インソムニア（眠れない夜）》
林　　光　オペラ《セールスマンKの憂鬱》
湯浅譲二　《ヴァイオリン協奏曲　イン・メモリー・オブ・武満徹》
三善　晃　チェロ協奏曲《谺つり星》
野平一郎　《時の三重奏曲》

▼長木

川島素晴　《デュアル・パーソナリティーⅠ》
細川俊夫　《夜の響き》
野平一郎　《内なる旅》
林　　光　オペラ《セールスマンKの憂鬱》
川島素晴　《cond.act/konTakt/conteresteⅠ》
細川俊夫　《遠景Ⅱ》

▼楢崎

江村哲二　《プリマヴェーラ（春）》
池辺晋一郎　《木に同じく―チェロ協奏曲》
川島素晴　《デュアル・パーソナリティーⅠ》
新実徳英　《宇宙樹》―魂の路
湯浅譲二　《ヴァイオリン協奏曲　イン・メモリー・オブ・武満徹》
細川俊夫　《うつろひ・なぎ》

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

武田　96年にいきます。3人が挙げていらっしゃるのが川島素晴《デュアル・パーソナリティーⅠ》。これも芥川作曲賞でしたね。この作品はどうですか。《cond.act/konTakt/conteresteⅠ》と一緒に。

長木　彼のパフォーマーとしての面が、そこここに出ているという作品ですね。非常に演劇的と言ったら、彼は怒るかもしれませんけども。《デュアル・パーソナリティーⅠ》は、ちょうど音楽コンクールで入ってきて、譜面審査で通って上演されたんですね。とても演奏できない箇所がいっぱいあって、とくに打楽器の持ち変えなんか無理なので、そういった意味では、かなり未完成な、実際の演奏のことは考えてないと。ただ、できないということが、一つのパフォーマンスとしてあり得ると言いますか、そういった作品だろうとは思うんです。だから、そういった意味では、川島の特性がすごくよくわかる作品であろうと思うんです。

それから《cond.act/konTakt/conteresteⅠ》は、いわゆるお笑い作品という感じもするんですけど、一人、川島が指揮をして、それから打楽器の神田佳子が応じるということで、最後は指揮者が倒れて運ばれるというようなストーリーのものですね。愉快な作品で、ちょっとカーゲルなんかの作品に似ている。どぎつい笑いみたいなものが、これ以外の作品にも入っているわけですが、カー

ゲル的なものを、彼自身がかなり拡大して作品に取り入れている。それを一緒に自分でやってしまうときに、ちょっと神がかり的なというか、物につかれたような感じでやるという、そのへんが面白い作曲家でしょうか。ものすごく個性的な人ですよね。その個性がよく表れているし、表そうと努めた作品じゃないか。

楢崎　川島は、作曲とは何かをより根本的に考えている。実験主義的な態度で、作品とは、作曲とは何かを考えていて、彼の同世代のなかでもユニークな存在ですね。

長木　いろいろなことをやっていますよね。あの若さでいろんな作曲家の作品を知っている作曲家というのは、すごく珍しいと思うんです。ただ、それが創作に反映されるかどうか、あるいはどう反映されるかというのは、また別問題ですけどね、もちろん。

楢崎　出てくる音自体は、60年代の実験主義をどう越えたかというと、ちょっと難しいんですけど。

武田　それとは、ちょっと違うんじゃないかな。

白石　神田をソリストとしていたから、《デュアル・パーソナリティー》では独奏パートにわざとできないことまで書いたんですよ、意識的に。それをどう必死になって演奏するか、音だけじゃなくて、舞台で彼女がどう見えるかということも計算してつくっている。これは日本音楽コンクールでは2位でしたね。

長木　弦楽器のところも同じなんですよね。例えばヴァイオリンがつながっていくんですけど、そこでも譜面に書かれてあるのは絶対無理で、かなり遅くしかできなかった。だから、そのへんを彼の頭のなかで鳴る音楽と、ちょっと齟齬があるかなという気はしますね。

白石　でも、遅くないとできないと、彼自身もわかっているんでしょう。

長木　それはそうだと思いますけど、でも、オーケストラパートは、そこまでする必要はないんじゃないかと。

武田　99年の新作《マニック・ディプレッシブⅢ》も、ずいぶんカットされたでしょう。

白石　その曲でも、川島本人が自分から進んでパフォーマンスをやっているけれど、ちょっと川島が出ると、舞台のなかで、そこだけがなんとなく異質な感じがしませんか。ちょっとプロじゃないというか。

長木　ああいう人がいっぱい出てくればいいんでしょうけど。音楽的演劇みたいなものというのが、ようやくアッケラカンとできるようになったという感じもするんです。

武田　林の《セールスマンKの憂鬱》、これはいま《変身》に改題されてます。

長木　この前、CDが出てましたけど、CDで聴くと、なんじゃこりゃという感じなんですね。そういう意味では、極限的にこんにゃく座が演じている作品だと思いますけど。

白石　私もやっぱりこんにゃく座が演じて初めて面白いという作品だと思います。

武田　それから新実の《宇宙樹》。これは名古屋フィルの創立30周年で東京でも公演されました。上野さんからどうぞ。

上野　彼のオーケストラ作品はかなり聴いているんだけども、いつもサウンドがそっ気なく周りに客観化するばかりでしたけど、この《宇宙樹》というのは、彼が肉声で、等身大で表現しているような気がしました。また、独奏の二十絃箏が有効なメディアであったせいもあって、わりあい共感の持てた作品でした。

楢崎　二十絃箏の独奏は野坂恵子だったんですが、技巧的に書かれていて、そういう特徴のある音を切り口にすると、新実のオーケストレーションは鋭敏に動いていきますね。

石田　彼はその次にも充実した《焔の螺旋》があるわけで、さっき上野さんが言われたように、このあたりで急速にオーケストラ作品のオリジナリティが高まり、自分の響きが出てきたという感じがありますね。これも、なかなかスケールの大きい、生命力のある作品だったと思います。

長木　この前サントリーの個展で、4作を続けて聴きました。4作目はだいぶ違ったんですけど、最初の3作は、もう古典だという印象です。クラ

イマックスのあとには必ず弦だけ残るとか、そういう常套手法の陥穽にはまってしまったというか。けれどもこの《宇宙樹》は、僕も面白いと言ったんですよ。ソロパートもすごくよかったし、ソロとオーケストラとがバランスよく響いていた。

武田　藤家渓子の《蠟の女》をどうぞ。これは白石さんと石田さん。

石田　彼女は、これが評価されて、中島健蔵音楽賞を取りました。スペイン語上演で、チリのノーベル賞詩人のガブリエラ・ミストラルの生涯を題材にしたモノローグ・オペラです。多彩な様式引用が含まれているけれど、それによって音楽的には雄弁になっており、非常に情念的な激しい女の生涯を描き上げていたと思います。

白石　彼女は続けて編成の小さなモノオペラを書きましたが、私は1作目の《蠟の女》はいいと思いました。いろいろなスタイルの引用を、こういう形で劇に生かしていくというのは、一つの面白いやり方、可能性のあるやり方だなと感じました。それから簡素な演出で、ホールの規模も中規模で、全体が非常にバランスの取れたできの上演でした。テーマも面白かったんだと思うんですけれども、スペイン語上演なのに字幕なしでも楽しめたという記憶があって、あったほうがよかったという意見も後で出たと思いますが、音楽をああいうふうに、スタイルをいろいろ混合して使っていくことで、直接歌詞がなくてもストーリー展開が見えやすい構成になっていたというふうに思います。

武田　同じ藤家の《クラリネット協奏曲》は。

上野　クラリネット協奏曲をなぜか日本の作曲家はあまり書いてないようです。クラリネット入りの室内楽作品は別ですけれども。この《クラリネット協奏曲》は、藤家の独自な書法とマルチな様式を自分のものとした、力倆の作品といえるでしょうね。

武田　次に、柴田の《人間について》ですが、これは作品としては、作品リストにないんですよね。非常に特殊なケースです。

石田　《歌垣》と《生の種々相》と《人間と死》の三部にまたがっていますよね。実に壮大な作品だったと思います。

柴田南雄

武田　彼が80年代に残したコンセプトがあり、それに従って、田中信昭がリアライズしたという作品なんですね。彼の作品をいろいろコラージュしていくという形で、彼の《宇宙について》とか、いままでの作品をまとめて《人間について》というものにしたわけです。だから、素材についても、彼が指定しているところもあるし、していないところもたしかあったと思いますね。

白石　改めて、題材の幅広さとか、考えていることの壮大さとかということに圧倒されたという感じです。

楢崎　ただ、実際の音になったものを聴くと、どうしてもインパクトが弱いんですよね。

白石　もしかすると、コンセプト先行なのかしれないですね。長木さんは、批判したんですね。

長木　柴田は本当に歌が好きなんだなという感じがしちゃいましたが、結局、合唱を使ったシアターピースと限定されたものだし、それから歌のスタイルというのが、ずっと変わらないというか、柴田の求めたいものは、もっといろいろあったのに、なぜこういうアマチュアの合唱団になっちゃうというか、手法になってしまうのかが、どうも僕はピンとこなかったんですね。

武田　次が湯浅譲二の《イン・メモリー・オブ・武満徹》。ヴァイオリン・コンチェルト。これは、白石さんと楢崎さん。

楢崎　94年に挙げた《ピアノ・コンチェルティーノ》と同じような評価になるんですが、ピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲という古典的な演奏形

湯浅譲二

態のなかに、湯浅の前衛的なイデオムが反映されているのがいいです。

白石　私は、92年に挙げた湯浅の《始源への眼差Ⅱ》に比べると、ノスタルジックな感じがして、武満を追悼する気持ちが強く表れていると思いました。ただ私はこの作品のなかに、前衛的な手法を見つけることができなかったので、完成度が高い作品だし、演奏もよかったと思ったんですけど、湯浅の音楽に私が求めているものとしては、ちょっと物足りなかった。

武田　三善の《谺つり星》は不思議な作品で、湯浅作品と同じコンサートのライヴがCDになったときに三善が嫌だと言って入ってない。

三善　晃

江村の《プリマヴェーラ》にいきます。芥川作曲賞の委嘱ですね。

石田　彼の特徴であるけれど、やはりアジア的な湿度というものを取り除いたような、きわめて爽やかな色彩の揺れが、この芳醇な詩の内容と融合していました。新しい世代を感じさせる音楽であったという印象ですね。

楢崎　デビュー当時から力のある人だと思っていましたが、そのあとオーケストレーションが巧みになっていって、しかもただ巧みになるんじゃなくて自身のオーケストレーションを使って何を言うかを吟味するようになる、その入口にある作品と思います。音の運びはゆっくりで、楽器がまさに春爛漫を思わせる芳香を放っているような作品でした。

白石　ちょっと長くて飽きちゃったんですけど。

楢崎　前半がよかったんです。

武田　あとは、バラバラになっちゃうんで、それぞれコメントしていってください

白石　高橋悠治の《インソムニア》というのは、吉野直子とクレーメルで、ヴァイオリンと声と箜篌（くご）で演奏した作品だったんですけど、曲がはじまると、ヴァイオリンを弾きながら、クレーメルが出てくるという、ちょっとした演出もありました。90年にやはり私が挙げた高橋《ありのすさびのアリス》に似て、ふらっと、その場に人が寄ってきて、そこで何か一つの雰囲気を残して、すっと終わるというような、共通の性質をもっていて、楽しめた小品です。

石田　藤枝守の《植物文様》。これは、個展の形で全5集がまとめて、この年に演奏されました。植物の電位変化からメロディをみいだすという作業がテーマになっていますが、そのシンプルなメロディと特異な音律による響きの関係が面白かった。

藤枝守は、最近本も出しているけれど、いわゆる非平均律の様々な音律に関心をもつようになった。現在もそれを中心とした活動を続けているわけだけれど、この姿勢を明示したのが、この年ではないかな。

長木　私はまず細川の2作を挙げます。《遠景Ⅱ》というのは、梵鐘を思わせて響きが波紋のように移り変わっていくところが非常に面白かった。そういう要素というのは、それまでも細かいレベルでは、いくつかあったんですが、全体がそういう波のように動いていくような様式というのが新鮮でした。

それから《夜の響き》のほうは、ピアノ曲での新しい作品は難しいと思うんですけど、これはそ

ういった意味では、ハーモニックスを駆使した、いろいろな響きの選択がなされていまして、久々にピアノ曲として面白いものを聞いたという感じがありました。

次に野平の《内なる旅》は国立劇場の委嘱作品だったわけですけれども、いろんな日本の発声法を使っているのと、邦楽器と言いますか、古代の楽器、それをほんとうに素材化している。いままでの脈絡とか、そういうことと関係なくして使っていく、ほんとうに生の素材として使っていく方向は、ちょっとこれまでの他のそういった楽器を使って、国立劇場でやっているのと異質な感じがして、長年パリでやっていた人の感覚でやっているという感じがします。それが面白かったことはたしかです。

上野　和泉耕二の《異系の譜》は、次の97年の尾崎敏之の《黎明Ⅱ》と共に尺八と弦楽四重奏のための曲です。この他にもこの時期、尺八と種々な和・洋楽器の組み合わせの作品がずらりと並んでいるのは、ある企画者がいてプログラムしたからでもありますが、やはり現代の新しい尺八奏者、福田輝久のヴェンチュア精神によるといえるでしょう。この和泉の曲では、尺八は、擬音的な音として使っているし、それから弦楽四重奏は、西洋の音として扱っている。つまり尺八と弦楽四重奏の融合ではなくて、二つの対立したものとするコンセプト。その他の作品は、種々融和的なのもあったんですけれども、この曲の場合は、あくまでも《異系の譜》として対立した関係で書いているのが特徴で、その代表的な作品として、これを挙げました。

それから小鍛冶の《デプロラシオンⅡ》。彼は、独自なイデーにもとづくオーケストラ並びにアンサンブルの曲を書いているんですけども、たえず変奏というよりは、以前の自作を引用してきたり、それに新しい解釈を加えたり、反歌を挿入したり、それからアレアトリックに傾いたりして曲をつくる。それが彼の作法なんです。そういうなかには、もうヴェクトルがどっちにいってしまうのかわからないような作品もあったんですが、この《デプロラシオンⅡ》では、彼の方法論が自然な形で、エクリチュールとは何か、テクスチュアとは何かに答えているような気がする。

楢崎　まだ触れていないのは、池辺の《木に同じく》。池辺の作品はドライブ感豊かなイメージが強かったんですが、《木に同じく》では決して急がない。音をスピーディーに動かすのでなく、音の一つひとつをゆっくり眺めている感じ。自作にない視点を取り込んでいるところを評価したい。

それから、細川の《うつろひ・なぎ》は、沈黙と音との両極端に身を置くというよりも、むしろその中庸で持続しつつ、音を凝縮させたり緩めたり、が自在に行われている。転換点にある作品として挙げました。

1997

▼石田

間宮芳生　《菅江本奥じゃうるり其の一「枡がまくらに」》
細川俊夫　《チェロ協奏曲〜武満徹の追憶に〜》
権代敦彦　《聖なる愛／平和の口づけ（第8幻視）》
猿谷紀郎　《豊宇多楽》

▼上野

間宮芳生　《菅江本奥じゃうるり其の一「枡がまくらに」》
尾崎敏之　《黎明Ⅱ》
猿谷紀郎　《豊宇多楽》
角　篤紀　《地の魚》
小栗克裕　管弦楽のための《ディストラクション》
野田暉行　創作能《高山右近》

▼白石

細川俊夫　《バビロンの流れのほとりにて》
細川俊夫　《チェロ協奏曲〜武満徹の追憶に〜》
池辺晋一郎　《バイヴァランスⅠ》
望月　京　《オール・ザット・イズ・インクルーディング・ミー》
原田敬子　《After The Summer...》
近藤　譲　《ディシラム》

▼長木

新実徳英　《風神・雷神》
原田敬子　《midstream》
望月　京　《シ ブル，シ カルム》
萩　京子　オペラ《ガリバー》
細川俊夫　《チェロ協奏曲〜武満徹の追憶に〜》
三枝成彰　オペラ《忠臣蔵》

▼楢崎

江村哲二　《ハープ協奏曲》
藤家渓子　モノローグオペラ《赤い凪》
黛　敏郎　《パッサカリア》
西村　朗　《ラメント》

❖❖❖❖❖

武田　細川の《チェロ協奏曲》は「作曲家の個展」の新作ですね。

長木　スタイルが確立してきたという作品ですね。《ランドスケープⅢ》ほどにも独奏楽器が動かなくなっちゃったし、むしろ全体が一つの流れのなかに入っているという感じの作品になってきていて、このスタイルの限界に近い形になりつつあるんじゃないかと思いましたけれども、これも武満の追憶でしたね。

武田　白石さんは2つ挙げていましたが……。

白石　2つの作品は性格が違って、《バビロンの流れのほとりにて》（世界初演は95年エッセン）は、ラテン語、ドイツ語、日本語による詩篇の言葉が音素に砕かれた状態で出てくる曲だったんですけれど、あとの《チェロ協奏曲》に比べれば、はるかに実験的な印象の強い作品でした。言葉がの断片が投げ出されていくように聞こえるというのが面白いんです。細川はいろんな作品を書くときに、オーケストラのほかにバンダをつくったりして、こだわって楽器を配置しますけど、この曲では通奏低音を奏でる弦楽合奏の1群と離れて、室内オケが左右対称に配されているという作品になっています。もしかすると、《遠景》とか《ランドスケープ》や、《チェロ協奏曲》とは、ちょっと趣を

細川俊夫

異にして、こうした言葉の扱いや音群の複層的な時間構成に粗削りな部分というか、実験的な部分を残している曲というふうに感じます。

どっちか一つ取れと言われたら、私は《バビロンの流れのほとりにて》のほうが好きです。

武田　次に、間宮の《菅江本奥じゃうるり其の一》。

石田　国立劇場でここ数年にわたって続いているシリーズです。江戸時代の民俗学者で北海道まで足を伸ばした菅江という人の日記を使って、その行き先、行き先の芸能を織り混ぜながら展開していくという内容。菅公の旅と日記による、創作半分、実際の民俗芸能半分というか、それ以上というユニークな構成です。実際の芸能を運んできてやる、その運びがなかなか面白いといえば面白いわけですけれど、同時に旅人の菅江という人自身が天保の大地震であるとか、あるいは飢饉であるとか、いろんな事件に遭遇していく跡があるわけで、そこもなかなか臨場感を出していて、とても新しいタイプの作品だと思ってます。

白石　私は翌年に初演された《其の二》を聴きましたが、演奏者がすごく良かったと思うんです。高田和子や田中悠美子といった演奏者の個性がうまく生きているという意味でもそうですし、それと物語が進んでいくのにつれて、伝統芸能をそのまま手を加えずに用いている面白さというのがあったと思う。

武田　あとはバラついてるんで、とくにというのをそれぞれから。

石田　権代敦彦の《聖なる愛／平和の口づけ（第8幻視）》。聴いたのは初演ではなかったが、これを含めて、彼がヒルデガルト・フォン・ビンゲンをテーマにした一晩をプロデュースしたんですね。アルゼンチン生まれのアレハンドロ・ヴィニャオという電子音楽系の作曲家と自分のもの、それにヒルデガルト自身の《来たれ処女よ》などを並べた。この一晩が良かった。権代の曲はソプラノと打楽器のための作品で、打楽器の音響が色彩的には制限されて使われていたのが声を引き立てていた。

ヒルデガルトのような、中世キリスト教神秘主

権代敦彦

義者に着眼するというのも彼らしいところであって、キリスト教文化圏では生誕900年に因んで、いろいろ論ぜられたりその作品の録音がつくられたりしていたわけですけれど、日本の音楽界で話題にしたというのは、僕が知るかぎりでは彼だけだったような気がしますね。彼はヨーロッパと日本とを往復して活動していますが、西欧文化の宗教的伝統の流れを一生懸命紹介している。そのあたりの役割というのも、この作品で感じられたような気がします。

長木　萩の《ガリバー》。萩も、もうこんにゃく座に長いわけですけれども、これがあったからとくにというわけではないんですが、元にしている素材は例のガリバーの話なんだけど、そのなかに彼女なりの重いテーマ、たとえば原爆の話とか出てきたりする。もちろん、けっこうエンターテイメントめいていて、そのなかで非常に重いテーマを、さらりと忍ばせていくという方法ですよね。これはこんにゃく座特有のことだろうと思うんですけども。

例によって例のごとくで、非常に急速なピッチで、小気味よい芝居になってるんですけども、そのなかでシリアスなテーマの取り入れ方がうまかった。そこが面白かった。

それから望月の《シ ブル，シ カルム》と原田の《midstream》というのは、ここで一緒に出しておきたいという意図があって出したというところもあるんです。若い世代が出てきたというのははっきりしていますね。

原田のほうは世界初演はコペンハーゲンで95年ですが、二つの楽器が、ちょっと空間を離して対

望月 京

話しているような感じで、いつも思うんですけど、響きの清潔な人なんですね。その清潔さというのが個性だろうなと思います。

望月のほうは、ものすごく複雑なテクスチャーを身につけているんですけど、それにもかかわらず響きが濁らないで出てくる。音の選び方の問題だろうと思うんですけれども、そのへんで非常に感心する。とくにこの作品がどういうことじゃまだなくて、たぶんこれからいろいろとまた変わってくると思いますが、新しい世代が出てきたという感じです。

白石　望月の《オール・ザット・イズ・インクルーディング・ミー》というのは、96年の作曲、ヴァイオリンとクラリネットとフルートの室内楽で、長木さんのイメージと同じです。ほんとうに音の選び方が奇麗ですね。色彩感があって。そういう望月の個性を感じた作品。

原田の《After The Summer...》は、いわゆる管理された偶然性の作品になっているんですけれども、当日の楽章の順番は指揮者しか知らず、テープ音の導入部を聴いて6人の演奏者はどの楽章かを判断します。まあ原田のなかでは特殊な作品かもしれないんですけれども、原田は息の長い大曲を書くというよりも、ある程度部分ごとにまとまっている形態が非常に面白い作曲家だと思うんです。それがこの曲ではさらにアレアトリーと、テープを導入して構成していくことで、長い時間をつむぎ出していたのを面白く聴けたので挙げました。

武田　これは作曲は95年ですね。コペンハーゲンね。

長木　三枝の《忠臣蔵》は、さっきの團と同じような感じもあるんですけど、いい意味でミュージカルとオペラの中間ぐらいの、どっちかというとミュージカルにころんでるようなエンターテイメントの作品ですよね。こういうのも日本のクラシックのなかでは、一つの場所を持ってるんじゃないかと思いまして出しておきました。

やはりウェルナー・ヘルツォークなどを呼んでくるのは彼の人的な力量でしょうし、楽しめる「現代オペラ」と言っていいかどうかわからないけど、歌付きのお芝居という意味では、やはりこれも一つのあり方じゃないかと思いました。たぶん他の方は挙げないでしょうからね。

武田　野田の《高山右近》のほうは。

上野　これは国立能楽堂の初演を見ての評価で、再演はだいぶ形が変わったという噂を聞いてるので、ちょっと躊躇するんですけれども、高山右近というキリシタン大名の、加賀乙彦の台本による創作能ですが、能という仏教思想に根ざす伝統芸能と、キリスト教的倫理という、噛み合わないものがここで出くわしている。洋楽アンサンブル、フルートとハープ、チャイム、それから編鐘、ソプラノとアルト各2人の女声コーラスが脇で演奏するんです。それが能のほうの地謡に負けてしまう。構成的に、あるいは空間的に演奏陣をもう少しうまく分布できないかと思いましたが、創作能は非常に珍しい。やはり先駆的な作品として挙げておきたい。

石田　幽玄能のスタイルを構成上踏襲して能舞台も使っていて、そこに新味があったけれど、地謡に比べ洋楽がちょっと弱いという感じでした。

野田暉行

上野　梅若の地謡はそう強くないはずなんですが、それでも負けてしまう。洋楽アンサンブルは、むしろシーンを補遺的に描いて、余韻や予感を豊かにしていましたし、伝統芸能と現代音楽語法は、たしかにひとつのテンポをここに生んだといえるでしょう。

能の現代化ないしは国際化にとって、象徴的な高山右近その人ですが、新しい方向を示唆するところの少なくない創作能でした。

武田　上野さんが挙げられた他の作品は……。

上野　猿谷紀郎《豊宇多楽》（とよのうたあかり）は、国立劇場の委嘱によって作曲された、箏と三絃と琵琶と笙と打楽器のための合奏曲ですが、神話的な音世界を雅楽的なテクスチュアで展開した新古一如の表出。

角篤紀《地の魚》は、尺八の福田輝久と三味線の杵屋子邦夫妻のアメリカ演奏旅行のために書かれた、やはりきわめて日本的風土の邦楽器二重奏によるコンテンポラリな新領域を拓く作品として取り上げました。

江村哲二

楢崎　江村の《ハープ協奏曲》は名古屋で初演されています。たくさんの音をすきなく構造化する傾向がそれまであったんですが、《ハープ協奏曲》は沈黙と空間をも取り込んで、次への飛躍を予感させる作品です。

藤家の作品では、《蠟の女》よりも《赤い凪》の方が藤家の語法で書かれたモノローグ・オペラという印象を強く持ちました。《赤い凪》に使われているテノール、尺八、ギターのそれぞれのための作品を藤家は書いていて、その試みがこのモノローグ・オペラの切り口になっています。

黛の《パッサカリア》は、絶筆の未完の作品なんですが、最初の4～5分を聴いただけで黛作品の風格が立ちのぼってきて印象に残っています。

西村朗の《ラメント》はサキソフォンのための作品です。西村というとオーケストラ作品がよく話題になるんですが、その一方で書かれている、こういう独奏楽器のための作品も充実しているという点で挙げました。オーケストレーションの特徴が旋律進行に表れています。

白石　池辺の2つのチェロのための《バイヴァランスⅠ》。私はこの《バイヴァランス》のシリーズは好きなんですが、2つの楽器を使いながら、単純に対立させたり、単純に寄り添わせるというのではないやり方が、この作品でも試みられていて、緊張関係がずっと続いていく時間の紡ぎ方が非常に面白かった。

池辺らしいかと言われると、よくわからないんですけど、池辺の作品のなかでもこれは心地よい緊張感が持続していく作品というふうに思いました。

それから近藤譲の《ディシラム》というのは、西沢幸彦のフルート・リサイタルで初演されているフルートとギターのための曲なんですけど、ギターは佐藤紀雄が弾きました。これは、いつもながらのカラッとしたタイプの作品で、近藤健在という感じでした。

（以上1999年11月24日）

1998

▼石田

権代敦彦　《ファーザー・フォーギブ＋イン・パラディスム》
松村禎三　《交響曲第2番》
石井真木　バレエ音楽《梵鐘の聲》
廣瀬量平　《雪舟讃Ⅰ》
高橋悠治　《大いなる死の物語》

▼上野

石井真木　バレエ音楽《梵鐘の聲》
廣瀬量平　《雪舟讃Ⅰ》
権代敦彦　《処女点》

▼白石

権代敦彦　《ファーザー・フォーギブ＋イン・パラディスム》
池辺晋一郎　《悲しみの森》
三善　晃　《焉歌・波摘み》
菱沼尚子　《リフレックス》
猿谷紀郎　《結晶からの誘掖》

▼長木

猿谷紀郎　《結晶からの誘掖》
伊藤弘之　《シーシュポスの神話》
林　光　オペラ《吾輩は猫である》
権代敦彦　《アンティ・フォン》

▼楢崎

権代敦彦　《ファーザー・フォーギブ＋イン・パラディスム》
松村禎三　《交響曲第2番》
池辺晋一郎　《悲しみの森》
池辺晋一郎　《バイヴァランスⅡ》
三善　晃　《焉歌・波摘み》

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

菱沼尚子

伊藤弘之

武田　では98年にいきます。権代が票を集めてますね。《ファーザー・フォーギブ＋イン・パラディスム》。これは第8回の芥川作曲賞のときの委嘱作品ですね。権代の特徴というのうはどういうところにあるのでしょうか。

石田　一つめは、カトリシズムに立ったゴシック・ロマン体ともいえそうな新象徴主義。いままであまり日本の作曲家が扱ってこなかったことをやっているということが一つ。それからもう一つは、一種の演劇性というか空間性というか、いわゆる音だけでなしに、その状況全体を儀式化する。ただ、この曲に関して言えば、その劇的な側面というのが、いままでのように少々荒々しく出てくるというのではなくて、かなり内省的というか、内面的な性格のほうが強く出た、新しいタイプのほうの作品ではなかったかなというふうに記憶してます。

楢崎　私も、演劇性よりも内面的なものが出てきたという点に同感です。以前は視覚的、宗教的な要素が肥大して、自己充足的な表現になっていたのが、この《ファーザー・フォーギブ＋イン・パラディスム》では、視覚的なもの、宗教的なものが音のなかに凝縮されている。

白石　皆さんがおっしゃっていたことと同じなんだろうと思うんですけど、演劇性というのが、ほんとうに見せる部分での演劇性じゃなくて、音楽のなかにドラマが内面化されたという面を強く感じて、しかもいままでの作品のなかで、いちばん彼の個性が凝縮された感じがしたんですね。以前

の作品にも、もっと粗削りな形で同じようなものがあったと思いますけれども、それが今回の作品は音楽に内面化されて非常にうまく出ていた。彼の語法はほんとうはとてもシンプルだと思うんです。そのシンプルさと、伝えたい内容、断片的な言葉を使ったドラマ性がうまく結びついていて、彼のなかでも代表作だと思って挙げました。

武田　あと挙がっているのでは松村のサントリー音楽財団の「作曲家の個展」での9年ぶりのオーケストラ作品、ピアノ独奏付きの《交響曲第2番》。これは99年にちょっと改訂されて再演されてるんだけれども、久々の交響曲を彼がどうしても書くんだということだったんだけど、どういうふうにお聴きになりましたか。

石田　金管のファンファーレ、調性的響きの「美しさ」を基調としたピアノ独奏、それに現代的なオーケストラ音響の3つの共通要素による3楽章制の作品でしたが、調性感に多様性が乏しく叙情性に傾いてしまった。

これは調性の回復ということを、彼なりに改めて考えた作品ということだった。当然、調性に対してのアプローチは、いろいろ考えられるわけだけれど、そこで非常に悩んだというか、何かそのあたりが音楽の語り口というものになっていったんではないかな。たとえば、どうしてもピアノを離せなかったんですよね。ピアノに郷愁を誘う調性の響きを固定した。もっとインパクトのあるコントラストを効かせた使い方もあったかとは思うんだけれど、それをあえてやや半端な形で進めていった。逆に問題の所在がそこに明らかで、かえってリアリティが出ていると。

武田　非常に単純なピアノ・パートでしたね。改作はどうでした。

石田　改作のほうがすっきりしたんじゃなかったのかな。

楢崎　松村は70年代にピアノ協奏曲を2曲書いていて、そこではトレモロや装飾的な音符を使ったオスティナートが特徴だったんですが、《交響曲第2番》のピアノ・パートにはそういったものが削ぎ落とされている。オペラ《沈黙》でオスティナートを離れて声のパートをどう書くかという新たなアプローチをして、それがピアノとオーケストラに反映されている、そのすっきり感です。

武田　それは彼がピアノ協奏曲第3番としないで、どうしても交響曲にしたかったということなのかもしれないですね。

あと挙がっているのは三善の《焉歌・波摘み》。これは《夏の散乱》《谺つり星》《霧の果実》と続く四部作の最後になる作品ですね。

楢崎　《焉歌・波摘み》には子守歌が使ってあって、子守歌のようにメッセージ性のはっりしたモチーフを使ったときの方が構造化のプロセスが説得力をもってくる。抽象的な音列がモチーフに使われていると、構造化が見えにくくなる。

武田　これは4曲のなかではいちばんいいんじゃないかという気がしましたね。

白石　私もシリーズのなかではいちばんいいだろうと思っていて、実は初演を聞いたときは、わらべ歌を使ったのはちょっと違和感があったんですけど、N響が演奏した再演のほうで逆にしっくりきて、改めて、ああ非常によく書き込まれた作品だという手応えを感じました。なぜ初演が悪かったのかはちょっとわからないのですが、再演は子守歌を用いた意味がよくわかって、素晴らしい作品だと感じました。

武田　池辺の《悲しみの森》。これは楢崎さんと白石さん。これはアンサンブル金沢のための作品ですよね。ちょっとたたずまいが変わったという気がするんだけど、その他に何か加えてください。

楢崎　《照葉樹林》にはじまってチェロ協奏曲《木に同じく》に続く系列にある作品ですね。池

池辺晋一郎

辺の音楽って、つねに走っている音楽と思っていたら、ゆっくり歩くようになった。まわりに注意しながら。(笑)

石田　僕は柔軟さがあったと批評に書いてるけど。

白石　私は批評で、この4～5年池辺の作風が微妙に変化していて興味深い方向を見せてるって書いてますね。このまえ、95年の《照葉樹林》を推せんしましたが、そのあたりから書法が入念になってきたのではないかと思います。まったく同じような感じで、楽器の使い方に、じっくり仕上げたという印象があって、しかも風通しのいい音楽で、すなおによかったという印象を持ちました。

武田　あと、楢崎さんが池辺の《バイヴァランス》の2番ですか。2つのヴァイオリン。

楢崎　運動性とスピード感が豊かな作品ですが、アーティキュレーションがとても巧みでした。それを演奏者がさっと把握して弾いて、作品が鮮やかにあらわれたのが印象に残っています。

武田　1番がチェロ2つ、2番がヴァイオリン2つじゃなかったか。

楢崎　3番が2つのヴィオラで、この演奏もよかったです。

武田　猿谷作品は。

長木　猿谷という人はコンスタントにものすごく力が出せる人だと思うんですが、これも三部作品で、オーケストラは大きくはないけれども、書法が独特のパーソナリティを持ってると思うんですね。音がいつも、あれっという意外性で出てくるというかな、それが同じ世代の人が持ってるような音のつくり方じゃないようなものがいつもあって、この《結晶からの誘掖》もその一つでした。

白石　猿谷の音楽って論理的な言葉で説明できるよさとちょっと違うところがあって、音に対する感性がすごく共感を呼ぶということが多いんじゃないかと思うんですね。これはいまおっしゃったように、あまり大きくない編成の作品ですけれども、猿谷の場合は比較的、室内オーケストラぐらいまでの作品のものに個性がよく出ているように思われて、室内楽もとてものびのびとしていて、肩に力を入れないで聞ける音楽みたいなところがあります。論理的な構築というよりは、ソノリティとか全体の流れの心地よさを打ち出しているところが、同世代の新しいことをしてる人のなかでは個性的かなというふうに思います。それとタイトルの付け方にもセンスを感じます。

武田　あと上のほうの年代の人になると、廣瀬の《雪舟讃Ⅰ》がお二方から挙がっていますね。

廣瀬量平

石田　日本音楽集団の新しいシリーズで、一夜コンサートの構成を1人の作曲家に任せるという企画の一日目で初演されました。廣瀬は旧作の《クリマ》と、新作の《雪舟讃Ⅰ》を並べたんです。前のほうは開かれた形式というか、かなり即興的なものにゆだねているところがあるけれど、今度のは丁寧に、雪舟の庭を想起するような意味の響きの情景というのを広げていった。日本音楽集団のための久々の新作でした。

上野　フルート・オーケストラはたくさん書いてますね。《雪舟讃Ⅰ》は、ちょうど25年前の《夢十夜》と相対する、日本音楽集団のためのツインの作品として出現しました。前作が華麗ともいえるのに対して、陽と陰、表裏とさえいえますね。いろいろやってきた語法が結集してたし、非常に聴きやすい作品でもあったと思いますね。

武田　石井真木の《梵鐘の聲》。これも石田さんと上野さん。

上野　かなり大きなスケールの作品だったですね。バレエの音楽作品は、彼は前に《輝夜姫》があるけれども、それとは違った、もっと奥行きのあるサウンド、自然境域と共振して広がっていくような音響シーンがあって、3年前の《聲明交

響》の延長を想わせます。

石田　石井は、コンサート作品でも物語性というのを持ち込んだ標題楽的作品を書いていますが、これは「平家物語」を絵巻物風に展開した、スケールの大きいバレエ作品でした。

石井真木

武田　林光の《吾輩は猫である》。彼はこの作品でこの年のサントリー音楽賞に選ばれました。

長木　これは新国立の小劇場での創作オペラとしては、委嘱作じゃないですけども、最初の成果じゃないですかね。作風自体とくに新しいという感じはもちろんないですけども、諷刺性とか、社会性みたいなのをどこかしら盛り込んいでる。それからこんにゃく座の個性として、一人一芸みたいなのがよく出ていますね。楽しめるし、ああいう国立の劇場を使って、いかに楽しくオペラをつくっていくかという一つの林のコンセプトがよく出てたと思うんですね。それまで、たとえばいろいろ小さい劇場でゲリラ的にやってるということはもちろんあるけど、新国立劇場でもできたということの意味が大きかったんじゃないかと思うんですね。

武田　あと高橋悠治の《大いなる死の物語》。

石田　ブッダの最後の旅をテーマにした新作聲明です。悠治の作品は、不思議に臨場感が残っているので、つい加えたくなります。

武田　上野さんは。

上野　権代作品では、鈴木雅明のオルガン・リサイタルでやった《処女点》というのを挙げました。委嘱作品ですけど、トーマス・マートンの散文詩に、定旋律をカウンターテナーの米良美一がステージで歌い、それから客席二階のほうで宮田まゆみの笙が聖母のプリズムを務めたり、30分ぐらいの作品ですが、インストルメンタルに多彩で、かつ宗教的な思索の深い曲だったと思います。

1999

▼石田

三善　晃　オペラ《支倉常長「遠い帆」》
細川俊夫　オペラ《リアの物語》
新実徳英　《太陽風》
柳田孝義　オーケストラのための《時の記憶》
川島素晴　ピアノ，プリペアドとオーケストラのための《マニック・ディプレッシブⅢ》

▼上野

三善　晃　オペラ《支倉常長「遠い帆」》
川島素晴　ピアノ，プリペアドとオーケストラのための《マニック・ディプレッシブⅢ》
西村　朗　アルトサキソフォン協奏曲《エシ・イン・アニマ（内なる魂の存在）》
柳田孝義　オーケストラのための《時の記憶》
東　大円　《テフラⅡ》―室内オーケストラのための
久保　禎　《春籟楽》
二宮　毅　《涅槃西風》―27人の奏者のために
湯浅譲二　《クロノプラスティックⅡ》―エドガー・ヴァレーズ讃

▼白石

細川俊夫　オペラ《リアの物語》
三善　晃　オペラ《支倉常長「遠い帆」》
湯浅譲二　《声のためのプロジェクション》～音響発生装置としての
鈴木和彦　《木（匂い）》

▼長木

三善　晃　オペラ《支倉常長「遠い帆」》
細川俊夫　オペラ《リアの物語》
湯浅譲二　《クロノプラスティックⅡ》―エドガー・ヴァレーズ讃
新実徳英　《太陽風》
伊東　乾　《ダイナモルフィア》

▼楢崎

細川俊夫　オペラ《リアの物語》
川島素晴　ピアノ，プリペアドとオーケストラのための《マニック・ディプレッシブⅢ》
三善　晃　オペラ《支倉常長「遠い帆」》
西村　朗　アルトサキソフォン協奏曲《エシ・イン・アニマ（内なる魂の存在）》

❖ ❖ ❖ ❖ ❖

武田　どうしても《遠い帆》と《リアの物語》が出てきますね。三善の《遠い帆》はどういう点がよかったのか、あるいは問題があるのか。これも最初と最後のわらべ歌がものすごく効いてるんでね。数え歌がね。ところが高橋睦郎のオリジナル台本にはないんですよね。

長木　三善の音楽の独特のスピードというのが一方にあって、他方にわらべ歌みたいな、別の創作のテーマとが入ってきていて、さらに男性ばかりの登場人物しかいないんだけど、唯一の女声の使い方が非常によく考えられている。また、台本の時間感覚と音のつくる時間感覚とが非常にうまく合ってたような気がするんですね。もちろん緊張する部分、弛緩する部分があるけれど、つねに一つのピンと張られた線で最初から最後までつながっているという感じがして、なかなかこういうオペラ体験というのは、いままでの作品にはないかなと僕は思いました。それから合唱の使い方ですね。あれだけたくさん合唱が出てきて、そこで彼の合唱作品での力量というのが非常にオペラにうまく出た、そういうところで、なかなかない作品ではないかと思いました。

武田　作曲にずいぶんかかったみたいですね。

長木　台本が出版されていて、どんな作品をつくるのかということについても事前に期待が高まっていた。これは画期的で、これまでなかったでき方じゃないかと思いますね。

武田　でもずいぶん変わってますね、台本と。

長木　かなりね。

武田　これはキリシタンものと能との関係からいくと、《高山右近》とわりと似た点もあるんだけど、上野さんどうですか。

上野　ひと口で言って三善の合唱書法のすごさだと思うし、合唱劇オペラだと思う。

武田　オラトリオ風だということですか。

上野　合唱として多数の人間を動かしながらも、一人ひとりが心理的に個を自覚して劇に参加するようにさせて展開していくというところは、やはり並じゃないと思うんですね。ただ声のトータルがバーッと出てるという合唱じゃなくて、一人ひとりが皆違った心理を持っていながら合唱劇的なドラマを構成しているというところが、このオペラの特徴じゃないかと思いましたね。

長木　いわゆる地方オペラというのがたくさん出てきたけども、これはちょっと違っていて、合唱の取り込み方とか、つまり地方で皆さんでワーッとやるというんじゃなくて、かなり積極的に合唱の人がドラマに参加してるという感じがしたんですよね。その意気込みがぜんぜん違うと感じたんですね。

石田　仙台の開府400年記念という委嘱作品で、仙台の伊達政宗が派遣をした支倉常長の悲劇を描いたという作品なんですけれど、いまお話になられたような、舞台の展開、筋の変化というか、ドラマに非常にこの合唱がよく絡んでいたということと、それから同じような意味で、声楽書法、あるいは言葉の使い方に対して、いままでの三善のさまざまな声楽系作品の成果というのが出ていたと思うんです。それから緊張の糸ですね、一貫した糸があるわけだけど、ただ、その糸が少々強過ぎるというような批判もあって、ストーリーのなかには、切り立ったクライマックスみたいなものがいくつかあってもよかったかなというふうな印象がありますけど、これは一種の作風でもある。ただ、地方から日本人全体に対して呼びかけるような、そういう強い力を持っていたわけだけれど、これをいったん外に持っていこうとした場合に、どこまで思い込みというのが客観的によその国の人たちにわかるかということも、今度は一つの課題とすべきじゃないかなというふうにも思いました。

武田　とにかく仙台を出て太平洋を渡ってメキシコを横断して、大西洋を渡ってスペインに着いて、ローマへ行ってずっと帰ってくるところまで50分ですからね。でも、すごい緊張の糸というのはよくわかる。あまり外国へ持っていくという意識はないんじゃないのかしらね。

上野　地方オペラというのは、たいていヨーロッパの有名オペラを10年ぐらい体験して、それから創作オペラに取りかかるんですけれども、仙台の場合はちょっと事情は違ったかもわからない。とにかくワークショップ的なものを積み上げて、合唱がどうしても主体になってくることが多いんですけれども、そういう素地が培われたところで、三善は容赦なく彼のスタイルと手段をぶつけていったと思う。

長木　仙台フィルはこのために何年か、オペラのプロジェクトというのを毎年やっていて、普段はオペラをやらないオーケストラなんですけど、毎年必ず外山雄三のところで《ボエーム》をやったりとか、《トスカ》をやったか、なんかそういうふうにオペラの経験をずっと積んできた上で、支倉常長をおいたんです。あれは舞台とオーケストラの関係と言いますかね、間合いとか、そういうものをかなり訓練して準備した。いろんな意味でかなり周到にやった作品となったんじゃないかと思いますね。それもちょっと面白いと思います。

楢崎　日本のオペラというと、オペラ作曲家とよばれるタイプの人たちがいたと思うんです。その人たちは基本的にヨーロッパのオペラをモデルにして書いている。そういうオペラは、モデルと日本語の違和感、作曲者の音楽体験とモデルのギャップが目立ってしまう。

　黛の《金閣寺》あたりからやっと、最近になって松村の《沈黙》、というようにコンサート作品で力のある作曲家がオペラを書くようになる。ヨーロッパでは器楽作品やオーケストラ作品で傑作を書いている人たちがオペラを書くのに、日本で

は逆ですね。

三善の《遠い帆》は、器楽作品も声楽作品も書いてきて自身の言葉の起こし方を持った作曲家のオペラとして、それまでの日本のオペラとも一線を画している。ヨーロッパのオペラとも違っている。それが本来の日本のオリジナルなオペラのあり方だと思います。

白石　さっきオラトリオ風という話があったけど、それがよかったと私は思います。日本のオペラに新しい形があるとすれば、自然になかから生まれてくるものしかないだろうと。三善の場合には、それが合唱の力が充分に発揮されるオラトリオ風になったということですね。新しい方向のものが出てきたと評価できる成果だと思います。

武田　では《リアの物語》。これは初演は1998年ミュンヘンの現代オペラ祭。日本では静岡のフェスティバル、第2回シアター・オリンピックスで初演ですね。

長木　リアというのが鈴木の芝居にあって、それをオペラ化するという何段階かの作品のつくり方は巧妙で、良い意味でずるいという感じがするんですね。つまりもともとの鈴木の芝居がないとできなかったわけでもあるし、細川はリアをみて、場面場面、全部時間を計測するわけですね。ここの間何分くらい音楽が必要かということを計算して、そこにどういうふうに入れたらいいかという方向でつくっていって、鈴木のリア自体がどんどん変わっていって、音楽が増えてきて、最終的にオペラになったということがあると思うんです。だからちょっと特殊なでき方をしていて、オペラを最初からつくろうという形でやったわけではないんで、そこがうまくいってる部分でもあるし、逆に今度細川は初めて大きな声楽作品をつくったから、歌の部分の弱さがそこに出てきていると思うんですね。そこで最終的に英語を使ってもいるし、日本語に取り組めなかったということは課題として残るんじゃないかと思うんです。作品の総合的なでき具合というのは、たしかに高いけど、細川にとっての課題もいっぱい残ってる。

白石　完全に鈴木のオペラ版だみたいな言い方には抵抗を感じます。鈴木の演劇も2回か3回か見たんで、鈴木の持っている音感というもの、もちろん劇にはもともと音をつけてるわけだけども、彼の音感とかそれからもともとの演劇が持っていた性格と、ぜんぜん違ったものがオペラでは出てきた、それが細川の音楽の力だというふうに私は思ったので。簡単に言っちゃえば、能に匹敵する様式化がなされていたのですが、その点に関しては特に音楽を積極的に評価したいんです。ただ、私は二つの会場で見たんですけれど、東京文化会館はやっぱり大きすぎたと思います。東京文化会では少年少女合唱団が舞台のオケ・ピットにずっといて、どこからともなく息の音が聴こえてくる仕かけになっていて、あれもとても効果的だったとは思いますけれども、やっぱり上演としての質の高さ、まとまりのよさは、私は静岡のグランシップでのほうが感じられて、合唱の規模からいってもよかったと思います。ですから東京でごらんになった方は、演劇が行われている、あるいはオペラが行われている場所が遠いと感じたかなとは思うんです。ただ作品として、音楽としても、おそらく鈴木以外の別の演出での再演可能性のある作品だろうというふうに私は思っていて、歌のところが弱いという話がありましたけれども、ある意味では細川が器楽曲でやってきたような特殊な歌い方をさせなかった、特殊な発声とかを求めなかったことから、違う演出での再演可能性も出てきてるというふうに思います。器楽の部分ではときにライトモチーフ風の操作も行われていて、充分に彼がやりたいことが実現されていました。

長木　実際には別の演出で再演されているけれど、要するに贋物の鈴木忠志でしかないですね。これから面白くなるかもしれないということはあるだろうと思いますが。だから、たぶん鈴木の独特の、なんと言うんだろう、毒みたいなのもオペラではだいぶ薄らいでいたし、もちろんまったく別の作品になったということも否定しないし、それだからこそオペラとして評価されるということはあると思いますけどね。やっぱり鈴木の作品がないとできなかったオペラではある。元の鈴木の

を見ていると、ああ、これはあそこを使ったなと必ず思っちゃうというのもたしかだし。

石田　僕も演劇のほうと両方見ましたけれど、同じものだと思えないですよね、やはり。だから鈴木の「リア王」を見た目には、運動性、躍動感のエネルギーはちょっとなくなっちゃったなというふうにも見える。しかし、逆にそこになかった精妙な、神妙な様式美があった。そういう見方も逆に成立すると思うんですね。だからこの二つは切り離せるものか、切り離せないものかというのは、これからのいくつかの演出例が出てこないと、結論は出ないんじゃないかなと思うんです。ただ、舞台の大きさのことで言うと、鈴木の芝居のほうは水戸の小さいところで見ましたから、ああいう迫ってくるような語りというか、俳優のそういうエネルギーというものはホールで距離感があると伝わらない。

武田　東京文化会館の場合は額縁に入っちゃってるという感じなのね。

長木　静岡のほうでやるときは、子供の合唱というのはテープで録っておいたんですね、たしかね。だけど、結局やっぱりあの空間だと、ちょっと必要ないというか、むしろ不要だということでやらなかったみたいですね。東京少年少女合唱団でしたっけ、テープを録ったけど無駄になっちゃった。ただ、どこか他でやるときは彼らがいないから、使えるだろうということはありますが。

石田　さっき声楽唱法の話があったけれど、ああやってずっと歌ってて、途中で歌でなくて、いわゆる言葉になったときに、日本語が部分的に出たでしょう。そうすると、あそこが圧倒的に強いんだよね、どうも鈴木の演劇上のトレーニングというかな、表現力の存在感が言葉にあるというか、そういう演技の言葉と比較すると、歌われる言葉の弱さがちょっと気になりましたね。

楢崎　細川の器楽作品やオーケストラ作品には前衛的と日本的な要素との一体感があるんですが、《リアの物語》では、細川の語法と、能のスタイルとの一体感、とまではいかなかった。器楽パートと、声と、演出とが相互に歩み寄りながら、その一方でそれぞれにやりたいことを主張している。

武田　では、次に行きます。意外でしたが、川島素晴の《マニック・ディプレッシブⅢ》を挙げてる人が多いですね。

石田　この世代には、多々グループ活動をやってる連中がいます。60年代前衛の活力をもう一度、持ち込みたいという意識を持ってる連中ではないのかなと思うんですね。この流れのなかでは、すでに作品としての結晶があった伊左治が、一種の成功例としては出てきた。川島も、思い切ってやりたいことを一生懸命、とにかくやったことを評価したい。それが作品としての評価に当たらないという言い方もあるかもしれませんけれど、創作活動というのは一つの行動であり行為であろうかと思うものですから、そういう表れ方が大きな波紋を呼んだということは、それなりの成果であろうと思いますが。

武田　楢崎さんは。

楢崎　《デュアル・パーソナリティ》の延長にある作品ですが、コンセプトを明確にしようとする姿勢を評価します。音の方法論と言葉で吟味する、近藤譲タイプの明確さですね。

上野　川島はかなり以前よりパフォーマンス作品を書いては、自身パフォーマーとして、またときにはプロパガンディストとしても活動している。パフォーマーとしても才能のある作曲家じゃないかと思ってるんですけども、オーケストラで、あそこまで実践したところがすごいと思います。彼の行動様式というものは、実験的かもわからないけれど、作品としてけっしてハチャメチャでもなんでもなくて、インヴェンションとして認められるんじゃないかと思うな。

白石　やりたいことはよくわかるんだけど、ちょっと舞台を見たときに、川島がいる場所だけが、前にも言ったように、異質な感じをいつも持っちゃって、ああいうなかに入ると、他は全部プロで彼だけちょっとパフォーマーとしてアマチュアの雰囲気というのが浮き上がっちゃって、それがちょっとあからさまに出ちゃった感じをもちまし

た。音楽そのものは引用がたくさんあって、長いのですがコントラストをつけながらうまく全体を運んでいたと思うんですけれど。

武田　西村のアルトサキソフォン協奏曲《エシ・イン・アニマ》は。

楢崎　西村のオーケストラ作品は独奏楽器を伴ったものが多いんですが、西村のオーケストレーションでこの楽器を使ったらこうなるだろうな、と納得して終わる場合と、独奏楽器によっては西村のオーケストレーションに風を吹き込む場合とがあって、《エシ・イン・アニマ》は後者の方でした。これまで聴いたなかでアルトサキソフォンが最も西村のオーケストレーションが雄弁になる独奏楽器だと思いました。アルトサキソフォンのパートも、書き込んで書き込んで名人芸をさらに引き出しています。

上野　94年の吉松隆の《サイバーバード協奏曲》と同じように、いやそれよりもさらにいく倍かアルトサックスにぶち込んでいる。須川展也という優れたサキソフォン奏者がいたからこの曲を書いたのであって、でなければ絶対この曲は成立しないと思うんです。最初から終わりまでエキサイティングの連続みたいなすごい演奏だった。曲もだけれど演奏がすごかった。

武田　ある友達の作曲家に「あれは須川の曲だね」と言われたって。西村の曲はいつでも生理的に楽器の極限に挑戦を、わざとするみたいなところがあるんですが、この作品は須川以外には演奏できない。

上野　彼はあまり協奏曲という自作の言い方はしないのに、これをあえて協奏曲と名付けてるわけですね。

武田　それから新実の《太陽風》も複数の方が挙げてますね。

長木　あれはその前の3曲とちょっと違ったので、挙げただけなんですけど、新実はすごく力のある人だというのは誰も認めるんだけど、こう4曲並べると、なんか皆同じに聴こえてしまった。ただ、《太陽風》は彼も書いていたけど、ちょっと構成の仕方にこだわりが見られたんですね。それからオケの扱い方に、これまでの新実色ではないような音のつくり方というのが散見されたというか、その意味では、いままでの新実の作品より、ちょっと不器用につくってあって、そこがわりと面白かったんですね。そういうこだわりを評価したいなという感じです。

石田　いままでわりとサービス精神が多く、必ず後半のところで新しい状況をも持ち込むような、そういうつくり方が多かったんでけど、そういう発想から離れていたんじゃないかなと思いました。同時に響きに対しての設定というのが、90年代あたりからだいぶ変わってきて、とりわけいい響きがあったんじゃないかなと思います。

武田　湯浅の作品は二つに分かれているんですけれども、3人の方が挙げていらっしゃるんですね。《クロノプラスティックⅡ》というのはどうですかね。

上野　これは「エドガー・ヴァレーズ讃」と付いていて、ヴァレーズへのオマージュですね。だからヴァレーズのイデオムもあれこれ使ってるけれども、にもかかわらず、かつての《クロノプラスティックⅠ》と違って、余分なものをうんと切り落として、湯浅譲二の現在のスタイルをここで明確に書き留めておきたいというふうなことが非常に感じられた。

《クロノプラスティックⅠ》とはぜんぜん違うし、ある意味で正反対と言ってもいいぐらいの境地にきている。ふつう「ヴァレーズ讃」なんていうと、もっと音が過密化してしまうと思うところを、見事な技法だと思いましたね。

長木　僕は《クロノプラスティックⅠ》も聴いて、こっちはほんとうに湯浅らしいんですよね。むしろ《クロノプラスティックⅡ》のほうが、上野さんがおっしゃったように、いまの湯浅譲二がどういうふうに考えてるのかというのが、なんかはっきり出たのかもしれないと思いまして、そういうものを彼がどういうふうにこれから続けていくか、いろんな意味の問題作じゃないかと思って挙げておいたんです。これまでの湯浅の路線からいうと、ちょっと外れた曲だと思うんです。武

満追悼のヴァイオリン・コンチェルトがありましたが、あれは湯浅のなかではわりとマイナーの曲だと思うんですね。だからそういう路線を続けられないだろうと思ったらそうでもなくて、明快な音のつくり方や、線の太いつくり方をするようになっていて、それがどういうふうに彼のなかで展開していくのかなというところは、ちょっと注意して聴いていきたいと思います。だから《クロノプラスティックⅠ》のほうが、僕は絶対名作だと思うんですけど、いろんな問題含みで挙げておきたい作品です。

上野　《クロノプラスティックⅠ》は、僕は一大傑作と思う。とりわけあの年代を考えた場合に最高の作品だと思う。しかしそのあと私は湯浅のオーケストラ作品には、必ずしも共感できない面がいろいろあって、懸念の一つでした。ところが《クロノプラスティックⅡ》で、これが消し飛びました。

武田　白石さんは、《声のためのプロジェクション》ですね。

白石　湯浅がいつも言うところの始源性へのまなざしを端的に表した作品で、発声、言葉ではない声を使っています。従来の実験的な動きの延長上にあって、そういう傾向の湯浅作品が好きなので、二つのうちこっちを挙げておこうというふうに思ったんです。

《クロノプラスティックⅡ》のほうは、先程上野さんもおっしゃったように、打楽器がガンと鳴るところとか、ヴァレーズの語法への親近感が表明されている一方で、この前の武満へのオマージュで出てきたような、音の透明性にも関わっている。ですから湯浅の現況を素直にそのまま伝える曲だろうと思われます。いままでどちらかと言えば始源へのまなざしと、それからもう少しシンプルな世界への憧れみたいなものと両方別々にあったのが、ここでは一緒になっているので、湯浅としてはたぶんそういう意味での一つの形を出されてるんだろうと思うんですね。ただ、初演でそれが十分にいい作品として感じられなかったのは、もしかしたらまだ、ほんとうは両方がうまく溶け合っていないのか、それを演奏者が理解してないのか、よくわからないんですが。

武田　柳田の《時の記憶》をお二人が挙げてますね。

石田　オーケストラ・プロジェクト99での演奏ですけれど、柳田は基本的に美しい音楽を書く作曲家で、とくにオーケストラサウンドは武満につながるような伝統を伝えたような作品だったと思いました。比較的おとなしい作品ですが、オケのなかで3つの木管の歌が重要な役割を果たすことと、それからティンパニの音色がさまざまな状況のなかで浮かび上がってきていることとか、オーケストラの扱い方の彼の固有のアイデアというのがいろいろあった作品だと思いました。

上野　いままでも彼は比較的規模の大きい、いい作品を書いてる。彼の音楽はほんとうにきれいなところがあるんだけども、今度のオーケストラ曲は、気張らずに非常に自然の形で様式美があらわれていると思って、彼の成長の大きさを感じました。

武田　あとは長木さんが伊東乾《ダイナモルフィア》を挙げていますね。

長木　伊東乾がどういうことをやってるか比較的よく知っていて、それが実際の音としてどういうふうに実現できてるかということは、いろいろこれから評価しなければいけないというか、批判しなければいけないと思うんですけど、要するに一つの空間というものを、どういうふうに分節化していって、そこのなかで響きがどのような相互作用をするかということを、かなり綿密に考えてつくっている曲ではあるんですね。それが実際にホールのなかで、いろんな地点に行ってどう聴こえるかということまでは、まだまだ思い至っていないというか、そこまでうまくいかないんだなという気もしましたが。

彼は川島とは別の意味で非常にコンセプチュアルなつくり方をしていて、ただ、川島ほどにはそれはあからさまには出てこないけれども、影になっているいろんな知見があって、その部分を評価したいですね。だからこれは曲を聞いてというこ

とよりも、そのつくるプロセスを評価したいという気もします。その意味で川島と並行するんですけどね。ものをつくるということについての根源的な問いかけというんですかね、そういう問題意識を持ってる人ではあろうと思います。

武田　これは武満作曲賞で2位、審査員がベリオでしたね。

白石　あのときは前田克治が1位で、第2位の伊東乾の作品とともに、音楽が空間的にどう響くかということを意識してつくられていました。2人ともすごく自分のやりたいことを前面に押し出して、両方とも非常に意欲的だったと思うんだけども、ただ作品としての完成度はいまいち。

武田　それと鈴木和彦の《木（匂い）》。

白石　これは、自分が企画に関わっていたコンサートなんですけど、夏にジャスト・コンポーズド99というのを横浜で行ったんですが、そのときにオランダ在住の鈴木和彦という人に委嘱しました。《木（匂い）》という室内楽作品で、フルート、ヴィオラ、ハープ、ピアノ、金管という編成。プリペアードピアノをほんとうは使いたかったけど、シンセサイザーで代用したという作品です。

鈴木は、誰と同じということが言えないような個性の持ち主で、オランダ在住で当分帰ってくる気はないみたいですけど、音使いが非常に繊細なんですね。しかも音楽のなかに空間性が感じられる曲で、微分音のようなものも使うのですが、計算されたヨーロッパ風の微分音の使い方ではなくて、むしろ微分音を使うことで、それまでにつくられている音階で出てこないような空間性をつくり出すというような印象を持った曲です。あまりアグレッシブなところはない、どちらかといえばリリックな作品のほうに属すると思うんですけれど、日本でなかなか紹介されてないと思うんで、名前を記憶に止めておいていただいていいのじゃないかと思います。30代半ばくらいの作曲家です。

武田　あとは上野さんが九州で聞いた3つの作品を挙げていますね。

上野　九州のほうに目をやりまして、東大円の《テフラⅡ—室内オーケストラのための》。テフラというのは火山灰の降り溜まったものなんです。鹿児島の桜島の降灰風土を土台にしているのですね。同じコンサートでやった、久保禎の《春籟楽》と二宮毅の《涅槃西風—27人の奏者のために》。この3つを挙げたいんですが、いずれも第20回九州現代音楽祭の第1日目に初演した作品です。

二宮、東、久保作品にしても、共通しているところはリージョナルな背景をしっかり持っている。地域の音楽創造ということをコンセプトにしてるということは、よく感じられたので、とくに東作品、この人はいつも火山灰が目の前に浮かんでくるような作品を書くんですけれども、今回もまったくこれは桜島の灰のところで生活してないと書けない作品だと、そういう作品なんですよ。

長木　彼らは東京のほうで発表するということはないんですか。

上野　東は、ときどき東京でも出品してます。日大出身で、峰村澄子の弟子ですが、変わってるのは、この人和尚さんです。青年の感じがするんだけども、住職です。いつも日本の作曲家というタイトルが出ると、東京の作曲家と言い直したくなるような現状だから、地方の目ぼしい音楽創造は出来るだけ採りあげていきたいと思います。久保は東京でも活動していた時期があります。彼は吉崎清富の直系で、吉崎が鹿児島を抜けて東京へ帰ってきたあとを引き継いでいるんです。九州の有力作曲家の一人に違いありません。

武田　なかなか東京でやらないと話題になりにくいというのがありますね。

長木　仙台フィルもやってるけど、それ以外のところもあるんでしょう。そういうのはどこかで集中したインフォメーション・センターみたいなのがあって放送でもあればいいなと思うんですけど。

武田　インフォメーション・センターみたいなのをつくろうという考えは、いろんなところにあるみたいだけど、結局著作権の問題がたいへんだというんですね。それを放映したりなんかするのに、著作権が全部かかってきちゃうというね。

総　括

武田　最後にこの10年でどんなものが出てきたとか、地方の問題でもいいし、そういったことでこの10年の傾向みたいなものを話し合いたいと思います。口火を切るとすれば、やはりずいぶん世代交代というのが起こってきてる気がするんですが、まず亡くなった作曲家がかなりいる。柴田、武満、黛、石桁、もっと若いところで毛利とか山田泉とかね。そうした後に若い人が育ってきている状況でしょうか。

上野　80年代から90年代にガラッと変わったということはないかもわからないけども、世代の交代というのがやっぱりいちばん目立つでしょうね。これは別に作曲界だけじゃなくて、どのジャンルでも皆そうですけど。

武田　結局、戦後頑張ってきた世代が代わって……。

上野　それと社会情勢のバブル崩壊前と後とでは、やはり違うと思う面があるしね。さっきも小規模作品は浮かんでこなくて、大型作品ばかりが浮かび上がるんだけれども、若い世代まで含めて、大型作品を書く力を持ったと言えるんじゃないかな。

武田　そうですね。芥川作曲賞をやるのに、集めると1年間で60～70曲オーケストラ作品が初演される。昔を考えればすごいことですね。

長木　ただ、たくさん書かれるわりに聴かれてるんだろうかという気がするんですね。つまり60年代70年代ぐらいまでは大きい作品は、ある程度みんな聴いていて、それなりに話題になったと思うんですよ。

武田　大きい作品だと皆が聞いていましたね。

長木　最近はオーケストラの曲でも、いくつ聴いたかな、何人聞いたかなという感じでね。結果的に創作の現場というのが活況を呈しているのか、それともそうではなくなったのか、捉えづらいという気はするんですね。作品はたしかにたくさん書かれてますけど、それに見合った聴衆というは必ずしも獲得はできてないし、たくさんの聴き手を想定するような作品というわけでは、もちろんないというのは重々わかるんですけども、ちょっと先細りしてるような、そういうどこか感じがしちゃっていて、なんとかしなければいけないという面と、これも時代の趨勢だなという思う面と両方あって、すごく複雑な気分になるんですよね。

若い人はものすごく活発にやるんですよ。川島なんかもそうだけど、すごく狭いところに入っていっちゃってて、これは彼の持ち味だけど、そこをちゃんと聴いてあげる人が何人いるか、そういうところまで行きついちゃっているような気がときどきするんですよね。

近藤なかんもちょっと似たような感じがするんですけど、もちろんやってることは素晴らしいし、それを理解したいと思うんだけど、そういうふうに努力して聴いていることに、どれぐらい意味があるんだろうと、最近考えてしまうわけですよ。

いかがですか。僕なんかこういう仕事をはじめてからたかだか20年だから、そういうことを言うこと自体、歴史的な展望というのが見えてない点もあるんでしょうけども、昔はなんか違ったんではないかなという気がどうもするんです。

武田　たしかに昔だっていろんな人がたくさんいろんな曲を書いてたんだろうけれども、いい悪いは別にして、ある時代をリードしていくみたいな、そういうスタイルとか主張みたいなものがあったとは思うんですね。だからそれに沿ったものだったら、だいたい皆が聴いてるとか、共通の話題にできるとかというようなことがあったけども、それが皆てんでんばらばらの方向に行きだしたということですよね。それは地方化とか地域化という問題にもなるのかもしれないし。

上野　作品の数はものすごく多い。かなり聴き歩いてるつもりでも半分も聞いてないものね。技術はものすごく上がってるにもかかわず、やはり創作の基盤というのがどこにあるかわからないし、

もしあっても皆小さいものがバラバラとある。まとまった基盤というのがない。その意識がほとんどないということも関係するんじゃないかと思うけども。

武田　若い人のグループの数なんかはどうなんですか。昔と比べて。

石田　結構10年たって増えてきましたね。

上野　最近増える傾向にありますね。だけども、ちょっと2～3回やってやめてしまうのもないことはない。全体からみれば少しずつ増えてるね、グループは。

長木　企画できる人というのがそんなにいないから、誰かを中心に、何人かを中心にいろんな活動が起こってるという感じはしますね。行くと必ず同じ人がいる。ここでもか、みたいなのがちょっとあるけれど、基本的には数は少しは増えてるんじゃないかな。

上野　九州作曲家協会というのはメンバーが60名を突破して、年1回の作品発表会では間に合わないものだから、年2回やってるんですね、春と夏と。そういうふうに膨張発展しています。

長木　面白いことやってる人はいっぱいいるんだけど、そういうのを知らせるような手段というのはないものかなと思うんですよね。別の人が見ればそれなりに評価するものを含めると、面白いものはいっぱいあると思うんだけど、そのへんのつながりというか、広がりというのはうまく掴めてないというか、うまく機能してないんじゃないかと思いますね。いつも行くと内輪の人だけが聴いていて、もちろん内輪の人が聴いてるということは昔からあった状態だと思うんですけど、それがかなり病膏肓になっちゃって、狭く狭くなっていて、他のジャンルの人が聴かなくなっちゃったりとか、ごく一部のグループだけがそこにいて、いつもそのメンバーは変わらない。

もう少し芸術でいうと横のジャンルの関わり、コラボレーションとかいろいろ言われるわりには、そういうところが末端のところではぜんぜん生きてないという感じがするんですね。ほんとうに芸術ジャンル同士の融合とか横断とかあるのか、そんなの机上の空論じゃないかみたいな感じが、どうしてもしてしまう。それはなぜなんだろうと、いつも思うんですよね。

上野　地方に行くと、たとえば作品発表会をやるまえに、テレビ局がリハーサルを取材してきて放映するんですね。そうすると聴衆動員が断然よくなる。弘前の場合なんか、毎回のように市長さんが作品発表会に。そういうところもあるんですけどね。

武田　東京はとくにそうなのかもしれないけども、ホールの数が増えたものだから、埼玉とか神奈川まで入れたら行ききれないということがあるでしょう。昔はどこか同じところへ毎週行けば何か聴けたんですね。それも影響してるのかなという気がする。

長木　新しい人がいっぱい出てきましたね。ちょうど90年ぐらいを境にしてドッと出てきたような気がする。たとえば権代、猿谷とかちょうどいま30代の後半から40代前半ぐらいの人が。

武田　ということは芥川作曲賞はちょうど90年代の流れを若いところでは追ってると言えば追ってるということになるのかな。

楢崎　私は世代交代という印象は受けないんです。前の世代を超えるような次の世代が台頭してきたという印象はないんです。前の世代に比べたら数の上では膨大になって多様になっているんですが、一つひとつは小粒という印象を受けます。

上野　小粒だけども、これが大きく成長していくかもわからない。どうしても絶対数の作曲家が増えて、小粒にならざるをえないんじゃない。

楢崎　70年代までは、デビューのときから前の世代とは違う、ということがあったんですが80年代、90年代にはそういうインパクトはなくなった。

石田　70年代には近藤譲とかね。

上野　万博というのが一つの大きな契機だったですね。

石田　万博後に池辺とか西村。彼らに匹敵する顔ぶれもいないわけではない。権代とか何人かいるとは思うんですよ。

白石　世代交代が起こったと感じられるときとい

うのは、わりあい評価が一致しているときなんじゃないでしょうか。これは価値があるということに対して、以前は皆が集中してそうだと断言できたんだと思うんですね。でも、さっきの話でもないですけど、いまはいろんなところで、いろんな面白いことをやってる人がいる。ところがわれわれの方が面白いと思う評価の基準が一本化していない。一人ひとりの評論家がいいという作品がちがう。

長木　やっぱり雨後の筍のようにいっぱい出てきたという感じ。皆一人ひとり違うんですよ。その一人ひとりがものすごいエネルギーを持っていて、やってることはハチャメチャだけど、どこかしら面白いんですよね。そういう拡散的にうじゃうじゃっと、それぞれ何やってるかよくまだよくわからないんだけども、なんかしら興味がひかれるような、そういう人達が出てきたとという。

武田　なんかゲリラ的状況だね。

上野　「冬の劇場」の連中だって面白いですよ。このほか、「コンテンポラリα」とか、「テンプス・ノヴム」といった、演奏家連と密着した同人グループの活動が多くなりましたね。

長木　それを評価する言葉をわれわれが持ってないということかもしれないし、もしかすると、なんか将来的にはそういう拡散的な状況を評価する言葉というのが出てくるかもしれない。20世紀の終わりの90年代の時点では、個々のものを総体的に状況として把握するような言葉というのを持ってないと思うんです。これはこうだったんだというふうに、いずれは言えるのかもしれませんけど。そういう状況というのは、いままでもあったのかなという気もしますけど、どうなんでしょうかね。

武田　時代様式みたいなものが、はっきり見えてた、それが、まさにいまやグレゴリアン・チャントとかアフリカのものが、皆同じ時間に同じ場所にあるみたいな形が、作曲界でも起こってるのかなという気がするんですよ。具体的に若い人の名前をあげると、猿谷、権代、伊左治、金子、藤家の活躍もこの10年ですね。目覚ましいのはこの90年代でしょう。

長木　女性の作曲家も増えたね。

石田　田中カレンと藤家は80年代の終わりのほうに出てるんですけどね。

長木　以前は女性というと、かなりマイノリティなわけですね。歴史的にもそうだけど、そういうものが外れてしまった状況というのはありますよね。いま女性の作曲だからとりわけどうだとはおそらく思わなくなっていると思うんですよ。そういうのはこの10年間の非常にドラスティックな変化じゃないかと思うんですね。

武田　猿谷の出現というのは、すごく新鮮だったんですね。あの時代状況のなかでね。そういう新鮮さというのは、最近あまり感じなくなったというのはたしかなんですね。

長木　90年代10年間で最初のほうでドッと出て、90年代の終わりのほうになると新しい名前は出てきませんよね。ひととおり出尽くしたみたいところがあるんじゃないでしょうか。最初の5年間はいろんな名前が出てきたけど、あとの5年間というのはそうでもなくて。

石田　まずホールが増えて音楽会がこれだけ数多いというのは世界でも類がない。コンクールの種類も多い。若手でも期待されると、オケを含めた演奏団体の作品委嘱であるとか、非常に恵まれた状況が生まれる。言い方を変えると、内側から熟成していくというか、何をしたいという形での運動というのが見えなくなってしまっている。

武田　上の世代の作曲家達が、甘やかすな、甘やかすなってよく言ってますね。

石田　作品の完成度というのも大事だけれど、一方では運動とか行動とか、そういうものが若い人なりに出てこないといけないと思うんだけど、先輩たちが路線を敷いたところに乗っけてあげるという、そういうことが、いま多くなっているという印象を持ちますね。

それから一方で、これは自分が関心があるんで、どうしてもそこにすぐ話題がいくのだけれど、90年というのはちょうどアジア音楽祭をやった年です。最初の大きいものです。このときにタン・ドゥンが出てきた。去年あたりタン・ドゥンの新作

を聴く機会が実に多かった。こういう国際的なアジアの作曲家と、ある意味で肩を並べられるべきなのが、80年代後半から90年代前半に登場した世代だと思う。そう見ると、もっと日本の同世代は、その行動の範囲というのを、日本の楽壇の先輩達が敷いた路線に乗る以外のところで頑張って欲しいなという気がする。

武田　そういう状況というのは、日本以外ではどうなのかしら。ヨーロッパでもアメリカでもいいんだけれども。地域化ということは、非常に昔からよく言われてたけど、最近行かれてみてどうですか。

長木　最近行ってませんが、似たような状況ってあると思うんですけどね。飛び抜けて別な路線を出すという形でなくても、戦後制度化されたものの上を歩いているというか、それから外れるものは別のジャンルになっちゃっている。

また聴衆が違うというか、去年の坂本龍一のライヴなんかもそうだったのですが、あそこまでいっちゃうと、別な聴衆ともうビッグ・ビジネスとしてやっていて、そこはここでの話の対象になってこないという感じがあるんじゃないですかね。それでも坂本なんかのオペラは最たる例ですけど、その中間状況というのがいっぱいあったりして。吉松隆とかね。

ある意味では非常に柔軟に時代の音楽に対応してる部分もあるんだけど、やっぱり前衛とか、あるいは現代の音楽みたいなものを狭く取らざるを得ないような状況というのは別にあるのじゃないかと思うんですよね。つまりある一定のスタイルを決めないと評価ができないし、だけど決めちゃうことによって、いろいろ削ぎ落とされちゃう部分もあるし。決めなくて広がってくる部分のほうが実は非常に面白いんだけど、どうもそこまで出ていけないというか、出ていっちゃうと別の価値というふうになってしまう。

どうしてもある程度限定して見ないわけにいきませんが、そうすると、やはりそこだけの運動しかないから、あまり路線から離れるというということ自体に価値が置かれない。音楽活動のヴァラエティは増えているというのは、もちろんあるわけですけど、逆にいうと、どこまでをわれわれがこういうところで見ていくかということも考えねばならないと思うんですよね。

タン・ドゥンなんかはその間をうまく広げていってるようなところがあるし、民族音楽との関わりあいみたいなものを非常にうまく切り抜けている。アジアの作曲家というのは、逆にそういうものとの触れ合いがいつも多いから、あまり気にしなくてできるのかもしれない。それがわれわれにとって魅力的に見えているんじゃないでしょうかね。

ただ、日本の作曲家はそういう意味ではむしろもっと保守的になっているような気がするんですね。たとえば、今日的な意味でグローバリゼーションとか感じさせる曲というのはほとんどなくて、やはり日本のなかで完結している作品というのが出てくる。たぶんアジアの作曲家というのはそうじゃなくて、ACLやなんかに出てくる作品は、もっと広がりというのがあるんじゃないかという気がしてるんです。

武田　そうかもしれないですね。

長木　タン・ドゥンなんかが成功してるのは、そういった要素がかなり大きかったんじゃないかと思うんですよね。だから、どうもいまいち広がりが感じられないというのは、若い人なんか見てもね、どうしても感じちゃう。そこを思いっきり開いて新しい路線を出すか見つけていくというのが、これからの課題かもしれないし、見つけていければすごく可能性が広がるし、別の聴き手もきっとできるだろうし、まったくぜんぜん別の音楽になっていく可能性もきっとあると思うんですけどね。

武田　そういった意味で言うと、若い人達は皆自己充足しちゃっているようなところがあるのかもしれないという気もするんですね。問題がなくなっちゃったのかしらね。

長木　いまの状況である程度できるんでしょうね。活動できちゃうんですよね。そういう意味ではほんとうに恵まれていると思うんですけど。

武田　おそらくタン・ドゥンなんかの場合は、問題を見つけなきゃどうにもならない、はじまらないという、そういう立場にいるわけだからな。そういう点で注目すべきはどういう人になるのかな。若い世代ではたとえば伊左治とか権代とか……。

石田　僕は期待してるのは権代ですけどね。

長木　彼も最近の作品のほうが面白いというか、よくなりつつあるから、最初のわけわからないようなハチャメチャな作品が収斂してきてるところもあるし。彼の宗教性というのは、僕はかなりあやしいと思うんですが、あれをいけしゃあしゃあと宗教色だとか言ってやれる、ああいう仮面性みたいなのが残ってるのは、彼に可能性がすごくあると逆に思うんですよ。

上野　やはり日本は島国だしね、吹き溜まりであり行き止まり。昔からそうだけど、皆溜まっちゃうわけです、日本に。

長木　ヨーロッパのアカデミックなものと、そうでないものと、いろいろあるだろうけど、ある程度の手法を学んで帰ってきて、そのまま日本でそれをやるか、あるいは細川みたいに向こうに残ってやるかの違いはあるにしろ、そういうある程度の行動パターンというのがありましたよね。

だけど、そうじゃない部分でこれから出てこないといけないんだろうなと思うんです。でも、そういう可能性というのはいまのところあまり見えてこない。アメリカへ行った佐藤聰明みたいなのは一つの可能性かもしれないけど、手は限られてきちゃう。これから21世紀にかけて、そうじゃないもっと別の作曲家のあり方みたいなのがもし出てくればすごく面白いと思う。ただそれがどうなるか、自分でもわからないですけど。

石田　権代はいまでも作曲はパリの部屋でやってるわけでしょう。でも、ぜんぜんヨーロッパに対しての思い入れみたいなものがないのね。非常に淡々としてるわけで、同時に向こうで同じ世代で何かやってる連中とほぼ同じ感覚で自分のことを考えられるという、そういう立場ですね。それは新しい日本人じゃないかなと思うんです。田中カレンなんかは、それこそパリでずいぶん頑張っていて、出版もされるし、あるいは今度のISCMで審査員になってるわけだし、向こうでの評価は高いわけだけれど、それは西欧の価値観を共有してそのなかに入っていこうとしている。権代の場合は、そういう向こうに中心があるという発想はないみたいですね。かといって、それこそ、いけしゃあしゃあとキリスト教を玩ぶというか……。(笑)

楢崎　90年代には演奏家のつくった作品が評価されたということがあって、その一つが90年のところで挙げたコントラバスの溝入敬三の、「現音」の新人賞第1位になった作品です。それと国立劇場の邦楽器のための作曲コンクールで1位になったのが笙奏者の作品です。演奏家の作品が評価を受けたということは、作曲家には書けないものを明らかに持っていたということですね。今話題になっているグローバリゼーションとは違うところで、自分のなかのローカルなものがそこに示されていたということだとも思います。それははっきり評価していかないといけないところだなと思ったんです。

武田　なるほどね。

ちょっと話題を変えて、この10年間に成熟を重ねている世代というか、細川、西村、新実、佐藤聰明とか、あの世代の10年間というのはどうだったのかな。細川は変わってきたと思いますか？

白石　技法は新しく試みたりしてるけど、本質はぜんぜん変わってはいないですね。細川は成熟という言葉とちょっとそぐわない作風を持っていて、一作ごとに未知の音との出会いを演出するという部分はずっと同じじゃないかと思うんですけれど。活動範囲も広がったし、いい演奏家に演奏してもらうということが増えてきたことはあって、大きな作品を書き、大きな場で発表することは増えてきている。ただ、この10年ぐらいの間にいちおう書法としては一つ二つ新しく出したぐらいです。そういう意味で西村のほうが、もしかするといろんなことをやってきた10年間かなという気もしますね。

石田　細川はいつも聴いてるということではない

けれど、あの世代ということでいえば、いちばん順当にいろんな角度の作品を自分の姿勢を変えずに出してきている。一作一作模索はするんだけれど、でも自分の立てたコンセプトは変わらない。だからメディアが変わってくると、そのメディアによって自分が変わっていくという感じですね。

96年にニューヨークでフォーカスというフェスティバル、これは毎年結構面白い内容をやってるんだけれど、そのフェスティバルがパシフィック・リムの諸国全部、アラスカから南米まで拡げて作曲家を拾ったんですね。そのときに日本で取り上げられたのが黛、湯浅、それから佐藤、西村、細川、田中カレンの6名だったわけで、リンカン・センターでやった6夜の音楽会だけれど、向こうから見てのオリジナリティということで、タイプの異なった日本の作曲家を選んだとき、武満以外ではこのぐらいの顔触れが出てくるんだなとわかった。そういう意味では4年ほど前だけれど、佐藤とか西村、細川、田中は、その間の世代をぬかして個性があると見られている。

長木　たとえば東と西の融合とか、そういう問題の立て方があって、石井とかの世代と、武満もそうだけど、ずっと悩んできて、細川ぐらいまではそれはずっと変わってないと思うんですが、その中間が出てきたというのが次の世代じゃないかと。だから東がどうで西がどうだというふうな問題の立て方自体が、もうその次の世代はまったく関知してない。権代というのはまさにそうだけども。

武田　そうですね。数万円でヨーロッパだってアメリカだって行ってこられる。

長木　飛び抜けちゃったところが90年の新しい世代、世代ということが言えればね。新しい世代として見るのであれば、そこは1つの特徴だと思うんですよね。ただそうやって見ても、相変わらずヨーロッパのほうからオリエンタルみたいなものを見ると、向こうの制度のなかでのオリエンタリズムというのはあるから、ある程度名前は決まってきてるという感じもするんですね。だから、まさに権代みたいな人をヨーロッパのね、いままで見方でどういうふうに見てくれるのか。「見てくれる」というのはちょっと植民地的な発想かもしれないけども、そのへんをこれから注目すべきかなという気がするんですね。

田中カレンも、彼女としては不本意かも知れないけど、向こうのなかに入って、細川もそういった意味では向こうの音楽社会のなかに、あるいは音楽の制度のなかにうまく乗れた、その意味ではいちばん最後の、完成された世代じゃないかと思うんです。これからもっと別な関わり方をまさにしなければいけないし、そういうものを求めていくべきなんじゃないかと思うんですね。

武田　いまのことは楢崎さんはどう思う？

楢崎　おっしゃるとおり、細川の世代までは東と西という二つの価値観のなかに身を置いた時代だったと思います。東西の二元的な価値観が多極化してきた現在の状況のなかで、多極化そのものに身を置くか、あるいはローカルな中心を掘り下げるか。グローバリゼーションの方が評価される傾向にあるようですが、多極化のなかでこそローカルなものが問題にされないといけない。グローバリゼーションは、ローカルな中心があるから言えることなんですけど。

武田　そういう見方をすると、猿谷はどういうことになるのかな。あの人は結局日本で作曲を勉強しなかったという特殊なところもあるわけで、いきなりポンと日本に定着しちゃったんでしょう。この間の2月に大阪センチュリー交響楽団に書いた《揺光の嵩まり》なんかでは、あまり変わってないのかなという気がしたんだけど。

もう少し遡った世代の湯浅、石井、一柳、三善はどうでしょうか。

上野　一柳が変わってきたというと妙に聞こえるかも知れないけれど、このごろ一つひとつの作品が変わってるような気がする。大きな作品よりも小さな作品のほうでね。邦楽器の作品も多いし、邦楽家とかなり接近してるし、彼のコンセプトは相当日本的なほうを指向している。

長木　モニュメンタルなものを書くことが多くなりましたよね。諸井もそうだし、三善がオペラを

これまでのいろんな書法を使って書いたということ。そういうのが任せられるようになったということもあるし。一柳も《モモ》を書いたし、武満は残念ながらできなかったけど。

石井眞木もそうなんですよね。逆に言うと、そういうものをつくる場ができたということはあるし、そういうものを聴く人たちも育ってきているから当然なんでしょうけど。ただ、見てると、やはり一つそれまでのことを、まとめるというときになっているかもしれないと思いました。

武田　聞くところによると、湯浅もオペラを考えてるみたいですね。

長木　諸井もいま考えてるわけで、皆さんオペラに向かっている。オペラというジャンルが、昔は限られた人しか書かなかったけども、戦後第一線でやってきた人たちが、そういうものを書きはじめたということは、大きな時代の違いだとは思うんですね。

白石　昔だったらストーリー性を持ったオペラは価値がないというか、書こうとしなかったでしょうね。オペラというものを書くことに対する抵抗感があったと思うけど、90年代は前衛的な仕事をしている人がオペラを書きたいと素直に思う時代に変わってきましたね。

石田　世界的な流れもあれば、もう一つは日本のオペラを担ってる人たち、とくに演出を含めて新しい感覚を持つ人たちが、オペラに入ってきている。作曲家だけじゃなくて、オペラ全体がある種の成熟をしてきたという感じがする。ただ、世界的に見れば、オペラの題材が、いまだ狭いですね。

長木　《モモ》みたいな作品で他のジャンルと、あのくらいの規模で作曲家が一緒に仕事をするというのは初めてだと思うんですよね。そこでいろいろお互いに妥協しなければいけないところもあるだろうし、うまくいったところもある。それからこうしておけばこういったのにと、いろいろ感慨を持たれると思うんですね。そういうノウハウみたいなものが、これから蓄積されていく時代なんじゃないかと思うんです。

石田　日本の新劇以降の演劇運動で、これは60年代にはじまる黒テント系が、林光の室内オペラに一つの成果を出したとすれば、同じ60年代にはじまる早稲田小劇場の鈴木忠志が今度は《リア王》で細川と、ともかく一種のコラボレーションをやった。演劇とのコラボレーションの可能性というのは、まだまだあるはずです。まだ少な過ぎますよね。

可能性として開かれてるものはたくさんあるのだから、それをどの世代の人たちがやるか、あるいはどういう個性の人がやるか、あるいはどういうコンセプトでやるか、そこにわれわれは期待はするわけでね。

長木　情報管理という言い方は変だけど、そろそろ散発的なものをどこかでちゃんと一元化することも非常に重要だと思うんです。リアルタイムにここでは何をやってるということがわかるような状況が、そろそろできてもいいと思うんですよね。インターネットの時代になっても、相変わらず九州では何をやってるかわからない。そういうことをやらなければ、何もかも見えなくなってる状況になる。見えたから何ができるかということは、またその先の問題ですけども、やはりざっと見ただけでも、いろんな面白いことが起こっているのに、それがちゃんと状況として伝わってないという問題はあると思うんです。そういうことをもう少しやっていく可能性はあると思う。

そういう情報センターみたいなのができないと、たとえば同じ日にまったく同じようなピアノの演奏会が2カ所も3カ所もあって、結局行けないというような、そういうレベルのことすらあるわけで、それぐらいは最低なんとかならないかと思います。

石田　東京だけ見ても80年代までは、現代音楽の公演はシーズン・オフというか、1年のなかでちょっと外れた時期に集中したという、そんな印象があったけど、いま年がら年中やってますからね。ただ逆に言うと、メッカにあたる会場がない。たしかに東京オペラシティが、かなり数は多いと思うんだけれど、少し規模が大き過ぎる。そこを埋めるために、内容的な傾向がある程度つくられて

しまう。そうではなくて、必ずそこへ行けば聴けるというような、現代音楽のライヴハウスのような雰囲気の場所というのが日本にはあまりない。

長木　もっと狭くても、なんか雑駁な雰囲気というのがありましたよね。みな洗練されてきちゃっている。

武田　東京オペラシティのリサイタルホールは、わりと60年代の草月と似た雰囲気になってきたかなという気もしますが。

　ちょっと先が見えるようで見えなくて、広がるようでいて広がってなくて、まさにそういう時代なんだろうな、きっと。どうも長時間2回にわたり、ありがとうございました。

（以上2000年2月13日）

資料

作品一覧

座談会で採り上げられた作品についてのデータを世界初演年ごとに作曲者名の五十音順に掲載いたしました。

●

【記載内容】

①作曲年
②楽器編成
③演奏時間
④楽譜出版
⑤レコード／CD
⑥初演（年月日、場所／演奏者）
⑦その他（委嘱者／受賞等）

略号表

楽器・声域他

A	アルト
A-...	アルト・…
B-...	バス・…
bar	バリトン（金管）
Br	バリトン
Bs	バス
cb	コントラバス
cel	チェレスタ
cemb	チェンバロ
cl	クラリネット
C-T	カウンター・テノール
Ens	アンサンブル
fg	ファゴット
fl	フルート
g	ギター
hp	ハープ
hrn	ホルン
J-ins	和楽器
keyb	キーボード
mar	マリンバ
Ms	メゾ・ソプラノ
orch	オーケストラ
ob	オーボエ
org	オルガン
p	ピアノ
perc	パーカッション
picc	ピッコロ
S	ソプラノ
sax	サクソフォーン
SQ	弦楽四重奏
str	弦楽器
T	テノール
tb	トロンボーン
timp	ティンパニ
tp	トランペット
tub-bells	チューブラー・ベルズ
va	ヴィオラ
vc	チェロ
vn	ヴァイオリン

レーベル名（発売元）

ALM	ALM（コジマ録音）
Au	ART UNION（アート・ユニオン）
C	コロムビア（日本コロムビア）
Cam	カメラータ（カメラータ・トウキョウ）
De	デンオン（日本コロムビア）
Fon	フォンテック（フォンテック）
G	グラモフォン（ユニヴァーサル ミュージック）
JFC	JFC（日本作曲家協会）
Ph	フィリップス（ユニヴァーサル ミュージック）
S	ソニー（ソニー・ミュージックエンタテインメント）
To	東芝（東芝EMI）
WWCC	（ナミ・レコード）

平成元年 1989

武満徹（1930－1996）
Toru Takemitsu
■《ア・ストリング・アラウンド・オータム》
A String Around Autmn
①1989年（平成元年）
②va, orch
③約23分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Ph－PHCP160
⑥1989.11.29 パリ／今井信子（va），ケント・ナガノ＝パリ管弦楽団
日本初演：1990.11.5 東京　オーチャードホール／今井信子（va），小澤征爾＝新日本フィルハーモニー交響楽団
⑦フランス革命200周年記念「パリの秋」芸術祭委嘱

平成2年 1990

池辺晋一郎（1943－）
Shin-ichiro Ikebe
■《シンフォニーⅣ》
Symphony Ⅳ
①1990年（平成2年）
②orch
③約25分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1990.7.4 東京　サントリーホール「N響MIF '90」／外山雄三＝NHK交響楽団
⑦NHK交響楽団委嘱／第39回尾高賞

伊藤康英（1960－）
Yasuhide Ito
■吹奏楽のための交響詩《ぐるりよざ》
"Gloriosa (Gururiyoza)" Symphonic Poem for Band
①1990年（平成2年）
②ウィンドEns, 龍笛
③約20分
④音楽之友社／Ongaku no Tomo Sha
⑤佼成出版社 KOCD2902, ブレーン BOCD7402
⑥1990.2.16 佐世保　佐世保市民会館／岩下章二＝海上自衛隊佐世保音楽隊
管弦楽版は1998年作曲。1999.4.18 小田野宏之＝京都市民管弦楽団により初演
⑦海上自衛隊佐世保音楽隊委嘱

北爪道夫（1948－）
Michio Kitazume
■オーケストラのための《昇華》
Sublimation
①1990年（平成2年）
1991年（平成3年）一部改訂
②orch
③約14分
⑤Fon－FOCD2514
⑥1990.12.26 京都　京都会館／井上道義＝京都市交響楽団
⑦京都市委嘱

金光威和雄（1933－）
Iwao Konkoh
■《沢内解釈甚句》《ソンデコ由来節》《さんさ踊り伝説節》（三部作）
①1990年（平成2年）
②S, 3 Singer, fl, p, perc
③約14分, 14分, 22分
⑥《沢内解釈甚句》《ソンデコ由来節》
1990.5.15 盛岡　岩手県民会館／一條静子（S），條声会有志（ワキ），野口龍（fl），松倉利之（perc）
《さんさ踊り伝説節》1991.1.25 東京　草月ホール／一條静子（S），條声会有志（ワキ），野口龍（fl），松倉利之（perc）
⑦一條静子委嘱

近藤譲（1947－）
Jo Kondo
■《林にて》
In the Woods
①1990年（平成2年）
②orch
③約23分
④University of York Music Press, UK
⑤Cam－32CM190
⑥1990.5.26 大阪　ザ・シンフォニーホール／尾高忠明＝大阪フィルハーモニー交響楽団
⑦第16回民音現代作曲音楽祭委嘱／第39回尾高賞

高橋悠治（1938－）
Yuji Takahashi
■《ありのすさびのアリス》～矢川澄子の詩による
Arino susabi no ARISU
①1989年（平成元年）
②打物，歌，3附歌，倭琴，石笛，土笛，舞
③約30分
⑥90.4.27 東京　国立劇場小劇場　第8回音曲公演「ヤマトゴトⅡ復元・弥生のコト」／高橋悠治，高田和子，松原弓子，草間路代，下野戸亜弓，渡辺広孝，上杉紅童，竹屋敬子
⑦国立劇場委嘱

高橋裕（1953−）
Yutaka Takahashi
■《シンフォニック・カルマ》
Symphonic Karma
①1990年（平成2年）
②orch
③約22分
⑤De−COCO80778〜9
⑥1990.7.31 東京　オーチャードホール「時の会」管弦楽作品展／岩城宏之＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦第1回芥川作曲賞

武満徹（1930−1996）
Toru Takemitsu
■《ヴィジョンズ》
Visions
①1990年（平成2年）
②orch
③約13分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤C−COCO9441
⑥1990.3.8 シカゴ／ダニエル・バレンボイム＝シカゴ交響楽団
日本初演：1990.4.25 東京　東京文化会館／ダニエル・バレンボイム＝シカゴ交響楽団
⑦シカゴ交響楽団委嘱（創立100周年記念）

武満徹（1930−1996）
Toru Takemitsu
■《フロム・ミー・フローズ・ホワット・ユー・コール・タイム》
From me flows what you call Time
①1990年（平成2年）
②5 perc, orch
③約30分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤S−SRCR2156
⑥1990.10.19 ニューヨーク　カーネギーホール／ネクサス，小澤征爾＝ボストン交響楽
日本初演：1991.11.7 東京　サントリーホール「5周年記念フェスティバル」／ネクサス，小澤征爾＝新日本フィルハーモニー交響楽団
⑦ニューヨーク・カーネギーホール委嘱（創立100周年記念）

西村朗（1953−）
Akira Nishimura
■ファゴット協奏曲《タパス》
Fagotto Concerto "Tapas"
①1990年（平成2年）
②fg, str, 4perc
③約17分
⑤Cam−32CM175
⑥1990.8.23 草津　天狗山レストハウス／馬込勇（fg），新実徳英＝草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティバルオーケストラ
⑦第11回草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティバル委嘱

林光（1931−）
Hikaru Hayashi
■オペラ《ハムレットの時間》（萩京子との共作）
Opera "Hamlet's Hour" (Joint Works with Kyoko Hagi)
①1990年（平成2年）
②10 Singer, p, electric-org
③約150分
⑥1990.5.11 東京　俳優座劇場／オペラシアターこんにゃく座

林光（1931−）
Hikaru Hayashi
■《八月の正午に太陽は……》
At Noon, the August Sun
①1990年（平成2年）
②S, orch
③約35分
⑤Fon−FOCD3132
⑥1990.10.23 東京　サントリーホール「作曲家の個展'90 林光」／藍川由美（S），外山雄三＝東京都交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

松尾祐孝（1959−）
Masataka Matsuo
■《飛来Ⅳ》独奏ピアノを伴う室内オーケストラの為に
Hirai IV
①1990年（平成2年）
②p, 室内orch
③約18分
⑤ブレーン　BOCD-3101
⑥1990.9.11 東京　こまばエミナース／中川俊郎（p），小出雄聖＝アールレスピラン
⑦ISCM世界音楽の日々1992ワルシャワ大会入選

松永通温（1927−）
Michiharu Matsunaga
■ピアノとオーケストラのための《切絵図》
Divided Elaborate Maps
①1990年（平成2年）
②p, orch
③約19分
⑤ALM−ALCD3024〜5
⑥1990.6.11 東京　東京文化会館「オーケストラ・プロジェクト'90」／松永加也子（p），小松一彦＝東京交響楽団

間宮芳生（1929−）
Michio Mamiya
■オペラ《夜長姫と耳男》
Opera "Yonaga-hime and Mimio"
①1990年（平成2年）
②2S, T, 2Br, 室内Ens
③約65分
⑥1990.5.6 水戸　水戸芸術館コンサートホール／豊田喜代美（S），水野賢司（Br）他，間宮芳生＝水戸室内管弦楽団
⑦水戸芸術館委嘱

溝入敬三（1955−）
Kiezo Mizoiri
■《ドント・タッチ・ザ・ラーフィング・ストーン》
Don't Touch the LAUGHING STONE
①1990年（平成2年）
②cb, 篳篥
③約10分
⑥1990.12.21 東京　セシオン杉並「現音秋の音楽展'90」／溝入敬三（cb），溝入由美子（篳篥）
⑦現音作曲新人賞

三善晃（1933−）
Akira Miyoshi
■ギターと弦楽四重奏のための《黒の星座》
"Constellation Noire" pour Guitare et Quartuor à Cordes

①1989年（平成元年）
②g, SQ
③7分40秒
⑤Cam－32CM105
⑥1990.3.15 東京　津田ホール／佐藤紀雄（g）他
⑦芳志戸幹雄委嘱／1992年弦楽四重奏曲《黒の星座》に改編。

三輪眞弘（1958－）
Masahiro Miwa
■《夢のガラクタ市》～前奏曲とリート～
Trödelmarkt der Träume
①1990年（平成2年）
②hp, computer
③約13分
④Feedback Studio Verlag（ケルン）
⑤Fon－RZF1010
⑥1990.3.26 東京　東京文化会館小ホール／長澤真澄（hp）
⑦長澤真澄委嘱

吉松隆（1953－）
Takashi Yoshimatsu
■《カムイチカプ交響曲》
Kamui Chikap Symphony
①1990年（平成2年）
②orch
③約45分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Cam－32CM190
⑥1990.5.26 大阪　ザ・シンフォニーホール／尾高忠明＝大阪フィルハーモニー交響楽団
⑦第16回民音現代作曲音楽祭委嘱

吉松隆（1953－）
Takashi Yoshimatsu
■二十絃箏独奏曲《もゆらの五ツ》
Moyura
①1990年（平成2年）
②二十絃箏
③約13分
⑥1990.12.10 東京　TOKYO FMホール／吉村七重（二十絃箏）
⑦吉村七重委嘱

平成3年 1991

江村哲二（1960－）
Tetsuji Emura
■《時に……》オーケストラのためのToki ni…
①1990年（平成2年）
②orch
③約12分
⑥1991.5.22 東京　東京文化会館「現代日本のオーケストラ音楽」第15回演奏会／外山雄三＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦日本交響楽振興財団第13回作曲賞入選

吉川和夫（1954－）
Kazuo Kikkawa
■《論議ビヂテリアン大祭》
Rongi "Vegetarian Ritual"
①1991年（平成3年）
②聲明, 室内Ens
③約130分
④春秋社（2001年3月予定）
⑤春秋社（2001年3月予定）
⑥1991.11.15 東京　国立劇場小劇場／孤嶋由昌，海老原広伸，新井弘順，山本東次郎，山本則俊，草刈麻紀，飯塚一郎，手島志保，溝入敬三，松倉利之ほか
⑦国立劇場委嘱

小畑郁男（1951－）
Ikuo Kobata
■管弦楽のための《虹の遊戯》
Rainbow Game
①1991年（平成3年）
②orch
③約20分
⑥1991.2.7 長崎　長崎市公会堂／黒岩英臣＝長崎楽友協会管弦楽団
⑦長崎楽友協会委嘱

武満徹（1930－1996）
Toru Takemitsu
■《ハウ・スロー・ザ・ウインド》
How slow the Wind
①1991年（平成3年）
②orch
③約11分
④日本ショット社／Schott Japan
⑥1991.11.6 グラスゴー／ユッカ＝ペッカ・サラステ＝スコティッシュ室内管弦楽団
日本初演：1994.11.30 大阪　ザ・シンフォニーホール／岩城宏之＝メルボルン交響楽団
⑦ホープ・スコット信託委嘱

田中友子（1933－）
Tomoko Tanaka
■邦楽劇《藤十郎の恋》
Tojuro no Koi
①1990年（平成2年）
②T, 二十絃箏, Ms, 尺八, perc, 2三絃
③約25分
⑥1991.9.24 東京　津田ホール／日本音楽集団，曽我淑人，浅香五十鈴，田村拓男指揮，観世栄夫演出
⑦日本音楽集団委嘱

西村朗（1953－）
Akira Nishimura
■二重協奏曲《光の環》
Double Concerto "A Ring of Lights"
①1991年（平成3年）
②vn, p, orch
③約25分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Fon－FOCD3174
⑥1991.4.30 東京　サントリーホール「N響MIF '91」／徳永二男（vn），木村かをり（p），岩城宏之＝NHK交響楽団
⑦NHK交響楽団委嘱／第40回尾高賞

西村朗（1953－）
Akira Nishimura
■《暁の音楽》
Music of Dawn
①1991年（平成3年）
②聲明, 雅楽, orch
③約75分
⑥1991.6.29 大阪　大阪フェスティバルホール「大阪永久平和祈念祭典 '91」／黄檗宗青年僧の会梵唄団，天王寺楽所，雅亮会，田中良和＝大阪センチュリー交響楽団
⑦「大阪永久平和祈念祭典 '91」委嘱

藤枝守（1955−）
Mamoru Fujieda
■《フランチェスカの分身Ⅰ》
Double of Francesca I
①1991年（平成3年）
②2keyb, perc, Ms
③約15分
⑥1991.11.18 東京　カザルスホール／ダニエル・レンツ・グループ
⑦インターリンク・フィスティバル委嘱

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■《アヴェ・マリア》
Ave Maria
①1991年（平成3年）
②混声合唱
③約11分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Fon−FPCD1612
⑥1991.2.15 東京　カザルスホール／田中信昭＝東京混声合唱団
⑦東京混声合唱団委嘱

松平頼暁（1931−）
Yori-Aki Matsudaira
■《尖度Ⅰ》
Kurtosis
①1982年（昭和57年）
②orch
③約15分
⑤Cam−32CM218，Fon−FOCD3188
⑥1991.6.15 東京　東京芸術劇場「第17回民音現代作曲音楽祭」／井上道義＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦1984年ISCM音楽祭世界音楽の日々入選

黛敏郎（1929−1997）
Toshiro Mayuzumi
■オペラ《金閣寺》
Opera "KINKAKUJI"
①1976年（昭和51年）
②Singer, 混声合唱, orch
③約90分
④ペータース
⑤Fon−FOCD3282〜3
⑥1976年ベルリン初演
日本初演：1991.3.6 東京　オーチャードホール／勝部太，松本進，亀田眞由美，上原正敏，山口俊彦，佐野正一，大沼美恵子，蔵田雅之，桑田葉子，加納里美，東京混声合唱団，岩城宏之＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦ベルリン・ドイツ・オペラ委嘱

南聡（1955−）
Satoshi Minami
■《彩色計画Ⅴ》
Coloration Project V
①1990年（平成2年）
②orch
③約13分
⑥1991.2.7 東京　都市センターホール「現代の音楽展 '91」／小鍛冶邦隆＝東京交響楽団

三善晃（1933−）
Akira Miyoshi
■ヴァイオリンと弦楽合奏のための《弦の星たち》
"Étoiles à cordes" pour Violon et Ensembre des Cordes
①1991年（平成3年）
②vn, 弦楽Ens
③約12分
⑥1991.3.11 東京　オーチャードホール／諏訪内晶子（vn），高関健＝桐朋弦楽オーケストラ

山田泉（1952−1999）
Izumi Yamada
■《一つの素描》ピアノとオーケストラによるⅡ
One Design Ⅱ
①1991年（平成3年）
②p, vn, orch
③約34分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Cam−32CM218
⑥1991.6.15 東京　東京芸術劇場「第17回民音現代作曲音楽祭」／木村かをり（p），篠崎功子（vn），井上道義＝東京フィルハーモーニー交響楽団
⑦第17回民音現代作曲音楽祭委嘱／第2回芥川作曲賞

吉松隆（1953−）
Takashi Yoshimatsu
■交響曲第2番《地球（テラ）にて》
Symphony No.2 "At Terra"
①1991年（平成3年）
②orch
③約32分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Cam−30CM178〜9
⑥1991.5.22 東京　東京文化会館「現代日本のオーケストラ音楽」第15回演奏会／外山雄三＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦「現代日本のオーケストラ音楽」委嘱

平成4年 1992

安部幸明（1911－）
Komei Abe
■《弦楽四重奏曲第15番》
String Quartet No.15
①1992年（平成4年）
②SQ
③約17分
④日本作曲家協議会／The Japan Federation of Composers
⑥日本初演：1992.11.8 川口　リリア総合文化センター／ベルリン弦楽四重奏団

一柳慧（1933－）
Toshi Ichiyanagi
■《汽水域》
Interplay
①1992年（平成4年）
②fl, 弦楽Ens
③約15分
④日本ショット社／Schott Japan
⑥1992.11.7 水戸　水戸芸術館コンサートホールATM／工藤重典（fl），水戸室内管弦楽団
⑦水戸室内管弦楽団委嘱

金田潮兒（1948－）
Choji Kaneta
■オーケストラのための《輪廻Ⅰ》
独奏尺八パートを含む
Motempsychose I
①1992年（平成4年）
②尺八, orch
③約20分
⑥1992.1.20 東京　東京芸術劇場「オーケストラ・プロジェクト'92」／福田輝久（尺八），大友直人＝東京交響楽団

川島素晴（1972－）
Motoharu Kawashima
■《マニック・サイコシスⅠ》
Manic Psychosis I
①1991～92年（平成3～4年）
②fl
③約5分～7分
④Bärenreiter
⑤musicaphon－M55510, Fon－FOCD2548
⑥1992.3.28 秋吉台　秋吉台家族旅行村「秋吉台国際作曲賞選考演奏会」／カリン・レヴァイン（fl）
⑦第2回秋吉台国際作曲賞，ダルムシュタット奨学生賞

佐藤眞（1938－）
Shin Sato
■《管弦楽のためのバラード》
Ballade for Orchestra
①1992年（平成4年）
②orch
③約18分
⑤Au－ART3042
⑥1992.6.9 東京　東京文化会館　第16回「現代日本のオーケストラ音楽」／大友直人＝東京交響楽団
⑦日本交響楽振興財団委嘱

猿谷紀郎（1960－）
Toshiro Saruya
■《息の綾》
Fiber of the Breath
①1992年（平成4年）
②弦楽orch
③約20分
⑤Fon－FOCD2547
⑥1992.11.26 東京　サントリーホール／徳永二男（vn），オリヴァー・ナッセン＝NHK交響楽団
⑦第3回芥川作曲賞

篠原眞（1931－）
Makoto Shinohara
■和洋楽器のオーケストラと混声合唱のための《夢路》
YUMEJI "Ways of Dreams"
①1992年（平成4年）
②J-ins-Ens, 混声合唱, 室内orch
③約15分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Cam－32CM268
⑥1992.6.4 東京　東京文化会館「第18回民音現代作曲音楽祭」／日本音楽集団，東京混声合唱団，外山雄三＝新日本フィルハモニー交響楽団
⑦民主音楽協会委嘱

高橋悠治（1938－）
Yuji Takahashi
■《菩薩管絃電脳立》
Bosatsu Kangen Dennoodate
①1992年（平成4年）
②花架拳, computer, 横笛, 篳篥, 笙, 倭琴, 箜篌, 2打物, keyb
③約43分
⑥1992.9.30 東京　国立劇場大劇場　第16回音楽公演「観想の山河阿弥陀」／燕飛霞（花架拳），高橋悠治（computer），芝祐靖（横笛），八百谷啓（篳篥），石川高（笙），高田和子（倭琴），松井久子（箜篌），神谷百子（打物），加藤恭子（打物），三宅榛名（声）他
⑦国立劇場委嘱

土居克行（1944－）
Yoshiyuki Doi
■《ランドスケープ・オブ・ザ・ウインド》
Landscape of the Wind
①1992年（平成4年）
②brass, perc
③約11分
⑥1992.3.21 東京　石橋メモリアルホール／玉川大学　英国スタイルによる金管バンド
⑦玉川大学金管バンド委嘱

中村透（1946－）
Toru Nakamura
■オペラ《キジムナー時を翔ける》
Opera "Kijimuna"
①1991年（平成3年）
②6 Singer, 混声合唱, orch, J-ins, hp, cemb
③約135分
⑥1992.2.8 那覇　沖縄コンベンションセンター／星出豊＝新星日本交響楽団　他
⑦平成2年度文化庁舞台芸術創作奨励特別賞

新実徳英（1947－）
Tokuhide Niimi
■《ヘテロリズミクス》
Heterorhythmix
①1991年（平成3年）

②orch
③約19分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Fon－FOCD2513
⑥1992.1.20 東京　東京芸術劇場「オーケストラ・プロジェクト'92」／大友直人＝東京交響楽団

西村朗（1953－）
Akira Nishimura
■弦楽四重奏曲第2番《光の波》
String Quartet No.2 "Pulse of the Lights"
①1992年（平成4年）
②SQ
③約16分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Fon－FOCD3199
⑥1992.5.21 東京　カザルスホール／アルディッティ弦楽四重奏団
⑦アルディッティ弦楽四重奏団，カザルスホール委嘱

西村朗（1953－）
Akira Nishimura
■《星辰神楽》
Seishin-kagura
①1992年（平成4年）
②8 perc（J-perc-Ens）
③約25分
⑥1992.9.14 東京　国立劇場／パーカッション・グループ'92
⑦国立劇場委嘱

西村朗（1953－）
Akira Nishimura
■アストラル協奏曲《光の鏡》
オンド・マルトノとオーケストラのための
Astral Concerto "A Mirror of Lights"
①1992年（平成4年）
②onde Martenot, orch
③約12分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Fon－FOCD3174
⑥1992.10.6 東京　サントリーホール「作曲家の個展'92 西村朗」／原田節（オンド・マルトノ），岩城宏之＝東京交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

原嘉壽子（1935－）
Kazuko Hara
■オペラ《那須與一》
Opera "Nasuno Yoichi"
①1991年（平成3年）
②13 Singer, 混声合唱, orch
③約100分
⑥1992.7.4 宇都宮　栃木県民オペラ10周年記念公演／星出豊＝宇都宮管弦楽団　他
⑦栃木県民オペラ委嘱

福士則夫（1945－）
Norio Fukushi
■フルートとギターのための《夜は紫紺色に明けて》
Dawn Brightens the Day of Mortals Robed in Purple for Flute and Guitar
①1992年（平成4年）
②fl, g
③約12分
④音楽之友社／Ongaku no Tomo Sha
⑤Cam－32CM288，De－COCO80448～9
⑥1992.8.24 草津　草津音楽の森コンサートホール　第13回草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティバル／小泉浩（fl），佐藤紀雄（g）
⑦草津夏期国際音楽アカデミー＆フェスティバル委嘱

水野修孝（1934－）
Shuko Mizuno
■《交響的変容》
（第1部 テュッティの変容，第2部 メロディとハーモニーの変容，第3部 ビートリズムの変容，第4部 合唱とオーケストラの変容）
Symphonic Metamorphoses
①第4部 1987年（昭和62年）
（注：第1部 1978年，第2部 1979年，第3部 1983年）
②S, 和太鼓, timp, orch, 混声合唱
③約185分
⑤CDT1017～9
⑥1992.9.20 千葉　幕張メッセ・イベントホール「幕張クラシック・スペシャル'92」／秋元智子（S），林英哲（和太鼓），細谷一郎（timp），岩城宏之＝東京交響楽団，岡田知之打楽器合奏団，東京混声合唱団，栗友会合唱団

三宅榛名（1942－）
Haruna Miyake
■合唱曲《かむとけの曇らふ空の》…〈万葉集より〉
Kamtokeno… from Manyo Collection
①1992年（平成4年）
②三絃, p, 混声合唱
③約19分
⑥1992.2.19 東京　カザルスホール／高田和子（三絃），高橋悠治（p），田中信昭＝東京混声合唱団
⑦東京混声合唱団委嘱

三輪眞弘（1958－）
Masahiro Miwa
■《東の唄》
Gesänge des Ostens
①1992年（平成4年）
②p, 2computer-p, computer（2台のピアノと1人のピアニスト）
③約25分
④Feedback Studio Verlag
⑤Fon－FOCD3425
⑥1992.2.21 横浜　横浜市教育文化ホール／高橋アキ（p）
⑦高橋アキ委嘱

諸井誠（1930－）
Makoto Moroi
■協奏交響曲第3番《神話の崩壊》
Sinfonia Concertante No.3 "Demise of Mythologies"
①1992年（平成4年）
②orch, mar, 三十絃箏, org
③約50分
⑥1992.4.13 東京　サントリーホール東京交響楽団現代日本の音楽の夕べシリーズ「諸井誠60年の軌跡」／高橋美智子（mar），宮下伸（三十絃箏），松井直美（org），秋山和慶＝東京交響楽団
⑦東京交響楽団委嘱

諸井誠（1930－）
Makoto Moroi
■竹林奇譚巻之壱《斐陀以呂波》
Chikurinkitan Vol.1 "Hidairoha"
①1991年（平成3年）

②7 尺八, 鳴子（numerous）
③約78分
⑤S－SRCR8605
⑥1992.11.4 東京　TOKYO FMホール／三橋貴風（尺八）他

湯浅譲二（1929－）
Joji Yuasa
■《始源への眼差Ⅱ》
Eyes on Genesis Ⅱ
①1992年（平成4年）
②orch
③約12分
④日本ショット社／Schott Japan
⑥1992.5.1 東京　サントリーホール「N響MIF '92」／外山雄三＝NHK交響楽団
⑦NHK交響楽団委嘱

平成5年 1993

一柳慧（1933－）
Toshi Ichiyanagi
■室内交響曲第2番《アンダーカレント》
Undercurrent
①1993年（平成5年）
②orch
③約15分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤G－POCG-1719
⑥1993.9.19 名古屋　愛知県芸術劇場コンサートホール／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦岩城宏之委嘱

伊東乾（1965－）
Ken Ito
■《コスモトロフ　オーケストラの為の管絃／催馬楽》
Cosomostrophe Quan-guen/Sai-ba-raq
①1993年（平成5年）
②p, orch
③約14分
④日本作曲家協議会／The Japan Federation of Composers
⑥1993.10.6 東京　東京文化会館／大井浩明（p），井上道義＝東京都交響楽団
⑦都政施行50周年記念都民コンサート入賞

北爪道夫（1948－）
Michio Kitazume
■管弦楽のための《映照》
Ei-sho
①1993年（平成5年）
②orch
③約21分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Fon－FOCD2514
⑥1993.7.13 東京　東京文化会館　第17回「現代日本のオーケストラ音楽」／小松一彦＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦日本交響楽振興財団委嘱／第42回尾高賞

猿谷紀郎（1960－）
Toshiro Saruya
■《ゆらら　おりみだり》
Fractal Vision
①1993年（平成5年）
②orch
③約15分
⑥1993.12.26 京都　京都会館第一ホール／高関健＝京都市交響楽団
⑦第43回尾高賞

田中カレン（1961－）
Karen Tanaka
■《Initium》
①1993年（平成5年）
②orch, live-electro
③約13分
④Chester Music
⑤Cam－32CM319
⑥1993.6.23 東京　東京芸術劇場／秋山和慶＝東京交響楽団
⑦第19回民音現代作曲音楽祭委嘱

田村文生（1968－）
Fumio Tamura
■《響応夫人》
Kyo-o Fujin
①1993年（平成5年）
②ウィンドorch
③約7分
④河合楽譜／KG
⑤S－SRCR-9728
⑥1993 東京／東京佼成ウインドオーケストラによる録音
⑦1993年朝日作曲賞入選，1994年全日本吹奏楽コンクール課題曲

中村典子（1965－）
Noriko Nakamura
■《サクラ》
"SAKURA" Metamorphosis
①1993年（平成5年）
②2 vn
③約13分
④日本作曲家協議会／The Japan Federation of Composers
⑤JFC－R9601 Vol.24（FPCD 2453）
⑥1993.12.3 京都　京都コンピュータ学院ホール「'93京都若い作曲家による連続作品展 XIII」／辻井淳（vn），谷

山あけみ（vn）
⑦芸術祭典・京委嘱

新実徳英（1947−）
Tokuhide Niimi
■《生命連鎖》
Chain of Life
①1993年（平成5年）
②室内orch
③約16分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤G－POCG-1719
⑥1993.8.31 金沢　金沢観光会館／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦岩城宏之委嘱

西村朗（1953−）
Akira Nishimura
■《光のマントラ》
Mantra of the Light
①1993年（平成5年）
②女声合唱, orch
③約30分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Fon－32CM319
⑥1993.6.23 東京　東京芸術劇場／東京混声合唱団，秋山和慶＝東京交響楽団
⑦第19回民音現代作曲音楽祭委嘱

西村朗（1953−）
Akira Nishimura
■《鳥のヘテロフォニー》
Birds Heterophony
①1993年（平成5年）
②orch
③約19分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤G－POCG-1719
⑥1993.9.19 名古屋　愛知県芸術劇場コンサートホール／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦オーケストラ・アンサンブル金沢委嘱

野平一郎（1953−）
Ichiro Nodaira
■《挑戦への9の逸脱》
Neuf ecarts vers defi
①1993年（平成5年）
②p-midi, electro
③約40分
④Editions Henry Lemoine（アンリ・ルモワンヌ社）
⑤レオナルド（抜粋）
⑥1993.10.15 パリ　イルカム・エスパース・ドゥ・プロジェクション／ピエール・ロラン・エマール（p），イルカム（技術）
日本初演：1997.4.27 京都　京都アルティ／木村かをり（p）

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■《ヴァーティカル・タイム・スタディⅠ》
Vertical Time Study I
①1992年（平成4年）
②cl, vc, p
③約9分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤col legno WWE 1CD20016
⑥1993.3.24 秋吉台　秋吉台国際現代音楽セミナー＆フェスティバル／アルマンド・アングスター（cl），ミカエル・バッハ（vc），ベルンハルト・ヴァンバッハ（p）
⑦秋吉台国際現代音楽セミナー＆フェスティバル委嘱

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■《ランドスケープⅢ》
Landscape III
①1993年（平成5年）
②vn, orch
③16.5分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Fon－FOCD3420
⑥1993.5.4 東京　サントリーホールH響「MUSIC TOMORROW '93」／アーヴィン・アルディッティ（vn），外山雄三＝NHK交響楽団
⑦NHK交響楽団委嘱

本間雅夫（1930−）
Masao Homma
■管弦楽のための《ポリ・オスティナートⅥ》
Poly-Ostinato VI
①1992年（平成4年）
②orch
③約12分
⑥1993.2.26 弘前　弘前文化会館大ホール「東北の作曲家'93 in 弘前」／安達弘潮＝弘前大学フィルハーモニー管弦楽団

松下功（1951−）
Isao Matsushita
■《時の糸Ⅲ》
Toki no Ito III (Threads of Time)
①1993年（平成5年）
②orch
③約17分
⑤Fon－FOCD2518
⑥1993.8.5 東京　NHK-FM放送／山下一史＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦NHK委嘱

松村禎三（1929−）
Teizo Matsumura
■オペラ《沈黙》
Opera "Silence"
①1993年（平成5年）
②S, A, T, Br, Bs, 混声合唱, 児童合唱, orch
③約130分
⑤Cam－30CM497〜8
⑥1993.11.4 東京　日生劇場／釜洞祐子（S），田代誠（T），直野資（Br），大島幾雄（Br），二期会合唱団，東京混声合唱団，ひばり児童合唱団，若杉弘＝新星日本交響楽団　他
⑦サントリー音楽財団委嘱／日生劇場開場30周年記念公演

間宮芳生（1929−）
Michio Mamiya
■合唱のためのコンポジション第13番《白い貝の女》
Composition for Chorus No.13
"White Shell Woman"
①1993年（平成5年）
②perc, 混声合唱
③約25分
⑥1993.3.17 東京　カザルスホール／加藤恭子（perc），樋本英一＝東京混

声合唱団
⑦東京混声合唱団委嘱

三木稔（1930−）
Minoru Miki
■オペラ《静と義経》
Shizuka and Yoshitsune – A Grand Opera in Three Acts
①1993年（平成5年）
②3S, 5T, 4Br, Ms, A, 2Bs, 混声合唱, orch, 二十絃箏, 鼓
③約135分
⑥1993.11.4 鎌倉　鎌倉芸術館大ホール／錦織健（T），宇佐美瑠璃（S），栗林義信（Br）他，飯森範親＝東京交響楽団
⑦鎌倉芸術館開館記念

村雲あや子（1949−）
Ayako Murakumo
■《黎明の時》
Reimei no Toki
①1993年（平成5年）
②orch
③約15分
⑥1993.3.9 東京　東京芸術劇場「現代の音楽展」／小鍛冶邦隆＝東京交響楽団
⑦日本交響楽振興財団第16回作曲賞入選

平成6年 1994

池辺晋一郎（1943−）
Shin-ichiro Ikebe
■《ストラータⅣ》
Strata Ⅳ
①1994年（平成6年）
②ob, cb
③約10分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤Cam－30CM463
⑥1994.5.13 東京　セシオン杉並　溝入敬三コントラバス・コンサート「危険な夜」／溝入由美子（ob），溝入敬三（cb）

伊左治直（1968−）
Sunao Isaji
■《畸形の天女／七夕（しちせき）》
The heavenly maiden in deformation/weaver star
①1994年（平成6年）
②fl, orch
③約22分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1994.10.5 東京　東京芸術劇場／木ノ脇道元（fl），十束尚宏＝東京シティ・フィルハーモニック
⑦第63回日本音楽コンクール作曲部門第1位、第5回芥川作曲賞

一柳慧（1933−）
Toshi Ichiyanagi
■《私の歌》（詞：谷川俊太郎）
My Song (text by Shuntaro Tanikawa)
①1994年（平成6年）
②Ms, mar
③約6分
⑥1994.9.14 東京　サントリーホール／大橋ゆり（Ms），荒かをり（Ms），方波見智子（mar）
⑦「新しいうたを創る会」委嘱

伊東乾（1965−）
Ken Ito
■《フェスティーナ・レンテ》
Festina Lente
①1994年（平成6年）
②fl, slide-tp, live-electro
オーケストラ版：fl, slide-trp, (orch), live-electro
③約14分
オーケストラ版：約25分
⑥1994.5.15 東京　TOKYO FMホール東京オーケストラル・スクエア・プロブレマティク2「遙か回想のポストモダンへⅠ」／木ノ脇道元（fl），曽我部清典（tp）他
オーケストラ版：1994.9.16 東京　オーチャードホール「東京フィルハーモニー交響楽団第359回定期演奏会」／木ノ脇道元（fl），曽我部清典（tp），大野和士＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦東京フィルハーモニー交響楽団委嘱（オーケストラ版）

大前哲（1943−）
Satoshi Ohmae
■《シームズ：ダブル・トーク No.24》
Seams: Double-talk No.24
①1994年（平成6年）
②2 cl
③約10分
⑥1994.10.15 四日市　四日市第一楽器・ムーシケ／浜中浩一（cl），二宮和子（cl）
⑦浜中浩一，二宮和子委嘱

北爪道夫（1948−）
Michio Kitazume
■《悠遠》―鳥によせて―
Yu-en
①1994年（平成6年）
②3 J-Singer, 琵琶, 箏, 十七絃箏, 尺八, perc
③約31分
⑥1994.6.29 東京　国立劇場「第12回現代日本音楽の展開」／日吉小間蔵（唄），野口悦治（唄），田中之雄（唄，琵琶），福永千恵子（箏），石垣清美（十七絃箏），三橋貴風（尺八），菅原淳（perc）
⑦国立劇場委嘱

佐藤眞（1938−）
Shin Sato
■オペラ《犀》
Opera "Rhinoceros"

①1994年（平成6年）
②11 Singer, 混声合唱, orch, tape
③約105分
⑥1994.10.6 広島　アステールプラザ大ホール／田中良和＝広島交響楽団他
⑦「ひろしまオペラ・ルネッサンス」

高橋悠治（1938−）
Yuji Takahashi
■《狐》〜七段構成による音楽行法
KITSUNE
①1994年（平成6年）
②三絃，笙，竜笛，篳篥，打物，所作，computer
③約45分
⑥1994.7.2 東京　草月ホール／高田和子　他

田中カレン（1961−）
Karen Tanaka
■《Wave Mechanics》20人の奏者のための
①1994年（平成6年）
②20 instrument
③約9分
④Chester Music
⑤G－POCG-1860
⑥1994.8.23 金沢　金沢市観光会館／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦岩城宏之委嘱

團伊玖磨（1924−）
Ikuma Dan
■オペラ《素戔嗚》
Opera "Susano-o"
①1994年（平成6年）
②Singer, orch
③約4時間
⑥1994.10.30 横浜　神奈川県民ホール／佐藤しのぶ（S）他，團伊玖磨＝神奈川フィルハーモニー管弦楽団

野平一郎（1953−）
Ichiro Nodaira
■《夜のモノローグ》
Monologue de la nuit
①1993〜1994年／99年（平成5〜6年／11年）
②fl, 混声合唱
③約15分
⑥1994.1.20 東京　カザルスホール／西沢幸彦（fl），田中信昭＝東京混声合唱団
⑦東京混声合唱団委嘱

福士則夫（1945−）
Norio Fukushi
■《大原御幸》
Ohara Goko
①1994年（平成6年）
②2 十三絃箏, 十七絃箏, 尺八, perc, 混声合唱, 語り
③約30分
⑥1994.5.19 東京　芝ABC会館ホール「谷珠美邦楽研究グループ第14回演奏会」／谷珠美邦楽研究グループ
⑦谷珠美邦楽研究グループ委嘱

藤家渓子（1963−）
Keiko Fujiie
■《思いだす　ひとびとのしぐさを》
Beber
①1994年（平成6年）
②室内orch
③約10分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤G－POCG-1860
⑥1994.8.23 金沢　金沢市観光会館／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦岩城宏之委嘱／第43回尾高賞

まえだしゅいち（1952−）
Shuichi Maeda
■オペラ《おなつ　せいじゅうろう》
Opera "Onatsu-Seijuurou"
①1991年〜1993年（平成3〜5年）
②20 Singer, 混声合唱, orch, 2hp
③約180分
⑥1994.4.9 姫路　姫路市文化センター／北村敏則（T），芦原昌子（S）他，小松雄聖＝大阪センチュリー交響楽団
⑦姫路市委嘱（姫路城世界文化遺産指定記念イベント）

三木稔（1930−）
Minoru Miki
■フォーク・オペラ《照手と小栗》
Terute and Oguri – A Folk Opera in Two Parts
①1993年（平成5年）
②3 S, 5 Bs-Br, Bs, T, Br, many Singers, Actors, Dancers, vn, vc, 二十絃箏, 尺八, 2 perc, 6 brass
③約133分
⑥1994.2.8 名古屋　名古屋市芸術創造センター／大槻博子（S），友森美文（Br）他，山田信芳＝楽団「創」
⑦名古屋市文化振興事業団委嘱（設立10周年記念）

南聡（1955−）
Satoshi Minami
■《からくり草紙》
Karakuri Zoshi
①1993年（平成5年）
②混声合唱
③約10分
⑥1994.3.23 東京　カザルスホール／東京混声合唱団
⑦東京混声合唱団委嘱

三輪眞弘（1958−）
Masahiro Miwa
■箏とコンピュータのための《曙継承》
Akebono-inheritance
①1994年（平成6年）
②十三絃箏, computer
③free
⑤META-MUSIK Syoten-004
⑥1994.10.25 東京　TOKYO FMホール／高田香里（十三絃箏）
⑦高田香里委嘱

湯浅譲二（1929−）
Joji Yuasa
■《ピアノ・コンチェルティーノ》
Piano Concertino
①1994年（平成6年）
②p, orch
③約15分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤G－POCG1860
⑥1994.9.24 名古屋　愛知県芸術劇場／

木村かをり（p），岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦オーケストラ・アンサンブル金沢委嘱

吉松隆（1953−）
Takashi Yoshimatsu
■《サイバーバード協奏曲》
Cyber Bird Concerto
①1994年（平成6年）
②sax, orch
③約22分
⑤To − TOCE-9152
⑥1994.5.27 東京　北とぴあさくらホール「サクソフォーンルネッサンス須川展也の世界」／須川展也（sax），増井信貴＝新日本フィルハーモニー交響楽団
⑦須川展也委嘱

平成7年 1995

池辺晋一郎（1943−）
Shin-ichiro Ikebe
■《照葉樹林》
The Glossy-leaved Forest
①1995年（平成7年）
②弦楽Ens
③約9分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1995.4.2 東京　紀尾井ホール／尾高忠明＝紀尾井シンフォニエッタ東京
⑦新日鐵文化財団委嘱

金子仁美（1965−）
Hitomi Kaneko
■《フルート協奏曲》
Flute Concerto
①1995年（平成7年）
②fl, orch
③約14分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤G − POCG-1947
⑥1995.9.18 金沢　金沢市観光会館／木ノ脇道元（fl），岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦岩城宏之委嘱

川島素晴（1972−）
Motoharu Kawashima
■《ポリプロソポスⅢ》
Polyprosopos III
①1995年（平成7年）
②vn, zephyros, 篳篥, Singer, timp
③約11分
⑥1995.12.21 東京　北とぴあつつじホール「現在形の音楽'95 第2夜」／佐藤まどか(vn)，曽我部清典(zephyros)，中村仁美（篳篥），川島素晴（vo），神田佳子（timp）

権代敦彦（1965−）
Aytsuhiko Gondai
■《フーガ／ストレッタ》
Fuga/Stretta
①1993年（平成5年）
②p
③約30分
⑥1995.1.21 東京　サントリーホール／中嶋香（p）
⑦中嶋香委嘱

権代敦彦（1965−）
Aytsuhiko Gondai
■《怒りの日／嘆きの日》
Dies Irae/Lacrimosa
①1995年（平成7年）
②orch
③約18分
④日本作曲家協議会／The Japan Federation of Composers
⑥1995.12.26 京都　京都コンサートホール／大友直人＝京都市交響楽団
⑦京都市委嘱／第6回芥川作曲賞

下山一二三（1930−）
Hifumi Shimoyama
■弦楽オーケストラのための《だぶりっじ》
Doubridge for Strings
①1995年（平成7年）
②20vn, 9va, 6vc, 4cb
③約13分
⑤ALM − LMCD1586
⑥1995.6.28 東京　東京芸術劇場大ホール／秋山和慶＝東京交響楽団

高橋悠治（1938−）
Yuji Takahashi
■《音楽のおしえ》
Ongaku no Oshie
①1995年（平成7年）
②2聲明, 唄, 三絃, 太棹, 箏, 2篳篥, 2笛, 2笙, 打物, va, 2tb, 2hrn, 3perc, computer
③約72分
⑥1995.11.26 東京　サントリーホール「作曲家の個展'95 高橋悠治」／芝祐靖，宮田まゆみ，山口恭範，数住岸子，高田和子　他
⑦サントリー音楽財団委嘱

寺嶋陸也（1964−）
Rikuya Terashima
■《尺八・二十絃箏と管弦楽のための協奏曲》
Concerto for Shakuhachi, 20 string-koto and Orchestra
①1995年（平成7年）

②尺八, 二十絃箏, orch
③約28分
⑥1995.5.19 横浜　神奈川県立音楽堂／三橋貴風（尺八），吉村七重（二十絃箏），外山雄三＝神奈川フィルハーモニー管弦楽団
⑦神奈川フィルハーモニー管弦楽団委嘱（創立25周年）

中村典子（1965－）
Noriko Nakamura
■《マナ》コロラトゥーラ・ソプラノのための
Mana
①1995年（平成7年）
②S
③約9分
⑥1995.11.19 京都　京都コンサートホール「'95京都若い作曲家による連続作品展 XⅧ」／日紫喜恵美（S）

新実徳英（1947－）
Tokuhide Niimi
■《魂の舟》―葬送の音楽
Boat of Spirit
①1995年（平成7年）
②混声合唱, p
③約37分
④音楽之友社／Ongaku no Tomo Sha
⑥1995.6.4 東京　昭和女子大人見記念講堂／栗山文昭＝OMP合唱団，浅井道子（p）
⑦OMP合唱団委嘱

野平一郎（1953－）
Ichiro Nodaira
■《室内協奏曲第1番》
Concerto de chambre
①1995年（平成7年）
②orch
③約11分
④Henry Lemoine（アンリ・ルモワンヌ社）
⑤G－POCG-1947
⑥1995.9.18 金沢　金沢市観光会館／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦岩城宏之委嘱／第44回尾高賞

林光（1931－）
Hikaru Hayashi
■ヴィオラ協奏曲《悲歌》
Viola Concerto "Elegia"
①1995年（平成7年）
②va, 室内弦楽orch
③約35分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1995.6.24 水戸　水戸芸術館／今井信子（va），水戸室内管弦楽団

原田敬子（1968－）
Keiko Harada
■《After The Summer...》
①1995年（平成7年）
②fl, vn, vc, g, p, perc, tape, click track＋conductor
③約13分
⑥1995.9.3 コペンハーゲン　ルイジアナ美術館／西沢幸彦(fl), 石井光子(vn), 松岡陽平（vc），佐藤紀雄（g），原田敬子（p，指揮），加藤恭子（perc）
日本初演：1997.2.26 東京　紀尾井ホール／西沢幸彦（fl），石井光子（vn），松岡陽平（vc），佐藤紀雄（g），原田敬子（p，指揮），加藤恭子（perc）
⑦muisana'95「今日の日本」委嘱

肥後一郎（1940－）
Ichiro Higo
■《巫女譜》
Konagi no Uta
①1995年（平成7年）
②箏
③約20分
⑤C－COCJ30352
⑥1995.11.16 東京　abc会館ホール／友渕のりえ（箏）
⑦友渕のりえ委嘱

平石博一（1948－）
Hirokazu Hiraishi
■《ドリームスケイプ》
Dreamscape
①1995年（平成7年）
②orch
③約22分
⑥1995.6.28 東京　東京芸術劇場「オーケストラ・プロジェクト'95」／秋山和慶＝東京交響楽団

細川俊夫（1955－）
Toshio Hosokawa
■《バビロンの流れのほとりにて》
Super Flumina Babylinis
①1995年（平成7年）
②S, A, 室内orch,（任意に）弦楽orch
③約16分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Fon－FOCD3420
⑥1995.6.24 エッセン／Monika Meier-Schmid, Susanne Otto, アンサンブル・モデルン，Eberhard Kloke＝ポーランド国立放送管弦楽団
日本初演：1997.1.20 東京　東京文化会館「都響日本の作曲家シリーズ」／ジュリー・モファ（S），永井和子（A），高関健＝東京都交響楽団
⑦ISCM世界音楽の日々1995委嘱

松平頼則（1907－）
Yoritsune Matsudaira
■モノオペラ《源氏物語》
Opera "Genji Monogatari"
①1990～93年（平成2～5年）
②S, fl(picc), A-fl, ob, cl, fg, hrn, tp, tb, 4perc, p, prepared-p, cel, hp, 箏, 笙
③約120分
⑥1995.4.18 武生　武生市文化センター／奈良ゆみ（S），小泉浩（fl），宮田まゆみ（笙）他，伊東乾＝東京オーケストラル・スクエア
⑦紫式部越前国府来遊千年プレイベント

三木稔（1930－）
Minoru Miki
■オペラ《隅田川》
The River Sumida – An Opera in One Act
①1995年（平成7年）
②S, T, Bs, 6-8 Singer, vn, vc, cl 持ち替え B-cl, 二十絃箏, perc
③約58分
⑥1995.11.7　銕仙会能楽研究所／結アンサンブル　他
⑦日本芸能実演家団体協議会委嘱（創立30周年記念）
《くさびら》とあわせて組オペラ Twin Opera と称する。

三木稔（1930−）
Minoru Miki
■オペラ《くさびら》
Kusabira – An Opera in One Act
①1995年（平成7年）
②T, Br, 6-8 Singer, vn, vc, B-cl, 二十絃箏, perc
③約28分
⑥1995.11.7　銕仙会能楽研究所／結アンサンブル　他
⑦日本芸能実演家団体協議会委嘱（創立30周年記念）
《隅田川》とあわせて組オペラ Twin Opera と称する。

山本純ノ介（1958−）
Junnosuke Yamamoto
■《紅焔》中国琵琶とオーケストラのための
Prominence (Koh En)
①1995年（平成7年）
②pipa, orch
③約15分
⑥1995.9.11 大阪　ザ・シンフォニーホール／楊宝元（pipa），石井真木＝関西フィルハーモニー管弦楽団

湯浅譲二（1929−）
Joji Yuasa
■交響組曲《奥の細道》
Symphonic Suite "The Narrow Road into the Deep North; Basho"
①1995年（平成7年）
②orch
③約21分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Fon − FPCD-2015
⑥1995.4.8 郡山　郡山市民文化センター／本名徹二＝読売日本交響楽団
⑦福島中央テレビ委嘱（開局25周年記念）

吉岡孝悦（1955−）
Takayoshi Yoshioka
■《マリンバ協奏曲第1番》
Marimba Concerto No.1
①1995年（平成7年）
②mar, orch
③約23分
⑥1995.10.7 東京　東京芸術劇場／吉岡孝悦（mar），大友直人＝日本フィルハーモニー交響楽団

平成8年 1996

池辺晋一郎（1943−）
Shin-ichiro Ikebe
■《木に同じく》―チェロ協奏曲
Almost a Tree – Concerto for Violoncello
①1996年（平成8年）
②vc, orch
③約20分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1996.2.6 大阪　ザ・シンフォニーホール／向山佳絵子（vc），山下一史＝大阪センチュリー交響楽団
⑦大阪センチュリー交響楽団委嘱

和泉耕二（1947−）
Koji Izumi
■尺八と弦楽四重奏のための《異系の譜》
The Music of the Different Origin
①1996年（平成8年）
②尺八, SQ
③約12分
⑤ALM − LMCD1507
⑥1996.4.23 東京　バリオホール／福田輝久（尺八），高橋比佐子（vn1），鈴木まどか（vn2），中村智香子（va），山内理映（vc）
⑦福田輝久委嘱

江村哲二（1960−）
Tetsuji Emura
■《プリマヴェーラ（春）》
Primavera
①1996年（平成8年）
②S, orch
③約31分
⑥1996.8.29 東京　サントリーホール／豊田喜代美（S），小松一彦＝新日本フィルハーモニー交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

金田潮兒（1948−）
Choji Kaneta
■《色即是空・Ⅱ》―尺八とオーケストラの為の
Shikisokuzekuu II
①1996年（平成8年）

②尺八, orch
③約20分
⑥1996.9.18 東京　東京芸術劇場／福田輝久（尺八），小鍛冶邦隆＝東京交響楽団

川島素晴（1972－）
Motoharu Kawashima
■《cond.act/konTakt/conteraste I》
①1996年（平成8年）
②perc, cond.actor（＝演技を伴う指揮者），助演者
③約8分
⑥1996.6.27 東京　北とぴあつつじホール「神田佳子 PERCUSSION RECITAL SOLO 1」／神田佳子（perc），川島素晴（cond.actor），稲垣美穂（助演）
⑦神田佳子委嘱

川島素晴（1972－）
Motoharu Kawashima
■《デュアル・パーソナリティーI》
Dual Personality I
①1996年（平成8年）
②perc, orch
③約12分
④日本作曲家協議会／The Japan Federation of Composers
⑤Fon－FOCD2548
⑥1996.10.22 東京　東京芸術劇場／神田佳子（perc），山下一史＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦第65回日本音楽コンクール作曲部門第2位，第7回芥川作曲賞

小鍛冶邦隆（1955－）
Kunitaka Kokaji
■《デプロラシオンII》
Déploration II
①1996年（平成8年）
②orch
③約7分
⑥1996.9.18 東京　東京芸術劇場「オーケストラ・プロジェクト'96」／小鍛冶邦隆＝東京交響楽団

柴田南雄（1916－1996）
Minao Shibata
■《人間について》（三部作）
Ningen ni tuite
①1948－1995年（昭和23年～平成7年）
歌垣 1983年，生の種々相 1948年～1995年，人間と死 1985年
②混声合唱, 男声合唱, 女声合唱, 児童合唱, T, B, 石笛, 尺八
③約90分
⑤大阪コレギウム・ムジクム OCM1011（1部，3部のみ）
⑥1996.10.23 東京　サントリーホール「作曲家の個展'96 柴田南雄」／東京混声合唱団　他

高橋悠治（1938－）
Yuji Takahashi
■《インソムニア（眠れない夜）》
Insomnia
①1996年（平成8年）
②vn, 声, 箜篌
③約15分
⑤Ph－PHCP1812
⑥1996.5.23 東京　紀尾井ホール／ギドン・クレーメル（vn, 声），吉野直子（箜篌）

新実徳英（1947－）
Tokuhide Niimi
■《宇宙樹》―魂の路
The Cosmic Tree
①1996年（平成8年）
②二十絃箏, orch
③約25分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤WWCC-7284
⑥1996.7.25 名古屋　愛知県芸術劇場／野坂恵子（二十絃箏），飯守泰次郎＝名古屋フィルハーモニー交響楽団
⑦名古屋フィルハーモニー交響楽団委嘱

野平一郎（1953－）
Ichiro Nodaira
■《内なる旅》
Voyage intérieur
①1995～96年（平成7～8年）
②2竜笛, 2篳篥, 2笙, 箏, 琵琶
③約30分
⑥1996.4.9 東京　国立劇場小劇場／伶楽舎
⑦国立劇場委嘱

野平一郎（1953－）
Ichiro Nodaira
■《時の三重奏曲》
Trio du temps
①1996年（平成8年）
②cl, vn, p
③約9分
⑥1996.12 東京　かつしかシンフォニーヒルズ・アイリスホール／谷口玄徳（cl），野口千代光（vn），伊藤野笛（p）
⑦グループ現在形の音楽委嘱

林光（1931－）
Hikaru Hayashi
■オペラ《セールスマンKの憂鬱》（のちに《変身》と改題）
Opera "Salesman K's Melancholy"
①1996年（平成8年）
②12 Singer, p, vn, cl, fg
③約150分
⑤ALM－ALCD-7051～2
⑥1996.5.12 東京　下北沢本多劇場／オペラシアターこんにゃく座

藤家渓子（1963－）
Keiko Fujiie
■《クラリネット協奏曲》
Clarinet Concerto
①1986年（昭和61年）
1993年（平成5年）改訂
②cl, orch
③約25分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1996.2.28 東京　オーチャードホール／板倉康明（cl），大野和士＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦1986年日本音楽コンクール第1位（第1楽章）

藤家渓子（1963－）
Keiko Fujiie
■モノローグオペラ《蠟の女》
Niña De Cera
①1995年（平成7年）
②Ms, g, p, SQ
③約67分
⑥1996.4.28 京都　京都コンサートホール／ヤコブソン（Ms），山下和仁（g），豊嶋泰嗣（vn），百武由紀（va），苅

田雄治（vc），上村昇（vc），和田朋樹指揮
⑦22世紀クラブ委嘱

藤枝守（1955−）
Mamoru Fujieda
■《植物文様》第1集〜第5集
Patterns of Plants: Collection no.1-no.5
①1995〜96年（平成7〜8年）
②（第1集）笙, 2箏, org, g, hp
（第2集）2gamba, 2箏
（第3集）3箏
（第4集）瑟, 箏
（第5集）cemb, or, p
③（第1集）約16分，（第2集）約13分，（第3集）約15分，（第4集）約8分，（第5集）約9分
④（第5集）音楽之友社／Ongaku no tomo Sha
⑤（第1集〜第5集）TZADIK−TZ7025，（第4集）ALM−ALCD52，（第5集）音楽之友社 OCD0040
⑥（第1集）1995.9.18 東京　カザルスホール／石川高，ジャスト・ストリングス
（第2集）1996.9.28 東京　世田谷美術館／西陽子，丸田美紀，小沢絵里子，野口真紀
（第3集）1996.9.28 東京　世田谷美術館／西陽子，丸田美紀，中川佳代子
（第4集）1996.9.28 東京　世田谷美術館／西陽子，丸田美紀
（第5集）1996.9.28 東京　世田谷美術館／ローラン・テシュネ
⑦（第1集）インターリンク・フェスティバル委嘱
（第4集，第5集）世田谷美術館委嘱

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■《うつろひ・なぎ》
Utsurohi-Nagi
①1996年（平成8年）
②笙, 弦楽orch, hp, cel, perc
③約17分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Fon−FOCD3441
⑥1996.3.15 ケルン／宮田まゆみ（笙），小松長生＝ケルン放送交響楽団
日本初演：1997.10.6 東京　サントリーホール／宮田まゆみ（笙），十束尚宏＝東京都交響楽団
⑦西ドイツ放送（WDR）委嘱

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■《遠景Ⅱ》
Ferne-Landschaft
①1996年（平成8年）
②orch
③約17分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤ALM−ALCD8001, Fon−FOCD3441
⑥1996.3.20 高崎　群馬音楽センター／高関健＝群馬交響楽団
⑦群馬交響楽団委嘱（創立50周年記念）

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■《夜の響き》
Nacht Klänge
①1994/96年（平成6年／8年）
②p
③約9分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Fon−FOCD3406
⑥1996.4.13 与野　彩の国さいたま芸術劇場／野平一郎（p）
⑦彩の国さいたま芸術劇場委嘱

三善晃（1933−）
Akira Miyoshi
■チェロ協奏曲《谺つり星》
Concerto No.2 «Étoile à Échos» pour Violoncelle et Orchestre
①1996年（平成8年）
②vc, orch
③約12分
⑥1996.10.28 東京　サントリーホール／堤剛（vc），若杉弘＝NHK交響楽団
⑦サントリーホール委嘱（サントリーホール10周年記念）

湯浅譲二（1929−）
Joji Yuasa
■《ヴァイオリン協奏曲　イン・メモリー・オブ・武満徹》
Violin Concert in Memory of Toru Takemitsu
①1996年（平成8年）
②vn, orch
③約21分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤S−SRCR1777
⑥1996.10.28 東京　サントリーホール／堀米ゆず子（vn），若杉弘＝NHK交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱（サントリーホール10周年記念）

平成9年 1997

池辺晋一郎（1943－）
Shin-ichiro Ikebe
■《バイヴァランスⅠ》
Bivalence I
①1997年（平成9年）
②2vc
③約10分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1997.12.5 東京　津田ホール／苅田雄治（vc），菊地知也（vc）

江村哲二（1960－）
Tetsuji Emura
■《ハープ協奏曲》
Harp Concerto
①1997年（平成9年）
②hp, orch
③約22分
⑥1997.12.4 名古屋　しらかわホール／木村茉莉（hp），飯守泰次郎＝名古屋フィルハーモニー交響楽団
⑦しらかわホール委嘱

小栗克裕（1962－）
Katsuhiro Oguri
■管弦楽のための《ディストラクション》
"Destruction" for Orchestra
①1996年（平成8年）
②orch
③約17分
⑥1997.7.11 東京　なかのZEROホール／渡邉一正＝東京フィルハーモニー交響楽団
⑦第19回日本交響楽振興財団作曲賞，日本財団賞

尾崎敏之（1946－）
Toshiyuki Ozaki
■《黎明Ⅱ》
Dämmerung II
①1997年（平成9年）
②SQ, 尺八
③約15分
⑥1997.6.10 東京　紀尾井ホール／すばる弦楽四重奏団（寺岡有希子，山本友重，馬渕昌子，丸山泰雄），福田輝久（尺八）

権代敦彦（1965－）
Aytsuhiko Gondai
■《聖なる愛／平和の口づけ（第8幻視）》
Divine Love/The Kiss of Peace
①1997年（平成9年）
②S, perc, tape
③約27分
⑥1997.3.6 東京　東京文化会館／愛甲雅美（S），吉原すみれ（perc）

近藤譲（1947－）
Jo Kondo
■《ディシラム》
Dithyramb
①1996年（平成8年）
②fl, g
③約9分
④University of York Music Press, UK
⑤ALM－ALCD47
⑥1997.1.21 東京　カザルスホール／西沢幸彦（fl），佐藤紀雄（g）
⑦西沢幸彦委嘱

三枝成彰（1942－）
Shigeaki Saegusa
■オペラ《忠臣蔵》
Opera "Chushingura"
①1997年（平成9年）
②orch, 12 Singer, 混声合唱, 三絃, 3 timp, perc-Ens
③約190分
⑤S－SRCR 1969～71
⑥1997.5.16 東京　東京文化会館／佐藤しのぶ（S），直野資（Br）他，二期会合唱団，東京オペラ・シンガーズ，大友直人＝東京交響楽団

猿谷紀郎（1960－）
Toshiro Saruya
■《豊宇多楽》
Toyonoutaakari
①1997年（平成9年）
②J-ins-Ens
③約22分
⑥1997.4.18 東京　国立劇場邦楽公演日本音楽の表現「弾く」／吉村七重（二十絃箏），西潟昭子（三絃），宮田まゆみ（笙），山口恭範（perc），田中之雄（琵琶）
⑦国立劇場委嘱

角篤紀（1948－）
Atsuki Sumi
■《地の魚》
Fish on Horizon
①1997年（平成9年）
②尺八, 三絃
③約15分
④JFC-9714
⑤ALM－ALCD9014
⑥1997.6.17 東京　バリオホール／福田輝久（尺八），杵屋子邦（三絃）
⑦福田輝久委嘱

新実徳英（1947－）
Tokuhide Niimi
■《風神・雷神》
Fujin・Raijin
①1997年（平成9年）
②和太鼓, org, orch
③約20分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1997.10.22 東京　すみだトリフォニーホール／林英哲（和太鼓），鈴木隆太（org），高関健＝新日フィルハーモニー交響楽団
⑦㈱1002委嘱

西村朗（1953－）
Akira Nishimura
■《ラメント》
Lamento
①1997年（平成9年）
②A-sax, p
③約13分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑤To－TOCE9695
⑥1997.7.13 東京　紀尾井ホール／須川展也（sax），小柳美奈子（p）
⑦須川展也委嘱

野田暉行（1940－）
Teruyuki Noda
■創作能《高山右近》
Takayama Ukon
①1997年（平成9年）
②シテ, ツレ, トモ, アイ, 地謡, 能管, 大

鼓, 小鼓, 太鼓, fl, hp, tub-bells, 編鐘, 女声合唱
③約1時間40分
⑥1997.11.14 東京　国立能楽堂／梅若猶彦（シテ），中森貫太（ツレ），小笠原匡（トモ），野村史高（アイ），泉嘉夫（地頭），山本正人（地唄），梅若善久（地唄），佐々嶋長治（地唄），菰田均（地唄），岡田晃一（後見），藤田次郎（笛），久田舜一郎（小鼓），柿原弘和（大鼓），吉谷潔（太鼓），大平記子（fl），井上栄利加（hp），竹内将也（tub-bells），石崎陽子（編鐘），渡辺有里香，杉村実亜子，三宮美保，城守香（女声合唱），野田暉行総指揮

萩京子（1956−）
Kyoko Hagi
■オペラ《ガリバー》
Opera "Gulliver"
①1997年（平成9年）
②9 Singer, p
③約110分
⑥1997.9.6 東京　シアタートラム／大坪夕美（p），オペラシアターこんにゃく座

原田敬子（1968−）
Keiko Harada
■《midstream》
①1997年（平成9年）
②accordion, cl
③約9分
⑥1997.8.28 秋吉台　秋吉台国際20世紀音楽セミナー＆フェスティバル／シュテファン・フッソング（accordion），山根孝司（cl）
⑦秋吉台国際20世紀音楽セミナー＆フェスティバル委嘱

藤家渓子（1963−）
Keiko Fujiie
■モノローグオペラ《赤い凪》
Akai Nagi
①1996年（平成8年）
②T, g, 尺八
③約50分
⑥1997.4.26 京都　京都アルティ／高野二郎（T），山下和仁（g），三橋貴風（尺八）
⑦22世紀クラブ委嘱

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■《チェロ協奏曲〜武満徹の追憶に〜》
Cello Concerto – In Memory of Toru Takemitsu
①1997年（平成9年）
②vc, orch
③約20分
④日本ショット社／Schott Japan
⑤Fon – FOCD3441
⑥1997.10.6 東京　サントリーホール「作曲家の個展'97 細川俊夫」／ユリウス・ベルガー（vc），十束尚宏＝東京都交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

間宮芳生（1929−）
Michio Mamiya
■《菅江本奥じゃうるり其の一「枡がまくらに」》
Sugaebon Oku-joruri I "Masu ga makura ni"
①1997年（平成9年）
②3歌・語り, 太棹, 琵琶, 尺八, 2笛, 2太鼓
③約100分
⑥1997.1.17 東京　国立劇場小劇場／山田茂，斎藤忠生，草間路代，田中悠美子，田中之雄，福田輝久，望月太八次郎，添川浩史，松倉利之，酒井聡
⑦国立劇場委嘱／参考：其の二「しほひかり」（1998年作曲），其の三「鬼ぶし」（1999年作曲）とあわせ三部作として完成。

黛敏郎（1929−1997）
Toshiro Mayuzumi
■《パッサカリア》（絶筆・未完）
"Passecaille" (Last Writing-Unfinished)
①1997年（平成9年）
②orch
③約4分
⑥1997.8.31 金沢　金沢市観光会館／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦オーケストラ・アンサンブル金沢委嘱

望月京（1969−）
Misato Mochizuki
■《オール・ザット・イズ・インクルーディング・ミー》
All That is Including Me
①1996年（平成8年）
②B-fl, cl, vn
③約11分
⑥1997.2.26 東京　紀尾井ホール「新しい音に遊ぶ現代音楽の夕べ」／木ノ脇道元（fl），菊地秀夫（cl），寺岡有希子（vn），佐藤紀雄指揮

望月京（1969−）
Misato Mochizuki
■《シ ブル，シ カルム》
Si bleu, Si calme
①1997年（平成9年）
②16ins
③約13分
⑥1997.8.27 秋吉台　秋吉台国際20世紀音楽セミナー＆フェスティバル／J. カリツケ＝クラングフォールム・ウィーン
⑦秋吉台国際20世紀音楽セミナー＆フェスティバル委嘱

平成10年 1998

池辺晋一郎（1943－）
Shin-ichiro Ikebe
■《バイヴァランスⅡ》
Bivalence II
①1997年（平成9年）
②2vn
③約10分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1998.1.17 ニュヨーク　マーキン・コンサートホール／佐藤暎子（vn），Tom Chiu（vn）
日本初演：1998.12.4 東京　津田ホール／松原勝也（vn），鈴木理恵子（vn）
⑦Music from Japan 委嘱

池辺晋一郎（1943－）
Shin-ichiro Ikebe
■《悲しみの森》
Les Bois Tristes
①1998年（平成10年）
②orch
③約10分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1998.9.4 金沢　金沢市観光会館／岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦オーケストラ・アンサンブル金沢委嘱／第47回尾高賞

石井眞木（1936－）
Maki Ishii
■バレエ音楽《梵鐘の聲》
"Bonsho no Koe" (Die Stimme der Tempelglocken) – From the Tales of the Heike
①1997年（平成9年）
②orch
③約120分
⑥1998.2.1 東京　新国立劇場／高関健＝東京交響楽団，新国立劇場バレエ団，台本・演出・振付＝石井潤
⑦新国立劇場委嘱（開場記念）

伊藤弘之（1963－）
Hiroyuki Itoh
■《シーシュポスの神話》
The Myth of Sisyphus
①1998年（平成10年）
②2p, orch
③約15分
⑤JFC9801
⑥1998.2.20 横浜　神奈川県立音楽堂／長尾洋史（p），山田武彦（p），山下一史＝神奈川フィルハーモニー管弦楽団
⑦横浜市文化振興財団委嘱／第8回芥川作曲賞

権代敦彦（1965－）
Aytsuhiko Gondai
■《アンティ・フォン》
ANTI-PHON
①1998年（平成10年）
②orch
③約10分
⑥1998.3.29 金沢　金沢市観光会館／トーマス・オケーリー（perc），岩城宏之＝オーケストラ・アンサンブル金沢
⑦岩城宏之委嘱

権代敦彦（1965－）
Aytsuhiko Gondai
■《処女点》
Point Vierge
①1998年（平成10年）
②C-T, 笙, org
③約21分
⑥1998.6.6 東京　東京オペラシティコンサートホール　鈴木雅明オルガン・リサイタル「現代日本のオルガン作品」／米良美一（C-T），宮田まゆみ（笙），鈴木雅明（org）
⑦東京オペラシティ文化財団委嘱

権代敦彦（1965－）
Aytsuhiko Gondai
■《ファーザー・フォーギブ＋イン・パラディスム》
FATHER FORGIVE – The Litany of Reconciliation – + IN PARADISUM
①1998年（平成10年）
②Narrator, orch
③約23分
⑤Fon – FOCD2543
⑥1998.8.29 東京　サントリーホール「第8回芥川作曲賞選考演奏会」／オーレン・タナベ（Narrator），小松一彦＝新日本フィルハーモニー交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

猿谷紀郎（1960－）
Toshiro Saruya
■《結晶からの誘掖》
Flair of the Seeds
①1998年（平成10年）
②室内orch
③約14分
⑤Fon – FOCD2549
⑥1998.10.18 ロンドン　クイーン・エリザベス・ホール／オリヴァー・ナッセン＝ロンドン・シンフォニエッタ
日本初演：2000.2.4 東京　NHKホール／イヴァン・フィッシャー＝NHK交響楽団
⑦ロンドン・シンフォニエッタ委嘱

高橋悠治（1938－）
Yuji Takahashi
■《大いなる死の物語》
Ooinaru shi no monogatari
①1998年（平成10年）
②聲明, ブズーキ, ケルティック・ハープ, プサルテリー
③約45分
⑥1998.9.14 東京　スパイラルガーデン／Ayuo，聲明四人の会（孤島由昌，新井弘順，海老原廣伸，京戸慈孝）
⑦聲明四人の会委嘱

林光（1931－）
Hikaru Hayashi
■オペラ《吾輩は猫である》
Opera "I am a Cat"
①1998年（平成10年）
②11 Singer, vn, p
③約140分
⑥1998.2.25 東京　新国立劇場／オペラシアターこんにゃく座，山田百子（vn），萩京子（p）
⑦新国立劇場開場記念

菱沼尚子（1970－）
Naoko Hishinuma
■《リフレックス》

Reflex
①1998年（平成10年）
②p, orch
③約7分
④日本作曲家協議会／The Japan Federation of Composers
⑥1998.10.13 東京　東京オペラシティコンサートホール「第67回日本音楽コンクール本選会」／長尾洋史（p），北原幸男＝新星日本交響楽団
⑦第9回芥川作曲賞，第67回日本音楽コンクール入賞

廣瀬量平（1930−）
Ryohei Hirose
■《雪舟讃Ⅰ》
Homage to "Sesshu" I
①1998年（平成10年）
②J-ins-Ens
③約10分
⑥1998.5.18 東京　津田ホール　日本音楽集団第151回定期演奏会「廣瀬量平からのメッセージ」／田村拓男＝日本音楽集団
⑦日本音楽集団委嘱

細川俊夫（1955−）
Toshio Hosokawa
■オペラ《リアの物語》
Vision of Lear
①1997〜98年（平成9〜10年）
②S, A, T, Br, Bs, 任意に児童または女声合唱, orch
③約100分
④日本ショット社／Schott Japan
⑥1998.4.19 ミュンヘン　Nicholas Isherwood, Annette Elster，森川栄子 他，鈴木忠志演出，Georges-Elie Octors 指揮，Ensemble München
日本初演：1999.6.12 静岡グランシップ／Marek Gasztecki（リア），Annette Elster（ゴネリル），Karen Leonie Leiber（リーガン），漆原朝子（vn），吉野直子（hp），Pierre-Yves Artaud（fl），Georges-Ellie Octors 指揮　他
⑦ミュンヘン市委嘱（ミュンヘン・ビエンナーレ1998）

松村禎三（1929−）
Teizo Matsumura
■《交響曲第2番》
Symphony No.2
①1998年（平成10年）
②orch, p
③約24分
⑥1998.10.29 東京　サントリーホール「作曲家の個展'98 松村禎三」／野島稔（p），尾高忠明＝東京都交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

三善晃（1933−）
Akira Miyoshi
■《焉歌・波摘み》
«Chanson terminal: Éffeuilage des Vagues» pour Orchestre
①1998年（平成10年）
②orch
③15分
⑥1998.6.12 東京　サントリーホール「MUSIC TOMORROW '98」／尾高忠明＝NHK交響楽団
⑦第47回尾高賞

平成11年 1999

伊東乾（1965−）
Ken Ito
■《ダイナモルフィア》
DINAMORPHIA
①1999年（平成11年）
②orch
③約15分
⑥1999.5.9 東京　東京オペラシティコンサートホール　武満徹作曲賞本選演奏会／渡邉一正＝東京交響楽団
⑦1999年武満徹作曲賞第2位

川島素晴（1972−）
Motoharu Kawashima
■ピアノ，プリペアドとオーケストラのための《マニック・ディプレッシブⅢ》
Manic-Depressive III (for piano, prepared-piano and orchestra)
①1999年（平成11年）
②p, prepared-p, orch
③約43分
⑤Fon－FOCD2548
⑥1999.8.29 東京　サントリーホール「第9回芥川作曲賞選考演奏会」／野平一郎（p），川島素晴（prepared-p），小松一彦＝新日本フィルハーモニー交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

久保禎（1962−）
Tadashi Kubo
■《春籟楽》
Shun-Rai-Gaku
①1999年（平成11年）
②perc, hp, p, 室内orch
③約25分
⑥1999.9.3 福岡　福岡市中央市民センター「第20回九州現代音楽祭」／井崎正浩＝九州現代音楽祭管弦楽団

鈴木和彦（1967−）
Kazuhiko Suzuki
■《木（匂い）》
Trees (scent)
①1999年（平成11年）
②fl (piccも), va (vnも), hp, tp, hrn, tb,

tub, p
③約15分
⑥1999.7.17 横浜　神奈川県立音楽堂「Just Composed '99 in Yokohama」／野平一郎（p），板倉康明＝東京シンフォニエッタ
⑦横浜市文化振興財団委嘱

新実徳英（1947−）
Tokuhide Niimi
■《太陽風》
Solar Wind
①1999年（平成11年）
②orch
③約14分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1999.10.6 東京　サントリーホール「作曲家の個展'99 新実徳英」／岩城宏之＝東京都交響楽団
⑦サントリー音楽財団委嘱

西村朗（1953−）
Akira Nishimura
■アルトサキソフォン協奏曲《エシ・イン・アニマ（内なる魂の存在）》
ESSE IN ANIMA
①1999年（平成11年）
②sax, orch
③約24分
④全音楽譜出版社／Zen-On
⑥1999.7.1 東京　東京オペラシティコンサートホール／須川展也（sax），ギルバート＝NHK交響楽団
⑦NHK交響楽団委嘱

二宮毅（1972−）
Tsuyoshi Ninomiya
■《涅槃西風》—27人の奏者のために
Westerly of Nirvana for 27 Players
①1999年（平成11年）
②室内orch
③約13分
⑥1999.9.3 福岡　福岡市中央市民センター「第20回九州現代音楽祭」／井崎正浩＝九州現代音楽祭管弦楽団

東大円（1966−）
Daien Higashi
■《テフラⅡ》—室内オーケストラのための
Tephra II for chamber orchestra
①1999年（平成11年）
②室内orch
③約12分
⑥1999.9.3 福岡　福岡市中央市民センター「第20回九州現代音楽祭」／井崎正浩＝九州現代音楽祭管弦楽団

三善晃（1933−）
Akira Miyoshi
■オペラ《支倉常長「遠い帆」》
Opera "Hasekura Tunenaga «Voile Lointaine»"
①1998年（平成10年）
②Singer, orch, 混声合唱, 児童合唱
③約60分
⑥1999.3.21 仙台　仙台市青年文化センター・シアターホール／勝部太，伊達英二他，外山雄三＝仙台フィルハーモニー管弦楽団，オペラ《支倉常長「遠い帆」》合唱団，仙台少年少女合唱団
⑦仙台市民文化事業団委嘱

柳田孝義（1948−）
Takayoshi Yanagida
■オーケストラのための《時の記憶》
Memory of Time for Orchestra
①1999年（平成11年）
②orch
③約19分
⑤Cam−28CM599
⑥1999.10.30 東京　東京芸術劇場／秋山和慶＝東京交響楽団
⑦オーケストラプロジェクト99作品／文化庁芸術祭優秀賞

湯浅譲二（1929−）
Joji Yuasa
■《声のためのプロジェクション》
〜音響発生装置としての
Voice as a sonic Apparatus
①1999年（平成11年）
②混声合唱
③約8分
⑥1999.3.24 東京　カザルスホール「湯浅譲二の世界」／田中信昭＝東京混声合唱団
⑦東京混声合唱団委嘱

湯浅譲二（1929−）
Joji Yuasa
■《クロノプラスティックⅡ》—エドガー・ヴァレーズ讃
Chronoplastic II
①1999年（平成11年）
②orch
③約15分
④日本ショット社／Schott Japan
⑥1999.11.9 東京　サントリーホール「国際作曲委嘱シリーズ」／岩城宏之＝東京交響楽団
⑦サントリーホール委嘱

サントリー音楽財団主催

演奏会記録
1974–1999

略号表

A	アルト
A-fl	アルト・フルート
A-sax	アルトサックス
acc	アコーディオン
b.vn	バロック・ヴァイオリン
b.va	バロック・ヴィオラ
b.vc	バロック・チェロ
B-cl	バス・クラリネット
b-sop	ボーイ・ソプラノ
Br	バリトン
Br-sax	バリトンサックス
Bs	バス
cb	コントラバス
cel	チェレスタ
cemb	チェンバロ
c.fg	コントラファゴット
cl	クラリネット
e.hrn	イングリッシュホルン
fg	ファゴット
fl	フルート
fl.trv	フラウト・トラヴェルソ
g	ギター
h-b	ハンド・ベル
harm	ハーモニュウム
hrn	ホルン
hp	ハープ
lute	リュート
mand	マンドリン
mar	マリンバ
Ms	メゾ・ソプラノ
n	語り、ナレーション
ob	オーボエ
obd'm	オーボエ・ダモーレ
ond.m	オンド・マルトノ
org	オルガン
p	ピアノ
p-p	プリペアド・ピアノ
perc	打楽器
rec	リコーダー
S	ソプラノ
S-sax	ソプラノサックス
T	テノール
T-sax	テナーサックス
timp	ティンパニ
tb	トロンボーン
tp	トランペット
tub	チューバ
va	ヴィオラ
vc	チェロ
vib	ヴィブラフォン
viol	ヴィオローネン
vn	ヴァイオリン

衣	衣装
演	演出
演助	演出助手
合指	合唱指揮
指	指揮
照	照明
装	装置
美	美術
舞監	舞台監督
副指	副指揮

N響	NHK交響楽団
大阪フィル	大阪フィルハーモニー交響楽団
九響	九州交響楽団
京響	京都市交響楽団
札響	札幌交響楽団
新日本フィル	新日本フィルハーモニー交響楽団
東京シティフィル	東京シティフィルハーモニー管弦楽団
東京都響	東京都交響楽団
東京フィル	東京フィルハーモニー交響楽団
東混	東京混声合唱団
名古屋フィル	名古屋フィルハーモニー交響楽団
日フィル	日本フィルハーモニー交響楽団

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1974	8. 6	**鳥井音楽賞5周年記念** **コンサート**　第1夜 パイプオルガンの夕べ （国際基督教大学教会堂） 企画構成：ICU国際基督教大学オルガン委員会 ＜第5回鳥井音楽賞受賞＞	第1部　パイプオルガン楽器デモンストレーション 第2部　パイプオルガン演奏会 1. リューベック：前奏曲 ホ短調 2. パーセル：トランペット・ソナタ ニ長調 3. 山内　忠：6つの詩（うた） 4. J. S. バッハ：前奏曲とフーガ ト短調 5. J. S. バッハ：モテット第3番 金澤正剛（解説）、田中信昭（指）、広野嗣雄（org）、祖堅方正（tp）　東混
	8. 7	同上 第2夜 室内オペラの夕べ （東京文化会館小ホール） 企画構成：三谷礼二 ＜第3回鳥井音楽賞受賞＞	1. ペルゴレージ：オペラ＜奥様女中＞ G. A. フェデリコ（台本）、畑中良輔（訳詞） 2. ハウゼンストック＝ラマティ：オペラ＜お芝居＞ S. ベケット（台本） 若杉弘（音楽監督・指）、三谷礼二（演）、平尾礼子（演助） 沢田祐二（照）、松本重孝／伊集院正則（舞監）、松本紀久男（副指） 小田清、中山早智恵、越智則英、藤本英雄、川上久雄、前沢均、杉村雅子、長野羊奈子、滝沢三重子、原田茂生、浅田啓子、奥谷優里子、北川潤、岡田知之、今村三明、丹代和典
	8. 8	同上 第3夜 バッハの夕べ （東京文化会館小ホール） 企画構成：小林道夫 ＜第1回鳥井音楽賞受賞＞	1. フランス組曲第6番 ホ長調 BWV.817 2. フルートとチェンバロのためのソナタ ロ短調 BWV.1030 3. カンタータよりアリアと二重唱 教会カンタータ第45番 BWV.45より第5曲アルトのアリア＜心底より神を認むる者をば＞ 世俗カンタータ第208番 BWV.208より第3曲レチタティーヴォ＜何と云わるる、いと美しき女神よ＞、第4曲アリア＜アモールの網をばもはやよろこび給わぬか＞ 世俗カンタータ第205番 BWV.205より二重唱＜枝枝は、なが宴に＞ 4. ソナタ ニ短調 BWV.964 戸嶋由美（A）、河瀬柳史（T）、雨田光弘（vc）、金昌国（fl）、小林道夫（cemb）
1975	7. 7	**鳥井音楽賞記念** 「堤剛・秋山和慶」 大阪公演 チェロ協奏曲の夕べ （大阪毎日ホール） 企画構成：堤剛 ＜第2回鳥井音楽賞受賞＞	1. デュカス：バレエ音楽＜ペリ＞より＜仙女ペリを先導するファンファーレ＞ 2. 矢代秋雄：チェロ協奏曲 3. ヘンツェ：チェロとオーケストラの為の＜西風へのオード＞ 4. 三善　晃：チェロ協奏曲 堤剛（vc）、若杉弘（指）　京響
	7.25	同上 東京公演第1夜 合唱と室内楽の夕べ （中央会館） 企画構成：秋山和慶 ＜第6回鳥井音楽賞受賞＞	1. ヴィヴァルディ：＜四季＞より＜夏＞ モーツァルト：セレナード 2. 山田耕筰：＜この道＞＜待ちぼうけ＞＜からたちの花＞他 中田喜直：＜お母さん＞ 3. フォーレ：＜ラシーヌ讃歌＞＜パヴァーヌ＞＜サルベ・レジーナ＞＜おおサルタリス＞ 秋山和慶（指）　アンサンブル・アルスノヴァ、日本合唱協会
	7.26	同上 東京公演第2夜 バッハの夕べ （中央会館） 企画構成：堤剛	1. ヴィオラ・ダ・ガンバのためのソナタ第1番 ト長調 BWV.1027 2. ヴィオラ・ダ・ガンバのためのソナタ第2番 ニ長調 BWV.1028 3. ヴィオラ・ダ・ガンバのためのソナタ第3番 ト短調 BWV.1029 堤剛（vc）、高橋悠治（p）
	7.27	同上 東京公演第3夜 バッハの夕べ （中央会館） 企画構成：小林道夫	1. 前奏曲、フーガとアレグロ 変ホ長調 BWV.998 2. オーボエ・ソナタ ト短調 BWV.1030b 3. カンタータ第203番 BWV.203「愛を売る者」 4. パルティータ第6番 ホ短調 BWV.830 原田茂生（Br）、宮本文昭（ob）、小林道夫（cemb）

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1976	8. 6	**鳥井音楽賞記念** 「栗林義信・山根銀二」 東京公演第1夜 栗林義信リサイタル （東京文化会館小ホール）	1. ヘンデル：「真実の愛は永遠に」「無慈悲な宿命を待つ」より「いとしい妻よ」 ヴィヴァルディ：「君を見る愉しさ」 2. ロッシーニ：「ウイリアム・テル」より「じっとしておいで」 ドニゼッティ：「ラ・ファヴォリータ」より「来れよ、レオノーラ」 3. デンツァ：「妖精のまなざし」、ブロージ：「ヴェニスの幻想」 トスティ：「最後の歌」「理想」「セレナータ」 4. ヴェルディ：「椿姫」より「プロヴァンスの海と陸」 「運命の力」より「私の運命はつぼの中に」 「ドン・カルロ」より「ロドリーゴの死」「終わりの日は来た」 「オテロ」より「無慈悲な神の命ずるままに」 「リゴレット」より「悪魔め、鬼め」 栗林義信（Br）、三浦洋一（p）
	8. 7	同 東京公演第2夜 ベートーヴェンの室内楽 （東京文化会館小ホール） 企画・監修：山根銀二	第1部　講演「ベートーヴェン研究」　＜講演＞山根銀二 第2部　演奏 1. 弦楽四重奏曲第10番 変ホ長調 Op.74＜ハープ＞ 2. 弦楽四重奏曲第11番 ヘ短調 Op.95＜セリオーソ＞ 3. 弦楽四重奏曲第16番 ヘ長調 Op.135 厳本真理弦楽四重奏団
	8. 9	同 札幌公演 ベートーヴェンの夕べ （札幌市民会館）	第1部　講演「ベートーヴェン研究」　＜講演＞山根銀二 第2部　演奏 1. ピアノ協奏曲第4番 ト短調 Op.58 2. オペラ「フィデリオ」Op.72より第6曲「行進曲」第7曲「これはいい機会だ」 3. 交響曲第8番 ヘ長調 Op.93 栗林義信（Br）、山根弥生子（p）、若杉弘（指）　札響
	8.12	同 大阪公演 鳥井音楽賞受賞者の夕べ （大阪厚生年金会館 中）	第1部　講演「ベートーヴェン研究」　＜講演＞山根銀二 第2部　演奏 1. ベートーヴェン：交響曲第3番 変ホ長調 Op.55「英雄」 2. モーツァルト：「フィガロの結婚」より序曲、「もう飛ぶまいぞこの蝶々」 ヴェルディ：「椿姫」より「プロヴァンスの海と陸」、「シチリア島の夕べの祈り」序曲、「仮面舞踏会」より「お前こそ、心を汚すもの」 ジョルダーノ：「アンドレア・シェニエ」より「国を裏切る者」 ビゼー：「カルメン」より前奏曲、「闘牛士の歌」 栗林義信（Br）、若杉弘（指）　京響
1977	8. 4	**鳥井音楽賞記念** 「芥川也寸志と新交響楽団」 ＜日本の交響作品展＞ 東京公演 （東京文化会館）	1. 清瀬保二：＜日本祭礼舞曲＞ 2. 箕作秋吉：＜小交響曲 ニ長調＞ 3. 尾高尚忠：＜日本組曲＞ 4. 早坂文雄：＜古代の舞曲＞ 5. 伊福部昭：＜交響譚詩＞ 芥川也寸志（指）　新交響楽団
	8. 8	同上　大阪公演 （大阪フェスティバル）	（曲目、出演者は東京公演に同じ）
1978	8. 2	**鳥井音楽賞記念** 「常森寿子」 東京公演第1夜 （イイノホール）	1. モンテヴェルディ：＜オルフェオ＞よりプロローグ「音楽の精の歌」 ＜ポッペアの戴冠＞より「さらばローマ」、「アリアンナの嘆き」 2. ペルゴレージ：＜奥様女中＞ 小松一彦（指）、三谷礼二（演）、倉本政典（装）、宮崎純（照）、渡辺園子（衣） 伊集院正則（舞監） 常森寿子（S）、小林道夫（p, cemb）、栗林義信（Br）、佐藤博（語り役） 厳本真理弦楽四重奏団
	8. 3	同上 第2夜 （イイノホール）	1. ドニゼッティ：＜母と子＞ ベルリーニ：＜私の偶像よ＞＜美しいニーチェよ＞ ロッシーニ：＜アルプスの娘＞ ベルニーニ：＜夢遊病の女＞より「花よ、お前がこんなに早くしぼむとは」

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1978			「ああ今、私を満たしている喜びは」 2. ペルゴレージ：<奥様女中> （スタッフは同上） 常森寿子（S）、栗林義信（Br）、小林道夫（cemb）、三浦洋一（p）、佐藤博（語り役） 厳本真理弦楽四重奏団
	8. 5	同上 第3夜 （イイノホール）	1. 林　光：<4つの夕暮れの歌> メノッティ：<遠くの歌>より「結ばれぬ恋人たち」「雪の朝」「7杯目のワイン」「幻」「眠れペガサス」「手紙」「あきらめ」 2. ペルゴレージ：<奥様女中> （スタッフ、出演は同上）
	8. 9	同上　大阪公演 （大阪厚生年金会館 中）	（曲目、スタッフ、出演は東京第1夜に同じ）
1979	7.31	**サントリー音楽賞記念** 「松村禎三作品集」 東京公演第1夜 （イイノホール）	1. 詩曲Ⅱ番 2. 弦楽四重奏とピアノのための音楽 3. 詩曲Ⅰ番 4. ギリシャによせる2つの子守歌 5. アプサラスの庭 山本邦山（尺八）、野坂恵子（箏）、高橋悠治（p） ニューアーツ弦楽四重奏団、室内楽70［野口龍、植木三郎、松谷翠］
	8. 1	同上 第2夜 （日本青年館ホール）	1. 阿知女（あちめ） 2. 軽太子（かるのみこ）の歌える二つの歌 3. 暁の讃歌 田中信昭（指）、常森寿子（S）、中川昌三（fl）、脇岡宗一（ob）、森田利明（cl） 前田信吉（fg）、南浩之（hrn）、福井功（tp）、伊藤清（tub）、富米野玲子（p,org） 苅田雅治（vc）、永島義男（cb）、吉原すみれ／荒瀬順子／菅原淳（perc） 石橋雅一（obd'm）、川井道子（hp）、田中瑶子（p）、瀬山詠子（S）、三浦洋一（p） 東混
	8. 2	同上 第3夜 （日本青年館ホール）	1. 管弦楽のための前奏曲 2. ピアノ協奏曲第2番 3. 交響曲 野島稔（p）、森正（指）　新日本フィル
	8. 8	同上 大阪公演 （大阪フェスティバル）	1. 暁の讃歌 2. ピアノ協奏曲第2番 3. 交響曲 大阪フィル　その他出演者は東京第2夜、第3夜と同じ
	8.13	同上　名古屋公演 （愛知県勤労会館）	曲目は大阪公演と同じ 名古屋フィル　その他出演者は東京第2夜、第3夜と同じ
1980	7.25	**サントリー音楽賞記念** 「吉原すみれ打楽器の世界」 大阪公演 （大阪厚生年金会館 中）	1. 湯浅譲二：舞働き 2. 石井眞木：灰色の彷徨 3. ジャン・バリサ：打楽器とオーケストラのための協奏曲 4. 一柳　慧：光の反映（初演） 吉原すみれ、横山勝也（尺八）、観世榮夫（舞）、佐藤功太郎（指）　大阪フィル 武田明倫（解説）、古賀満平（照）
	8. 1	同上 東京公演第1夜 （日本青年館ホール）	1. ジャン・バリサ：打楽器とオーケストラのための協奏曲 2. 一柳　慧：光の反映 3. 武満　徹：カシオペア 岩城宏之（指）　新日本フィル　武田明倫（解説）
	8. 4	同上 東京公演第2夜 （東京文化会館小ホール）	1. 田中　賢：りんの歌 2. トルビオン・ルンドクィスト：デュエル 3. ペア・ノアゴー：波

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1980			4. 細川俊夫：連環1　吉原すみれさんのために 5. 石井眞木：灰色の彷徨 吉原すみれ、御喜美江（acc）、中川昌三（fl）、森田利明（cl）、武田明倫（解説）
	8.11	同上　九州公演 （福岡郵便貯金ホール）	曲目は大阪公演と同じ 九響　その他出演者は大阪公演と同じ
1981	9. 1	**サントリー音楽賞記念** オペラ一幕＜虎月傳＞ 東京公演 舞台美術：妹尾河童 ＜第12回音楽賞受賞＞ （カフェテアトル・モーツァルトサロン）	田中　均：オペラ「虎月傳」　中村　榮（台本） 田中信昭（指）、栗山昌良（演）、妹尾河童（装）、緒方規矩子（衣）、勝柴次朗（照）、田原進（舞監）、松本重孝（演助）、高石治（副指） 出演＝創作オペラ協会［浜田尚子・坂根圭恵・佐藤美子・瀬川武・竹沢嘉明・久岡昇・渡辺明］ 演奏＝西沢幸彦（fl）、内田道子（vn）、藤沢俊樹（vc）、定成誠一郎（perc）、久保晃子（p）
	9. 9	同上　大阪公演 （毎日国際サロン）	曲目は東京公演と同じ 出演は坂根圭恵、佐藤美子、竹沢嘉明、渡辺明
	7.17	**作曲家の個展81** 「松平頼則」 （東京文化会館）	1. フリュート独奏と室内オーケストラの為のセレナード（改訂初演） 2. 二群のオーケストラの為の循環する楽章 3. 第Ⅱピアノ協奏曲（新作初演） 4. オーケストラの為の舞楽（日本初演） 小出信也（fl）、高橋アキ（p）、秋山和慶（指）　N響
1982	7.14	**サントリー音楽賞記念** 「柴田南雄の宇宙」 大阪公演 （毎日ホール）	1. 布瑠部由良由良 2. 北越戯譜 3. 念仏踊り 田中信昭（指）、丸谷吉清・新井裕治（合唱指導）、佐藤信（演）、桑谷哲男（照） 田原進（舞監） 東混、関西大学グリークラブ、混声合唱団A・M・C、大阪少年少女合唱団 吉増剛造（n）、上杉紅童（石笛・rec）、鯉沼廣行（笛）、山口恭範／佐藤迪（perc）
	9.22	同上 東京公演第1夜 （新宿文化センター）	1. 追分節考 2. 北越戯譜 3. 萬歳流し 4. 念仏踊り 田中信昭（指）、佐藤信（演）、桑谷哲男（照）、田原進（舞監） 関一郎（尺八）、鯉沼廣行（笛）、佐藤迪／定成庸二（perc） 東混、法政大学アリオンコール、御茶の水女子大学合唱団、おたまじゃくしの会、合唱団「あらかわ」、日本石油合唱団、ひばり児童合唱団
	9.24	同上 東京公演第2夜 （新宿文化センター）	1. 布瑠部由良由良 2. 宇宙について 田中信昭（指）、佐藤信（演）、桑谷哲男（照）、田原進（舞監） 島尾ミホ／吉増剛造（n）、上杉紅童（石笛・rec） 東混、成城大学合唱団、コール・カロス、東京大学柏葉会合唱団
	10.18	**作曲家の個展82** 「黛敏郎」 （東京文化会館）	1. 涅槃交響曲 2. オペラ＜金閣寺＞より――視覚的演出を伴ったコンサート形式による 岩城宏之（指）、田中信昭（合指）、大友直人（副指）、藤田敏雄（構・演） 朝倉摂（美）、沢田祐二（照）、小林皓二（音）、倉田昭生（舞監） 中村邦子（S）、中村健（T）、宮原昭吾（Br）、山田茂、乗松美代子、松尾地恵子、村本和修、酒井義長、清水紘治（n）　N響、日本プロ合唱団連合
1983	8.11	**サントリー音楽賞記念** 「外山雄三」 外山雄三と大阪の生んだ作曲家たち （ザ・シンフォニーホール）	1. 大栗　裕：大阪俗謡による幻想曲 2. 貴志康一：ヴァイオリン協奏曲 3. 清水　脩：智恵子抄（高村光太郎詩） 4. 外山雄三：交響曲＜帰国＞ 辻久子（vn）、林誠（T）、外山雄三（指）　大阪フィル

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1983	9. 2	同上 東京公演 外山雄三と日本のオーケストラ作品── 歴代受賞作曲家集 （簡易保険ホール）	1. 芥川也寸志：＜トリプティク＞ 2. 柴田南雄：シンフォニア 3. 松村禎三：ピアノ協奏曲第2番 4. 外山雄三：チェロ協奏曲 5. 外山雄三：管弦楽のためのラプソディー 野島稔（p）、堤剛（vc）、外山雄三（指）　新日本フィル
	11.14	同上 名古屋公演第1夜 外山雄三作品集Ⅰ　室内楽 （愛知文化講堂）	1. フルートソロのためのソナタ新作初演 2. チューバ、打楽器、ピアノのためのトリオ・ソナタ 3. 弦楽合奏のためのファンタジア 4. オーボエ協奏曲第1番 5. クラリネットと弦楽合奏のための協奏曲 6. ファゴット協奏曲 7. ホルン協奏曲第1番 外山雄三（指・p）、村田四郎（fl）、諸岡研史（ob）、宮本淳一朗（cl）、中西祥之（fg）、千葉馨（hrn）、多戸幾久三（tub）、山口十郎（perc）　名古屋フィル
	11.15	同上 名古屋公演第2夜 外山雄三作品集Ⅱ オーケストラ作品 （愛知文化講堂）	1. 交響詩「まつら」 2. バレエ組曲「阿修羅」 3. ヴァイオリン協奏曲第1番 4. 交響曲「帰国」 前橋汀子（vn）、外山雄三（指）　名古屋フィル
	11.29	**作曲家の個展83** 「山田耕筰」 （簡易保険ホール）	1. 交響曲「かちどきと平和」 2. 秋の宴 3. 暗い扉／曼荼羅の華 4. 日本組曲 5. マグダラのマリア 6. 君が代による前奏曲 山田一雄（指）　東京都響、東混
	12. 1	わらべ唄でつづる なにわ歳時記 （毎日ホール） 大阪城築城400年まつり 協賛	柴田南雄：＜わらべ唄でつづる　なにわ歳時記＞ 田中信昭（指）、佐藤信（演）、丸谷吉清／新井裕治（合唱指導）、服部基（照） 松下博明（舞監）、伊藤明子（演助） 柏原市少年少女合唱団、大阪少年少女合唱団 西垣俊郎／北村敏則（T）、金丸七郎／川下登（Br）、藤田武士（Bs）、林曠子（n） 大阪天満宮天神講／河南町中子供会／岸和田市塔原町葛城おどり保存会／住吉大社住吉踊保存会／能勢町天王子供会
1984	9. 1	**サントリー音楽賞記念** 「鈴木敬介」 （日生劇場） 共催： ニッセイ児童文化振興財団	モーツァルト：オペラ「コシ・ファン・トゥッテ」 ダ・ポンテ（台本）、中山悌一（訳詞） 飯守泰次郎（指）、鈴木敬介（演）、若林茂熙（美）、吉井澄雄（照）、渡辺園子（衣） 小栗哲家（舞監）、増井信貴（合唱指導） 大倉由起枝、秋葉京子、大島幾雄、小林一雄、豊田喜代美、佐藤征一郎 新星日本交響楽団、二期会合唱団、森島英子（cemb）
	6.13	**作曲家の個展84** 「武満徹」 （東京文化会館）	1. 地平線のドーリア 2. ノヴェンバー・ステップス 3. 鳥は星形の庭に降りる 4. ドリームタイム 5. オリオンとプレアデス　委嘱作品初演 鶴田錦史（琵琶）、横山勝也（尺八）、堤剛（vc）、岩城宏之（指）　N響
1985	7.14	**作曲家の個展85** 「三善晃」 （東京文化会館）	1. レクイエム 2. ＜詩篇＞ 3. ＜響紋＞ 尾高忠明（指）、田中信昭（合指） N響、東混、東京荒川少年少女合唱隊、東京放送児童合唱団、ひばり児童合唱団

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1985	8. 3	**サントリー音楽賞記念** 「豊田喜代美 ベスト・レパートリー」 東京公演第1夜 ソプラノとオーケストラの夕べ （日本青年館）	1. J. S. バッハ：カンタータ＜全地よ、神に向いて歓呼せよ＞ 2. R. シュトラウス：オペラ＜ばらの騎士＞より「ワルツ」 3. R. シュトラウス：4つの最後の歌 4. 三善　晃：＜決闘＞ 5. ベルク：オペラ＜ヴォツェック＞より「3つの断章」 豊田喜代美（S）、井上道義（指）　新日本フィル
	8. 8	同上 大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	1. オッフェンバック：オペラ＜ホフマン物語＞より 2. R. シュトラウス：オペラ＜ばらの騎士＞より「ワルツ」 3. R. シュトラウス：4つの最後の歌 豊田喜代美（S）、荒道子（A）、林誠（T）、井上道義（指）　大阪フィル
	9.20	同上 東京公演第2夜 日本歌曲の夕べ （イイノホール）	1. 中田喜直：6つの子供のうた 2. 團伊玖磨：5つの断章 3. 三善　晃：白く 4. 林　　光：道、子供と線路 5. 毛利蔵人：よしなしうた（初演） 6. 間宮芳生：＜日本民謡集＞より 豊田喜代美（S）、中田喜直／相庭尚子／中川俊郎／毛利蔵人／間宮芳生（p）、野口龍（fl）
1986	3.19	**室内楽個展86** 「武満徹」 （大阪府立労働センター）	1. サクリファイス 2. フォー・アウェイ 3. 雨の樹素描 4. ア・ウェイ・ア・ローン 5. 雨の樹 6. 海へ 7. オリオン 8. 雨の呪文 持田洋（fl）、森田利明（cl）、田原富子（p）、種谷睦子（vib）、佐野健二（g, lute）、篠崎史子（hp）、上村昇（vc） 久合田緑弦楽四重奏団、グループ3マリンバ 武満　徹＋小石忠男（プレトーク）
	10. 9	**サントリー音楽賞記念** 「日本テレマン協会演奏会」 大阪公演第1夜 （ザ・シンフォニーホール）	1. テレマン：管弦楽組曲＜ハンブルクの潮の満干＞ 2. コレット：ヴィヴァルデイ＜四季＞の主題によるモテット 3. J. S. バッハ：管弦楽組曲第2番 ロ短調 BWV.1067 4. J. S. バッハ：＜マニフィカト＞BWV.243 常森寿子／渡辺由美子（S）、上辻静子（A）、畑儀文（T）、八木宣好（Bs）、北山隆（fl） 延原武春（指）　テレマン室内管弦楽団、テレマン室内合唱団
	10.19	同上 大阪公演第2夜 （夙川カトリック教会）	テレマン：オラトリオ＜最後の審判＞（日本初演） 常森寿子（S）、上杉静子（A）、畑儀文（T）、八木宣好（Bs） 延原武春（指）　テレマン室内管弦楽団、テレマン室内合唱団
	10.22	同上 東京公演第1夜 （霊南坂教会）	曲目、出演者は大阪第2夜と同じ
	10.23	同上 東京公演第2夜 （サントリーホール）	曲目、出演者は大阪第1夜と同じ
	12. 3	**作曲家の個展86** 「湯浅譲二」 （サントリーホール）	1. オーケストラの時の時 2. 芭蕉の風景 3. オーケストラのためのパースペクティヴ 4. ＜啓かれた時＞　委嘱作品初演 リヴカ・ゴラーニ（va）、岩城宏之（指）　東京都響 武田明倫＋湯浅譲二（プレ・コンサート・トーク）

年 月 日	名称（会場）	曲目・出演者
2. 1	**サントリーホール開場記念** 「サントリー音楽賞受賞演奏家シリーズ」　第1夜 芥川也寸志と新交響楽団 （サントリーホール）	1. 平尾貴四男：古代讃歌 2. 早坂文雄：左方の舞と右方の舞 3. 小倉　朗：オーケストラのための舞踊組曲 4. 伊福部昭：タプカーラ交響曲 芥川也寸志（指）　新交響楽団
2. 2	同上　第2夜 小林道夫チェンバロ演奏会 （サントリーホール 小）	1. J. S. バッハ：トッカータ ト短調 2. J. S. バッハ：シンフォニア（3声のインヴェンションより） 3. J. S. バッハ：4つのカノン（＜フーガの技法＞より） 4. J. S. バッハ：パルティータ第5番 ト短調 小林道夫（cemb）
2. 3	同上　第3夜 吉原すみれ パーッカション演奏会 （サントリーホール 小）	1. 福士則夫：グレイ・オブ・グレイ 2. 近藤　譲：火口 3. 高橋悠治：朝のまがりかどまがれ 4. 毛利蔵人：テネブローソ・ジョルノ 5. クセナキス：オーボエとパーカッションのためのドゥマーテン 吉原すみれ／山口恭範（perc）、柴山洋（ob）
2. 4	同上　第4夜 外山雄三と名古屋フィルハーモニー交響楽団 （サントリーホール）	1. シューベルト：交響曲第8番＜未完成＞ 2. ロドリーゴ：アランフェス協奏曲 3. ラフマニノフ：交響的舞曲 荘村清志（g）、外山雄三（指）　名古屋フィル
2. 5	同上　第5夜 栗林義信、常森寿子、豊田喜代美による イタリアオペラコンサート （サントリーホール）	1. ヴェルディ：オペラ＜椿姫＞より「ああ、そはかの人か」「花から花へ」「アルフレードはどこに」「第3幕への前奏曲」「パリを離れて」 2. ヴェルディ：オペラ＜シモン・ボッカネグラ＞より「どうしてひとり離れて」「娘よ、その人の名を呼んだだけで胸がおどる」 3. ドニゼッティ：オペラ＜ルチア＞より「恐れに色を失うならば」「泣いて悲しみ」第3幕狂乱の場「優しいささやき」「香炉はくゆり」「苦い涙をそそげ」 栗林義信（Br）、常森寿子（S）、豊田喜代美（S）、大倉由起枝（S）、若本明志（T）
3.27	**室内楽個展87** 「三善晃」 （大阪府立労働センター）	1. トルスⅢ 2. ピアノ・ソナタ 3. フルート、チェロ、ピアノのためのソナタ 4. 弦楽四重奏曲第1番 5. コントラバスと打楽器のためのリタニア 6. メッサージュ・ソノール 持田洋（fl）、宮本淳一朗（cl）、田原富子／岡原慎也（p）、種谷睦子（mar）、北野徹（perc）、上村昇（vc）、奥田一夫（cb） 弦楽四重奏［稲庭達／日比浩一（vn）、財津進（va）、織田啓嗣（vc）］ 三善晃＋小石忠男（プレトーク）
8. 9	**サントリー音楽賞記念** 「若杉弘のマーラー」　東京公演 （サントリーホール）	1.　ウェーベルン：管弦楽のための牧歌＜夏風のなかで＞ 2.　マーラー：交響曲第7番 ホ短調＜夜の歌＞ 若杉弘（指）　東京都響
8.11	同上　大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	曲目、出演者は東京と同じ
8. 7	**サマースペシャル** 「オリジナル楽器による協奏曲の夕べ」 （サントリーホール 小）	1. ヘンデル：合奏協奏曲 変ロ長調 Op.6-7 2. ヘンデル：オルガン協奏曲 ヘ長調 HWV.295 3. ヴィヴァルディ：フルート協奏曲 ヘ長調 Op.10-5 4. テレマン：トリオ・ソナタ ト短調 5. バッハ：ブランデンブルク協奏曲第5番 ニ長調 BWV.1050 小林道夫（企画構成・org, cemb）、有田正広（fl.trv）、渡辺慶子／若松夏美（b.vn）、高田あずみ（b.va）、田崎瑞博（b.vc）、宇田川貞夫（viol）

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1987	8.21	**サマースペシャル** 「オトテール・アンサンブル演奏会」 （サントリーホール 小）	1. テレマン：室内協奏曲 ト短調 2. ガルッピ：トリオ ト短調 3. ヴィヴァルディ：コンチェルト ニ長調 FⅦ-25 4. J. S. バッハ：フランス組曲第5番 BWV.816 5. J. S. バッハ：ヴィオラ・ダ・ガンバ ソナタ ニ長調 BWV.1028 6. モンテクレール：コンセール第3番 ハ長調 オトテール・アンサンブル［花岡和生、有田正広、本間正史、高田あずみ、中野哲也、有田千代子］
	8.22	**サマースペシャル** 「邦楽名曲演奏会」 （サントリーホール 小）	1. 尺八本曲＜虚空鈴慕＞ 2. 三絃曲＜新砧＞ 3. 地唄＜黒髪＞ 4. 箏曲＜秋の曲＞ 5. 三曲＜尾上の松＞ 竹内道敬（企画構成）、藤井久仁江（三絃・箏・唄）、矢崎明子（三絃・箏）、菊池悌子（箏）、山口五郎（尺八）
	8.21	**サマースペシャル** 「かいぶつたちのいるところ——宇宙と海と子供部屋」 （サントリーホール）	1. ウイリアムズ：＜スターウォーズ＞組曲 2. 伊福部　昭：シンフォニック・ファンタジア＜ゴジラ＞ 3. ナッセン：＜かいじゅうたちのいるところ＞より「歌と海の間奏曲」 米屋恵子（s）、今村能（指）、加藤直（演）　新日本フィル
	8.30	**サマースペシャル** 「ジュニアオーケストラコンサート87」 （サントリーホール）	1. ベートーヴェン：序曲＜レオノーレ＞第3番 2. ベートーヴェン：序曲＜エグモント＞ 3. ベートーヴェン：序曲＜コリオラン＞ 4. ハイドン：ディヴェルティメント 5. コレルリ：合奏協奏曲ほか 6. シベリウス：交響詩＜フィンランディア＞ 7. シベリウス：序曲＜カレリア＞ 8. ウェーバー：オペラ＜魔弾の射手＞序曲ほか 千葉県市川市立鬼高小学校管弦楽部　佐治薫子（指） 愛知県刈谷市立依佐美中学校オーケストラ部　神谷幸一／浜田毅／川上由美子（指） 司会＝吉村光夫
	10. 6	**作曲家の個展87** 「間宮芳生」 （サントリーホール）	1. オーケストラのための2つのタブロー65 2. ピアノ協奏曲第2番 3. チェロ協奏曲 4. オーケストラのためのタブロー85 野島稔（p）、堤剛（vc）、若杉弘（指）　東京都響、東混 武田明倫＋間宮芳生（プレトーク）
1988	2. 2	**サントリー音楽賞記念** 「内田光子ピアノ・リサイタル」 大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	1. ショパン：ソナタ第2番 変ロ短調 Op.35＜葬送＞ 2. ショパン：2つのノクターン Op.62 3. シューベルト：6つのドイツ舞曲 D820 4. ウェーベルン：変奏曲 Op.27 5. モーツァルト：アダージョ ロ短調 K540 6. モーツァルト：ソナタ第17番 ニ短調 K576 内田光子（p）
	2. 4	同上 東京公演 （サントリーホール）	曲目、出演者は大阪と同じ
	3.25	**室内楽個展88** 「一柳慧」 （大阪府立労働センター）	1. ヴァイオリンとピアノのための＜ソナタ＞ 2. 弦楽四重奏曲＜インタースペース＞ 3. ピアノメディア 4. パガニーニ・パーソナル 5. リカレンス 持田洋（fl）、宮本淳一朗（cl）、種谷睦子（perc）、木村茉莉（hp）、一柳慧／田原富子（p）、

年月日	名称（会場）	曲目・出演者
		小栗まち絵（vn）、河野文昭（vn） 弦楽四重奏［岸辺百百雄／横内ひまり／杉山雄一／河野文昭］ 一柳慧＋小石忠男（プレトーク）
8. 5	**サントリー音楽賞記念** 「岩城宏之」 大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	1. 武満徹：弦楽のためのレクイエム 2. 武満徹：ア・ウェイ・ア・ローンⅡ 3. 武満徹：ウォーター・ドリーミング 4. ブラームス：交響曲第2番 ニ短調 Op.73 小泉浩（fl）、岩城宏之（指）　札響
8. 6	同上　東京公演 （サントリーホール）	曲目、出演者は大阪と同じ
11.15	同上 札幌交響楽団特別公演 （北海道厚生年金会館） 共催：札幌交響楽団	1. 武満徹：弦楽のためのレクイエム 2. 武満徹：ア・ウェイ・ア・ローンⅡ 3. 武満徹：ウォーター・ドリーミング 4. マーラー：交響曲第1番 ニ短調＜巨人＞ 出演者は大阪と同じ
8. 8	**サマースペシャル88** 「ショパン／ ピアノ曲全曲演奏会」 協奏曲第1夜 （サントリーホール）	1. ル・シルフィールド　編曲＝福田一雄 2. ＜ドン・ジョバンニ＞の＜お手をどうぞ＞による変奏曲 変ロ長調 Op.2 3. 協奏曲第2番 ヘ短調 Op.21 中村紘子（p）、現田茂夫（指）　新日本フィル
8.29	同上 協奏曲第2夜 （サントリーホール）	1. ポーランドの歌による大幻想曲 イ長調 Op.13 2. 演奏会用ロンド ヘ長調＜クラコヴィヤク＞Op.14 3. アンダンテ・スピアナートと華麗なる大ポロネーズ 変ホ長調 Op.2 4. 協奏曲第1番 ホ短調 Op.11 園田高弘（p）、山下一史（指）　新日本フィル
8.20	同上 独奏曲第1夜 （サントリーホール 小）	第1部（第41回全日本学生音楽コンクール小学生の部入賞者他） 1. マズルカ ニ長調 遺作、ポロネーズ 変ロ長調 2. ポロネーズ ト短調／3つのエコセーズ ニ長調／ト長調／変ニ長調 Op.72-3 3. ポロネーズ 変イ長調 遺作 4. ノクターン ホ短調 Op.72-1 5. マズルカ イ短調 Op.68-2 6. コントルダンス 変ト長調、2つのマズルカ 変ロ長調／ト長調 7. ポロネーズ 嬰ト短調 遺作 8. ポロネーズ ニ短調 Op.71-1 9. ポロネーズ 変ロ短調＜別れ＞ 10. 変奏曲 イ長調＜パガニーニの思い出＞ 11. ＜スイスの少年＞による変奏曲 ホ長調 遺作 12. ロンド ハ短調 Op.1 三田寛子／峰優子／安村真紀／田中ゆりあ／宮本いずみ／大西真由子／城寿昭／西井葉子／遠藤絵美子／石井馨子／有馬みどり／新井理恵（p）
		第2部（第41回全日本学生音楽コンクール中学生の部入賞者他） 1. 葬送行進曲 ハ短調 Op.72-2 2. 2つのワルツ 遺作 変イ長調／変ホ長調 3. 2つのマズルカ Op.68-1/3 ワルツ ホ長調 遺作 4. ノクターン 嬰ハ短調 5. ラルゴ 変ホ長調 ノクターン ハ短調 遺作 6. 2つのワルツ 遺作 変ホ長調／イ長調 7. ポロネーズ 変ロ長調 Op.71-2 8. ポロネーズ ヘ短調 Op.71-3 9. ポロネーズ 変ト長調 遺作

年 月 日	名称（会場）	曲目・出演者
		10. マズルカ風ロンド ヘ長調 Op.5 11. ロンド ハ長調 12. ロンド 変ホ長調 Op.16 田中亜津子／陳スニ／山根涼子／杉山直子／鶴見彩／湯浅聡子／北川美晃／新美光映／樋口敦子／丸林江里奈／山崎早登美／江尻南美（p）
		第3部（第41回全日本学生音楽コンクール高校生の部入賞者他） 1. ノクターン 変ロ短調 Op.9-1 2. ノクターン 変ホ長調 Op.9-2 3. ノクターン ロ長調 Op.9-3 4. ボレロ ハ長調 Op.19 5. 華麗なる変奏曲 変ロ長調 Op.12 6. 演奏会用アレグロ イ長調 Op.46 7. ノクターン ヘ長調 Op.15-1 8. ノクターン 嬰ヘ短調 Op.15-2 9. ノクターン ト短調 Op.15-3 10. 4つのマズルカ遺作 ハ長調／変ロ長調／ニ長調／変イ長調 11. マズルカ イ短調遺作＜ノートル・タン＞ マズルカ イ短調遺作＜エミール・ガイヤールに捧ぐ＞ 12. ソナタ第1番 ハ短調 Op.4 広瀬美香／佐々木洋子／巣山千恵／坂上万純／浦畠昌子／岡本莉莎／松浦朋子／寺田智子／木村祐子／森田理恵／武田美和子／花岡絵里子（p）
		第4部　連弾・2台ピアノを含む（日本音楽コンクール入賞、入選者他） 1. 4手のための変奏曲 ニ長調 2台のピアノのためのロンド ハ長調 2. バラード ト短調 Op.23／カンタービレ 変ロ長調 ＜ヘクサメロン＞変奏曲 変ホ長調／＜春＞ ト短調 ノクターン ロ長調 Op.32-1 3. タランテラ 変イ長調 Op.43／フーガ イ短調 ＜アルバムの一葉＞ホ長調／ノクターン 変イ長調 Op.32-2 スケルツォ ロ短調 Op.20 4. 4つのマズルカ Op.6 5つのマズルカ Op.7 スケルツォ 変ロ短調 Op.31 中川朋子／熊谷佐江子／小坂圭太／有森博／松谷園子（p） 以上第1部～第4部　司会＝白鳥千絵
8.26	同上 独奏曲第2夜 （サントリーホール 小）	第1部 1. 12の練習曲 Op.10 ハ長調／イ短調／ホ長調＜別れの曲＞／嬰ハ短調 変ト長調＜黒鍵＞／変ホ短調／ハ長調／ヘ長調／ヘ短調／変イ長調 変ホ長調／ハ短調＜革命＞ 2. 2つのノクターン Op.27 嬰ハ短調／変ニ長調 3. 4つのマズルカ Op.17 変ロ長調／ホ短調／変イ長調／イ短調 4. 4つのマズルカ Op.24 ト短調／ハ長調／変イ長調／変ロ短調 5. 4つのマズルカ Op.67 ト長調／ト短調／ハ長調／イ短調 6. スケルツォ 嬰ハ短調 Op.39 田原富子（p）
		第2部 1. 14のワルツ ワルツ 変ホ長調 Op.18＜華麗なる大円舞曲＞ 3つのワルツ Op.34 ワルツ 変イ長調 Op.42 3つのワルツ Op.64 2つのワルツ Op.69 3つのワルツ Op.70

年 月 日	名称（会場）	曲目・出演者
		ワルツ ホ短調 遺作 2. バラード ヘ長調 Op.38 3. 3つの新練習曲 4. 4つのマズルカ Op.41 5. 2つのポロネーズ Op.26 藤井一興（p）
		第3部 1. 2つのノクターン Op.48 2. ポロネーズ 嬰ヘ短調 Op.44 3. バラード 変イ長調 Op.47 4. 幻想曲 ヘ短調 Op.49 5. 3つのマズルカ Op.63 6. ソナタ第2番 変ロ短調 Op.35＜葬送＞ 弘中　孝（p）
8.27	同上 独奏曲第3夜 （サントリーホール 小）	第1部 1. 12の練習曲 Op.25 2. 2つのノクターン Op.37 ト短調／ト長調 3. 前奏曲 嬰ハ短調 Op.45 4. 4つのマズルカ Op.30 5. 4つのマズルカ Op.33 6. 2つのポロネーズ Op.40 7. バラード ヘ短調 Op.52 楊　麗貞（p）
		第2部 1. 4つの即興曲 嬰ハ短調 Op.66＜幻想即興曲＞／変イ長調 Op.29 嬰ヘ長調 Op.36／変ト長調 Op.51 2. 2つのノクターン Op.55 3. スケルツォ ホ長調 Op.54 4. ポロネーズ 変イ長調 Op.53＜英雄＞ 5. 前奏曲 変イ長調 6. 24の前奏曲 Op.28 山上明美（p）
		第3部 1. 2つのノクターン Op.62 2. 子守歌 変ニ長調 Op.57 3. 3つのマズルカ Op.56 4. ポロネーズ 変イ長調 Op.61＜幻想＞ 5. 3つのマズルカ Op.59 6. マズルカ ヘ短調 Op.68-4 7. バルカロール 嬰ヘ長調 Op.60 8. ソナタ第3番 ロ短調 Op.58 神谷郁代（p）
8.30	**サマー・スペシャル88** 「ジュニア・オーケストラコンサート88」 （サントリーホール）	1. チャイコフスキー：バレエ＜くるみ割人形＞より＜行進曲＞＜花のワルツ＞ 2. グリーク：＜ホルベルク組曲＞ 3. ドヴォルザーク：交響曲第9番＜新世界より＞第1、第4楽章 4. ヴェルディ：オペラ＜運命の力＞序曲 5. ベートーヴェン：序曲＜エグモント＞ 6. メンデルスゾーン：序曲＜ルイ・ブラス＞ 7. チャイコフスキー：バレエ＜白鳥の湖＞より「情景」「ワルツ」「白鳥の踊り」 1～3＝船橋市立小栗原小学校合奏クラブ　佐藤日呂志（指） 4～7＝市川市立第6中学校管弦楽部　石渡博尚（指） 司会＝菅原牧子

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1988	11.18	**作曲家の個展88** 「一柳慧」 （サントリーホール）	1. 弦楽オーケストラのための＜インタースペース＞ 2. ヴァイオリン協奏曲＜循環する風景＞ 3. マリンバとオーケストラのための＜パガニーニ・パーソナル＞ 4. 交響曲＜ベルリン連詩＞　委嘱作品初演 数住岸子（vn）、中谷孝哉（mar）、佐藤しのぶ（S）、種井静夫（T） 岩城宏之（指）、東京フィル
1989	3.24	**室内楽個展89** 「間宮芳生」 （大阪府立労働センター）	1. ピアノ・ソナタ第3番＜スプリング＞ 2. 幻野―ヴァイオリンとピアノのために 3. チェストナット・ヒルへのオマージュ 4. 木管五重奏のための三楽章 5. 弦楽四重奏曲第2番＜いのちみな調和の海より＞ 持田洋（fl）、渡辺潤也（ob）、鈴木豊人（cl）、佐伯利之（fg）、山本昭一（hrn）、 田原富子／間宮芳生（p）、小栗まち絵（vn）、河野文昭（vc） 岸辺百百雄弦楽四重奏団
	8. 4	**サマー・スペシャル89** 「ジュニア・オーケストラコンサート89」 （サントリーホール）	1. J. シュトラウス：喜歌劇＜ジプシー男爵＞序曲 2. ルロイ・アンダーソン：ブルータンゴ 3. シューベルト：＜ロザムンデの音楽＞より「間奏曲」第3番 4. シューベルト：交響曲第8番 ロ短調＜未完成＞第1楽章 5. リムスキー・コルサコフ：交響組曲＜シェエラザード＞ 1～4＝青森県八戸市立根城小学校合奏部　片峰日出男／白鳥祐子（指） 5＝千葉県船橋市立三田中学校管弦楽部　安藤純（指） 司会＝菅原牧子
	8.21	**財団創設20周年記念公演Ⅰ** Music Since 1899～ 20世紀の音楽名曲選 管弦楽Ⅰ ―第1次大戦前 （サントリーホール）	1. R. シュトラウス：オペラ＜サロメ＞より「7つのヴェールの踊り」 2. ドビュッシー：夜想曲 3. ブゾーニ：組曲＜嫁えらび＞ 4. スクリャービン：交響曲第5番＜プロメテウス―火の詩＞作品60 木村かをり（p）、岩城宏之（指） 東京フィル、東混、大谷研二（合指）
	8.24	同上 管弦楽Ⅱ ―第1次大戦～第2次大戦 （サントリーホール）	1. オネゲル：パシフィック231―交響的断章第1番 2. バルトーク：弦楽器、打楽器、チェレスタのための音楽 3. プーランク：2台のピアノのための協奏曲 ニ短調 4. ショスタコーヴィッチ：交響曲第1番 ヘ短調 作品10 松永加也子／蛭多令子（p）、岩城宏之（指）　日本フィル
	8.28	同上 管弦楽Ⅲ ―第2次大戦後 （サントリーホール）	1. ペンデレツキ：広島の犠牲者のための―哀歌 2. メシアン：鳥の目覚め 3. ツインマーマン：前奏曲＜フォトプトシス＞　日本初演 4. ノーノ：2)進むべき道はない、だが進まねばならない ―アンドレイ・タルコフスキー 木村かをり（p）、岩城宏之（指）　東京都響
	8.20	同上 室内楽Ⅰ ―小編成オーケストラの試み （サントリーホール 小）	1. シェーンベルク：室内交響曲第1番 作品9 2. シュレーカー：室内交響曲　日本初演 3. ベルク：室内協奏曲 木村かをり（p）、数住岸子（vn）、榊原栄／田中良和（指） アンサンブル・アド・ホック［西沢幸彦／大沢明子／小泉浩（fl）、安原理喜／小島葉子（ob）、石橋雅一／庄司知史（e.hrn）、飯笹浩二／十亀正司／山本正治／木村牧麻／柴欣也／武田忠善（cl）、前田新吉／森田格（fg）、井上俊次／大畠條亮（c.fg）、富成裕一／藤田乙比古／万行千秋／山岸博（hrn）、福田善亮（tp）、首藤健一／宮下宣子（tb）、水野佐知香／後藤龍伸／蜷川いずみ／佐藤多美子（vn）、竹内晴夫／福本とも子（va）、永山利彦／平田昌平／服部誠（vc）、大西雄二／吉見雄二（cb）、松倉利之（timp）、藤本隆文（perc）、佐藤厚子（hp）、古藤田みゆき（cel）、寺嶋陸也（harm）、スーザン・ダールバーグ（p）］

年 月 日	名称（会場）	曲目・出演者
8.22	8.22　同上 室内楽Ⅱ ――新しい声の領域 （サントリーホール 小）	1. シェーンベルク：月に憑かれたピエロ 作品21 2. ラヴェル：ステファン＝マラルメの3つの詩 3. ストラヴィンスキー：日本の3つの抒情詩 4. アイスラー：パルムシュトレム　日本初演 5. ウェーベルン：4つの歌 作品13 伊藤叔／日比啓子（s）、天沼裕子（指） アンサンブル・アド・ホック［野口竜／遠藤剛史（fl）、星野正／船橋忠雄（cl）、板倉康明（B-cl）、南浩之（hrn）、海保泉（tp）、首藤健一（tb）、手島志保／磯野順子／高田あずみ／東義直（vn）、川人真紀子（va）、西内荘一／松岡陽平（vc）、溝入敬三（cb）、横沢真知子／渋谷淑子（p）、井上絵利加（hp）、荒瀬順子（perc）］
8.25	同上 室内楽Ⅲ ――アンサンブルの解放 （サントリーホール 小）	1. ストラヴィンスキー：組曲＜兵士の物語＞ 2. ヒンデミット：室内音楽第1番 作品24-Ⅰ 3. ミヨー：組曲＜ルネ王の炉辺＞ 作品205 4. イベール：アルトサックスと11の楽器の室内協奏曲 5. プロコフィエフ：ヘブライの主題による序曲 作品34 6. ブリテン：幻想曲 作品2 宗貞啓二（a-sax）、榊原栄（指） アンサンブル・アド・ホック［大沢明子（fl）、安原理喜（ob）、柴欣也／武田忠善（cl）、森田格（fg）、藤田乙比古（hrn）、福田善亮／大倉滋雄／首藤健一（tp）、水野佐知香／磯崎陽一／宮内直子／佐藤多美子／蜷川いずみ／井口久美／田中栄一（vn）、荒木のぶ子／堀江和生（va）、永山利彦／平田昌平（vc）、大西雄二（cb）、スーザン・ダールバーグ（p）、山口恭範（perc）、小林靖宏（acc）］
8.29	同上 室内楽Ⅳ ――響の探求 （サントリーホール 小）	1. ケージ：第1コンストラクション＜金属で＞ 2. ヘンツェ：刑務所の歌 3. クセナキス：ドゥマーテン 4. ライヒ：木片のための音楽 5. シュトックハウゼン：ツィクルス 6. ヴァーレーズ：アイオニゼーション 柴山洋（ob）、岡田知之打楽器合奏団［岡田知之／児玉慶三／細谷一郎／新沢義美／新谷祥子／幸西秀彦／及川真由美／十鳥勉／植松透／村松達之／河野真紀子／成田素子／近藤郁夫］、中川健次（照）、橋政愛（舞台構成）
8.30	同上 室内楽Ⅴ ――ひらかれた領域での 羽ばたき （サントリーホール 小）	1. ベリオ：サークルズ 2. シュニトケ：ピアノ五重奏曲 3. ペルト：タブラ・ラサ　日本初演 4. リゲティ：アヴァンチュール 5. ユン：ガラック 6. ブーレーズ：主のいない槌＜ル・マルト・サン・メートル＞ 白土理香／三縄みどり（S）、畠中恵子（Ms）、加納里見（A）、加賀清孝（Br）、高田あずみ／佐分利恭子（vn）、店村眞積（va）、ピエール＝イヴ・アルトー／三上明子（fl）、木村茉莉（hp）、佐藤紀雄（g）、中村均／ブリジット・ヴァンドーム（p）、吉原すみれ／山口恭範／松倉利之／石内聡明／目黒一則（perc） 山中光弦楽四重奏団　今村能／ピエール＝イヴ・アルトー（指） アンサンブル・アド・ホック［遠藤剛史（fl）、南浩之（hrn）、白井英治／小守谷巧／稲垣和泉／上田京子／浅井万水美／緒方恵／佐分利恭子／山本知重（vn）、大野かおる（va）、田中雅弘／桑田あゆむ／ミヒャエル・バッハ（vc）、猪股研介／溝入敬三（cb）、椎野信一／松永加也子（p）、小谷彩子（cemb）］
10. 4	**作曲家の個展89** 「石井眞木」 （サントリーホール）	1. ポラリテーテン～独奏者とオーケストラのための～　日本初演 2. ヴァイオリン協奏曲＜失われた響きⅢ＞ Op.34 3. 打楽器協奏曲＜アフロ・コンチェルト＞ Op.50 4. 非交響曲＜風姿＞ Op.41　委嘱作品初演 坂田美子（琵琶）、三橋貴風（尺八）、金昌国（fl）、篠崎史子（hp）、吉原すみれ（perc）、篠崎功子（vn）、石井眞木（指）　東京都響

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1989	11. 1	**財団20周年記念公演Ⅱ** 「武満徹・湯浅譲二・ 一柳慧　委嘱3作品再演」 （サントリーホール）	1. 武満　徹：チェロとオーケストラのための<オリオンとプレアデス> 2. 湯浅譲二：<啓かれた時> 3. 一柳　慧：交響曲<ベルリン連詩> 堤剛（vc）、中山洋（va）、佐藤しのぶ（S）、種井静夫（T） 外山雄三（指）　東京都響
1990	2.20	**サントリー音楽賞記念** 「林康子オペラ・アリア コンサート」 東京公演 （サントリーホール）	1. ロッシーニ：ウイリアム・テル序曲 2. ロッシーニ：ウイリアム・テルより「暗い森」 3. ドニゼッティ：ルクレツィア・ボルジアより「何と美しいこと」 4. ベッリーニ：ノルマ序曲 5. ベッリーニ：ノルマより「清らかな女神よ」 6. ヴェルディ：ルイザ・ミラー序曲 7. ヴェルディ：ドン・カルロより「世のむなしさを知る神」 8. ヴェルディ：エルナーニより「エルナーニよ、一緒に逃げて」 9. ヴェルディ：シチリア島の夕べの祈り序曲 10. ドニゼッティ：アンナボレーナより「なつかしの故郷の城に連れて行って」 林康子（S）、アントン・グァダーニョ（指）　東京フィル
	2.23	同上　大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	曲目は東京公演に同じ 関西フィル　その他出演者は東京公演に同じ
	3.23	**室内楽個展90** 「松村禎三」 （大阪府立労働センター）	1. 阿知女 2. 弦楽四重奏とピアノのための音楽 3. ギリシアによせる2つの子守歌 4. アプサラスの庭 5. ピアノ3重奏曲 藍川由美（S）、種谷睦子／細田信平／吉原すみれ（perc）、田原富子／阪本朋子／河野美砂子／小森谷泉（p）、持田洋（fl）、稲庭達／工藤千博（vn）、河野文昭（vc） 岸辺百百雄弦楽四重奏団／ニューフィルハーモニー管弦楽団メンバー
	7.22	スペシャルコンサート 「柴田南雄の シアターピース」 （大阪国際交流センター）	1. 追分節考 2. 萬歳流し 3. 宇宙について 田中信昭（指）、佐藤信（演）、関一郎（尺八）　東混
	8.20	**サマー・スペシャル90** 「セザール・フランク オルガン曲演奏会 ～没後100年に因んで」 （サントリーホール）	第1部 1. 大オルガンのための6つの小品より ——幻想曲 ハ長調 作品16／祈り 作品20／パシトラール 作品19 2. 3つのコラールより——コラール1 ホ長調 3. 3つの小品より——英雄的小品 4. 大オルガンのための6つの小品より——前奏曲／フーガと変奏曲 作品18／終曲 作品21 第2部 1. 3つの小品より——カンタービレ 2. 3つのコラールより——コラール2 ロ長調 3. 大オルガンのための6つの小品より——交響的大作品 作品17 4. 3つの小品より——幻想曲 イ長調 5. アンダンティーノ ト短調 6. 3つのコラールより——コラール3 イ長調 ジリアン・ウィーア（org）　馬渕久夫（話）、丹羽正明（ききて）
	8.20	**サマー・スペシャル90** 「20世紀の音楽 ——ふたつの10年史」 第1夜　室内楽と合唱 （サントリーホール 小）	1. シェーンベルグ：弦楽6重奏曲「浄められた夜」 2. ウェーベルン：「軽やかな小舟に乗って逃れゆけ」 3. メシアン：「5つのルシャン」 4. シェーンベルグ：「千年の三倍の年」、詩篇130番「深き淵より」 5. ウェーベルン：「4つの小品」 6. ストラヴィンスキー：「七重奏曲」 景山誠治（vn）、大野かおる（va）、田中雅弘（vc）、小林利彰（cl）、坂本正彦（hrn）、多田逸佐久（fg）、三木香代（p）、大谷研二（指）　東混

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1990	8.21	同上 第2夜　弦楽四重奏 （サントリーホール 小）	1. シェーンベルグ：弦楽四重奏曲第2番 嬰ヘ短調 作品10 2. ウェーベルン：弦楽四重奏のための5つの楽章 作品5 3. ベルク：弦楽四重奏曲 作品3 4. ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第5番 変ロ長調 作品92 ニューアーツ弦楽四重奏団、大谷しほ子（S）
	8.23	同上 第3夜　管弦楽 （サントリーホール）	1. シェーンベルグ：ワルソーの生き残り 作品46 2. クセナキス：メタスタシス 3. ジョリヴェ：ピアノ協奏曲「赤道協奏曲」 4. ストラヴィンスキー：バレエ音楽「火の鳥」1910年全曲版 蛭多令子（p）、勝部太（n）、外山雄三（指）　東混、東京都響
	8.24	同上 第4夜　歌曲 （サントリーホール 小）	1. ツェムリンスキー：めおとダンスの歌と他の歌 作品10 2. シェーンベルグ：ゲオルゲの「架空庭園の書」による15の詩 作品15 3. ブーランク：カリグラム／失踪者／マズルカ／ローズモンド／ひとつの詩／さわやかさと火 畠中恵子／蒲原史子（S）、佐々木正利（T）、村田健司／福島明也（Br）、相庭尚子／高橋悠治／服部宏子（p）
	8.25	同上 第5夜　ピアノ （サントリーホール 小）	1. ベルク：ピアノ・ソナタ 作品1 2. シェーンベルク：3つのピアノ曲 作品11 3. ジョブリン：ピアノ・ラグより――ソレース／ベセナ／ユーフォニック・サウンズ 4. ドビュッシー：ゴリウォーグのケークウォーク 5. アイヴス：3ページ・ソナタ 6. メシアン：4つのリズム・エチュード 7. ブーレーズ：構造第1巻 8. ラヴェル：マ・メール・ロア 9. サティ：梨の形をした3つの小品 10. ケージ：ソナタとインターリュード 11. ケージ：易の音楽 矢沢朋子／白石准／木村かをり／小坂圭太／平尾はるな／松永加也子／江村夏樹／中村和枝／渋谷淑子（p）
	8.29	**サマー・スペシャル90** 「音楽の現在～海外の潮流」 （サントリーホール）	1. ベリオ：レクイエス　日本初演 2. ルトスワフスキ：ピアノ協奏曲　日本初演 3. シュニトケ：合奏協奏曲第4番／交響曲第5番　日本初演 木村かをり（p）、井上道義（指）　東京都響
	8.30	**ジュニア・オーケストラ・コンサート** ～平成1年度こども音楽コンクール最優秀校による （サントリーホール）	1. モーツァルト：交響曲第40番 ト短調より第1楽章 2. シベリウス：交響詩「フィンランディア」 3. シューマン：交響曲第4番 ニ短調より第4楽章 4. J. S. バッハ：フーガ ト短調より「小フーガ」 5. ベートーヴェン：「シュテファン王」序曲 6. J. S. バッハ：「主よ、人の望みの喜びよ」 7. ワーグナー：楽劇「ニュルンベルクのマイスタージンガー」前奏曲 8. ドボルザーク：交響曲第8番 ト短調 作品88 1～6＝千葉県市川市立鬼高小学校管弦楽部　佐治薫子（指） 7～8＝千葉県船橋市立三田中学校管弦楽部　安藤純（指）
	9. 3	**サントリー音楽賞記念** 「有田正広」 東京公演第1夜 （サントリーホール 小）	＜モーツァルト フルート四重奏曲全曲演奏会＞ モーツァルト：フルート四重奏曲 K285 K285a K285b K298 有田正広（fl）　ボッケリーニ弦楽四重奏団
	9.13	同上 東京公演第2夜 （サントリーホール）	＜東京バッハ・モーツァルト・オーケストラ演奏会＞ 1. バッハ：シンフォニア 2. ボッケリーノ：シンフォニア 3. 交響曲40番 ト短調 有田正広（指）　東京バッハ・モーツァルト・オーケストラ

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1990	10.19	同上　福岡公演 （福岡銀行本店大ホール）	曲目、出演は東京公演第1夜に同じ
	10.23	**作曲家の個展90** 「林光」 （サントリーホール）	1. 交響曲 ト調 2. WINDS（ウインズ） 3. 第2交響曲・さまざまな歌 4. 8月の正午に太陽は…　委嘱作品初演 志村泉（p）、藍川由美（S）、外山雄三（指）　東京都響
	11.19	**サントリー音楽賞記念** 「有田正広」 大阪公演 （大阪いずみホール）	＜フルート協奏曲の夕べ＞ 1. ブラヴェ：フルート協奏曲 イ短調 2. ベンダ：フルート協奏曲 ホ短調 3. シュターミッツ：フルート協奏曲 ト短調 4. モーツァルト：フルート協奏曲第2番 ニ長調 有田正広（指・fl）　東京バッハ・モーツァルト・アンサンブル
1991	3.18	**室内楽個展91** 「諸井誠」 （大阪いずみホール）	1. J. C. バッハの名による幻想曲とフーガ 2. 無伴奏フルートのためのバルティータ 3. ピアノのためのαとβ 4. 5つのエピグラム 5. 現代尺八本曲 竹林奇譚抄より「浪速三題」 6. チェロとピアノのためのオルドゥル 7. ラメンタ79 土橋薫（org）、持田洋（fl）、宮本淳一朗（cl）、田原富子（p）、種谷睦子（vib）、杉谷真美（hp）、稲庭達（vn）、北口晋之（vc）、阪本朋子（cel,p）、戎洋子（cemb）、林俊昭／林由香子（p）、三橋貴風（尺八） 武田博之（指）　ニューフィルハーモニー管弦楽団メンバー
	8. 1	**サントリー音楽賞記念** 「武満徹」 大阪公演 （大阪いずみホール）	1. ナイト・シグナル 2. ノスタルジア～アンドレイ・タルコフスキーの追憶に 3. ウォーター・ドリーミング 4. グリーン 5. ノヴェンバー・ステップス 辻井淳（vn）、小泉浩（fl）、鶴田錦史（琵琶）、横山勝也（尺八） 岩城宏之（指）　京響
	8. 7	同上 東京公演 （サントリーホール）	1. ナイト・シグナル 2. 地平線のドーリア 3. ヴィジョンズ 4. ア・ストリング・アラウンド・オータム 5. マイ・ウェイ・オヴ・ライフ ～マイケル・ヴァイナーの追憶に（日本初演） 今井信子（va）、フランソワ・ル・ルー（Br） 岩城宏之（指）、大谷研二（合指）　東混、新日本フィル
	8.21	**サマー・スペシャル91** 「20世紀の音楽―ふたつの10年史Ⅱ（1911～1920 vs 1956～1965）」 第1夜　合唱 （サントリーホール 小）	1. クルシェネック：カノン 2. クルシェネック：グーテン・モルゲン、アメリカ 3. ラヴェル：3つの歌 4. ペンデレッキ：スタバト・マーテル 5. ストラヴィンスキー：狐 大谷研二（指）　東混、アンサンブル・アドホック
	8.22	同上 第2夜　弦楽四重奏曲 （サントリーホール 小）	1. ストラヴィンスキー：弦楽四重奏のための二重カノン 2. アイヴス：弦楽四重奏曲第2番 3. ツェムリンスキー：弦楽四重奏曲第2番 4. ペンデレッキ：弦楽四重奏曲第1番 5. ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第8番 ハ短調 作品110 ニューアーツ弦楽四重奏団

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1991	8.23	同上 第3夜　管弦楽Ⅰ （サントリーホール）	1. ベルク：アルテンベルクの絵葉書の文による5つの管弦楽付歌曲 2. ルトスワフスキ：ヴェネチアの遊戯 3. メシアン：クロノクロミー 4. バルトーク：中国の不思議な役人 平井香織（S）、岩城宏之（指）　東混、新日本フィル
	8.24	同上 第4夜　ピアノと声 （サントリーホール 小）	1. ストラヴィンスキー：ピアノ・ラグ・ミュージック 2. サティ：犬のためのぶよぶよした本当の前奏曲 3. サティ：自動記述法 4. サティ：世紀ごとの時間と瞬間の時間 5. サティ：スポーツと気晴らしより 6. サティ：最後から2番目の思想 7. サティ：官僚的なソナチネ 8. サティ：ノクチュルヌ第5番 9. サティ：最初のメヌエット 10. シェーンベルク：6つの小さなピアノ曲 作品19 11. スクリャービン：ピアノ・ソナタ第10番 作品70 12. プロコフィエフ：つかの間の幻影 作品22 13. R. シュトラウス：クレーマーシュピーゲル 作品66 14. ブーランク：動物詩集 15. ブーランク：画家の仕事 16. ブーランク：磁器の歌 17. ブーランク：ふたつのメロディ 18. ブーランク：最後の歌 19. カステルヌオーボ・テデスコ：プラテーロとぼく作品190 20. クセナキス：ヘルマ 21. メシアン：鳥のカタログより「コウライウグイス」「モリヒバリ」「ダイシャクナゲ」 22. ブーレーズ：「構造Ⅱ」 白石准／高橋アキ／蛭多令子／中嶋香／岡原慎也／上原宏子／木村かをり／小坂圭太（p）、原田茂生／村田健司（Br）、佐藤紀雄（g）、市村正親（n）
	8.26	同上 第5夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ストラヴィンスキー：ラグ・タイム 2. ウエーベルン：チェロとピアノのための3つの小品 3. ドビュッシー：フルート・ヴィオラとハープのためのソナタ 4. ベリオ：セクエンツァⅡ 5. シュトックハウゼン：ルフラン 6. ブーレーズ：マラルメによる即興Ⅱ 山本祐ノ介（vc）、三上明子（fl）、大野かおる（va）、篠崎史子（hp）、畠中恵子（S）、渋谷淑子（cel）、松永加也子／小山京子（p）、山口多嘉子／安藤芳広／松倉利之／山下雅雄／三橋敦／鈴木優子（perc） 大谷研二（指）　アンサンブル・アドホック
	8.29	同上 第6夜　管弦楽Ⅱ （サントリーホール 大）	ストラヴィンスキー作品集 1. ムーブメンツ 2. ペトルーシュカ 3. 春の祭典 木村かをり（p）、秋山和慶（指）　東京交響楽団
	8.30	**音楽の現在** ～海外の潮流 PartⅡ （サントリーホール 大）	1. マーク・アントニー・タネジ：スリー・スクリーミング・ポープ （絶叫する3人の法王）日本初演 2. ルイス・デ・パブロ：＜渚＞　日本初演 3. ルチアーノ・ベリオ：レンダリング　日本初演 井上道義（指）　東京都響
	8.28	**ジュニア・オーケストラ・コンサート** ～平成2年度こども音楽コンクール最優秀校による	1. チャイコフスキー：＜白鳥の湖＞より「情景」「チャルダッシュ」「ワルツ」 2. J. シュトラウス：＜ジプシー男爵＞序曲 3. ファリャ：＜三角帽子＞より「終幕の踊り」 4. ニコライ：＜ウインザーの陽気な女房たち＞序曲

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1991		（サントリーホール 大）	5. ビゼー：<アルルの女>第2組曲 6. ムソルグスキー：交響詩<禿山の一夜> 1～3＝千葉県船橋市立小栗原小学校合奏クラブ　宮野智（指） 4～6＝愛知県刈谷市立朝日中学校オーケストラ部　浜田毅（指）
	8.27	**第1回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	1. 鈴木輝昭：ヒュムノス～2群の混声合唱とオーケストラのための 2. 小鍛冶邦隆：オーケストラのための「愛の歌」 3. 佐藤昌弘：オーケストラのための「パースペクティヴ・オヴ・タイム」（時の展望） 4. 高橋　裕：シンフォニック・カルマ 小松一彦（指）　新日本フィル、東混（合指＝大谷研二）
	9.17	**作曲家の個展91** 「伊福部昭」 （サントリーホール）	1. シンフォニア・タプカーラ 2. 管弦楽のための「日本組曲」　委嘱作品初演 3. 交響頌偈「釈迦」 井上道義（指）　新日本フィル、東混、合唱団OMP（合指＝栗山文昭）
	11.18	**音楽の20世紀** ～古典と現在～ （いずみホール）	1. トゥービン：エストニア民謡による変奏曲 2. プロコフィエフ：フルート・ソナタニ短調 作品94 3. ペルト：鏡の中の鏡 4. ペルト：フラトレス 5. シュニトケ：弦楽四重奏曲第3番 6. グバイドゥーリナ：ミステリオーソ 武田博之（指）、河野美砂子／中村伸吾／右近恭子（p）、持田洋（fl）、稲庭達（vn） 岸辺百百雄弦楽四重奏団 種谷睦子／北川皎／宅間斉／山本毅／島貫利博／大垣内英伸／安永友昭（perc）
1992	3.27	**室内楽個展92** 「湯浅譲二」 （いずみホール）	1. 2つのパストラル 2. 相即相入Ⅰ 3. 管弦四重奏のためのプロジェクション 4. インター・ポジ・プレイ・ションⅡ 5. クラリネット・ソリテュード 6. 内触覚的宇宙Ⅱ・トランスフィギュレーション 7. 冬の日・芭蕉讃 田原富子／河野美砂子（p）、持田洋／寺本義明／関谷弘志（fl）、宮本淳一朗（cl）、三浦由美子（hp）、種谷睦子／喜多弘悦（perc）、小栗まち絵／梅原ひまり（vn）、山崎智子（va）、斎藤建寛（vc） 湯浅譲二＋小石忠男（プレ・コンサート・トーク）
	5.10	**サントリー音楽財団コンサート** 「武満徹＋諸井誠 IN HIDA FURUKAWA」 （岐阜県古川町総合体育館） 飛騨古川国際音楽祭推進会議と共催	1. 武満徹：サクリファイス 2. 武満徹：海へ 3. 諸井誠：ピアノのためのαとβ 4. 諸井誠：無伴奏フルートのためのパルティータ 5. 武満徹：オリオン 6. 諸井誠：竹林奇譚抄より「浪速三題」 持田洋（fl）、佐野健二（g, lute）、種谷睦子（vib）、上村昇（vc）、中野慶理／岡原慎也（p）、三橋貴風（尺八） プレ・コンサート・トーク：武満徹＋諸井誠＋小石忠男
	8. 6	**第2回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	1. 山本純ノ介：迦楼羅～黎明の響～ 2. 夏田昌和：オーボエとオーケストラのためのモルフォジェネシス 3. 山田泉：一つの素描～ピアノとオーケストラによるⅡ～ 4. 新実徳英：オーケストラのためのヘテロリズミクス 柴山洋（ob）、木村かをり（p）、篠崎功子（vn）、小松一彦（指）　東京交響楽団
	8.18	**サントリー音楽賞記念** 「尾高忠明」 （サントリーホール）	1. 武満徹：オリオンとプレアデス 2. エルガー：交響曲第1番 変イ長調 作品55 山崎伸子（vc）、尾高忠明（指）　東京フィル

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1992	8.22	サマー・フェスティバル92 第1夜　ヒンデミット特集 （サントリーホール 大）	1. 演奏する音楽 2. 器楽合奏のための学習用音楽 3. 愛好家と楽友のための歌と演奏音楽 4. クルプファルツから来た狩人 小鍛冶邦隆（指）　新交響楽団メンバー
	8.22	同上 第2夜　弦楽四重奏 （サントリーホール 小）	1. シェーンベルク：弦楽四重奏曲第3番 2. バルトーク：弦楽四重奏曲第3番 3. リゲティ：弦楽四重奏曲第2番 4. ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第14番 ニューアーツ弦楽四重奏団
	8.24	同上 第3夜　管弦楽Ⅰ （サントリーホール 大）	1. シェーンベルク：管弦楽のための変奏曲 2. ガーシュイン：ピアノ協奏曲 ヘ長調 3. ショスタコーヴィチ：交響曲第14番「死者の歌」 練木繁夫（p）、小濱妙美（S）、岸本力（Bs）、秋山和慶（指）　東京交響楽団
	8.25	同上 第4夜　合唱 （サントリーホール 小）	1. メシアン：5つのルシャン～メシアンを偲んで～ 2. バルトーク：4つのハンガリー民謡 3. クルト・ヴァイル：ベルリン・レクイエム 4. ラーシェ・エドルント：グローリア　日本初演 5. ヴェリオ・トルミス：鉄への呪い　日本初演 大谷研二（指）　東混、林光（n）
	8.26	同上 第5夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ヴェーベルン：弦楽三重奏曲 2. プロコフィエフ：五重奏曲 3. リゲティ：13奏者のための室内協奏曲 4. 尹伊桑：ロンデル「周旋」 5. ブーレーズ：ドメーヌ「領域」 本多優之（指）、景山誠治／高田あずみ（vn）、川中子紀子／山本友重（va）、山本裕康（vc）、溝入敬三（cb）、溝入由美子／小畑義昭（ob）、橋爪恵一／山本正治／野田祐介（cl）、前田信吉（fg）　フェスティバルアンサンブル
	8.27	同上 音楽の現在～海外の潮流 PartⅢ （サントリーホール 大）	1. オリヴィエ・メシアン：微笑み　日本初演 2. ハンス＝ヴェルナー・ヘンツェ：魅惑の森　日本初演 3. ジョン・アダムス：エロス・ピアノ　日本初演 4. バーナード・ランズ：セレモニアル　日本初演 矢沢朋子（p）、井上道義（指）　新日本フィル
	8.29	同上 第6夜　管弦楽Ⅱ メシアン追悼 （サントリーホール 大）	メシアン：峡谷から星たちへ…　日本初演 木村かをり（p）、笠松長久（hrn）、若杉弘（指）　東京都響
	8.30	同上 第7夜　ピアノと声 （サントリーホール 小）	1. メシアン：前奏曲集 2. ヒンデミット：組曲 1922 3. シェーンベルク：5つのピアノ曲 4. バルトーク：戸外にて 5. ラヴェル：マダガスカル島の歌 6. プーランク：陽気な歌 7. プーランク：歌われし歌 8. ベリオ：フォークソング 9. カウエル：エオリアン・ハープ 10. クラム：夏の夜の音楽祭（マクロコスモスⅢ） 11. ケージ：チープ・イミテーション 小坂圭太／高橋アキ／近藤伸子／北住淳／菱沼明美／上原宏子／矢沢朋子／松永加也子／高橋悠治（p）、小泉浩（fl）、柴欽也（cl）、百武由紀（va）、田中雅弘／苅田雅治（vc）、木村茉莉（hp）、松倉利之／鈴木眞樹／田辺由紀／山口多嘉子（perc）、日比啓子（S）、村田健司（Br）、畠中恵子（Ms）、佐藤紀雄（指）

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1992	8.30	同上　第8夜　メシアン・オルガン曲特集 ～メシアン追悼～ （サントリーホール 大）	1. 天上の宴 2. 二枚折絵～地上の生と至福の永遠性に関する試論～ 3. 聖なる三位一体の神秘への瞑想 ジェニファー・ベイト（org）
	8.25	**ジュニア・オーケストラ・コンサート** ～平成3年こども音楽コンクール最優秀校による （サントリーホール 大）	1. ビゼー：「カルメン」前奏曲 2. ヘンデル：ラルゴ 3. エルガー：行進曲「威風堂々」より第1番 4. ハイドン：ディベルティメント 変ロ長調（木管5重奏） 5. 芥川也寸志：「弦楽のための3章」より第1･3楽章 6. J. S. バッハ：「前奏曲とフーガ」より前奏曲（金管8重奏） 7. シューベルト：交響曲第8番「未完成」より第1楽章 8. 芥川也寸志：交響管弦楽のための音楽 9. ベルリオーズ：序曲「ローマの謝肉祭」 10. ムソルグスキー：交響詩「禿山の一夜」 11. グリーグ：「ペールギュント」第1組曲 12. エルガー：行進曲「威風堂々」 1～8＝市川市立鬼高小学校管弦楽部　富田政芳／佐治薫子／石渡博尚（指） 9～12＝刈谷市立朝日中学校オーケストラ部　浜田毅（指）
	10. 6	**作曲家の個展92** 「西村朗」 （サントリーホール 大）	1. 2台のピアノと管弦楽のヘテロフォニー 2. チェロ協奏曲　日本初演 3. 星曼荼羅 4. アストラル協奏曲「光の鏡」　委嘱作初演 神野明／佐藤俊（p）、ワルター・ノース（vc）、原田節（ond.m） 岩城宏之（指）　東京都響
	10.27	**音楽の20世紀** ～古典と現在Ⅱ～ （大阪いずみホール）	＜プレ・コンサート＞ 1. スコット・ジョプリン：ラグタイム 2. ジョージ・ガーシュイン：プレリュード第2番 ＜コンサート＞ 1. レナード・バーンスタイン：ファイブ・アニヴァーサリーズ 2. レナード・バーンスタイン：二つの愛の歌 3. レナード・バーンスタイン：私は音楽が嫌い 4. レナード・バーンスタイン：金管楽器のための5つの小品 5. ジョン・ケージ：バッカナル（追悼演奏） 6. ジョン・ケージ：TWO 3 7. スティーヴ・ライヒ：6台のピアノ 眞木利一／岡原慎也／大谷正和／藤島啓子／岩崎宇紀／山上明美／小室弥須彦／松園洋二（p）、早坂宏明（tp）、小山亮（hrn）
1993	3.26	**室内楽個展93** 「林光」 （大阪いずみホール）	1. ラプソディー～ヴァイオリンとピアノのための～ 2. 第2ピアノ・ソナタ「木々について」 3. アメリカ組曲 4. ハンス･アイスラーへの感謝～クラリネットとピアノのための～ 5. 明日ひとつの歌が…～クラリネットとピアノのための～ 6. トッカータ～マリンバとピアノのための～ 7. 弦楽四重奏曲「レゲンデ」 戎洋子／田原富子／林光（p）、小栗まち絵／岸辺百百雄／梅原ひまり（vn）、時村美影（va）、高橋宏明（vc）、待永望（fl）、野田燎（S-sax）、小川哲生（cl）、種谷睦子（perc） プレ・コンサート・トーク　林光＋小石忠男
	7.14	**サントリー音楽賞記念** 「練木繁夫」 （いずみホール）	1. ショパン：バラード第1番 ト短調 作品23 2. リスト：オーベルマンの谷 3. ストラヴィンスキー：ペトルーシュカの3楽章 4. シューマン：謝肉祭 作品9 練木繁夫（p）

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1993	7.15	同上 東京公演 （サントリーホール 大）	大阪公演と同じ
	10.19	同上 仙台公演 （仙台市青年文化センター）	大阪公演と同じ
	8.21	**サマーフェスティバル93** 第1夜　ピアノと声 （サントリーホール 小）	1. ケージ：バッカナル 2. ヒンデミット：ルードゥス・トナリスより――前奏曲、第1フーガ、間奏曲、第5フーガ、間奏曲、第11フーガ、間奏曲、第12フーガ、後奏曲 3. プロコフィエフ：ピアノ・ソナタ第8番 4. ショスタコーヴィチ：24の前奏曲より――1, 2, 5, 6, 8, 10, 13, 15, 16, 17, 21, 24 5. メシアン：ミのための詩より――1「神への感謝」、4「恐怖」、6「お前の声」、8「首かざり」、9「叶えられた祈り」 6. プーランク：＜平和への祈り＞＜この優しい顔＞＜こんな日、こんな夜＞ 7. ブリテン：ミケランジェロの7つのソネット 8. ペルト：何年も前のことだった　日本初演 9. リーム：レンツ断章　日本初演 10. リゲティ：2台のピアノのための3つの小品「記念碑―自画像―運動」 11. カイパイネン：私は絶望の熱さを歌う　日本初演 12. ケージ：2台のピアノのためのTWO 蛭多令子／中村和枝／矢沢朋子／依田彰子／松永加也子／上原ひろ子／小林万里子／木村かをり／小坂圭太／寺嶋陸也／高橋アキ／一柳慧（p）、磯野順子（vn）、川人眞紀子（va）、大谷しほ子（S）、岩森美里（A）、蔵田雅之（T）、村田健司（Br）
	8.22	同上 第2夜　弦楽四重奏 （サントリーホール 小）	1. ケージ：FOUR―弦楽四重奏のための― 2. シェーンベルク：弦楽四重奏曲第4番 3. バルトーク：弦楽四重奏曲第6番 4. シュニトケ：弦楽四重奏曲第3番 ニューアーツ弦楽四重奏団
	8.24	同上 第3夜　管弦楽Ⅰ （サントリーホール 大）	1. ケージ：5つのオーケストラのための30の小品　日本初演 2. ヴェーベルン：管弦楽のための変奏曲 3. ショスタコーヴィチ：バレエ組曲ボルト 高関健／細川俊夫／西村朗／松下功／佐藤聰明（指）　東京交響楽団
	8.25	同上 第4夜　合唱 （サントリーホール 小）	1. ダラピッコラ：ミケランジェロによる6つの合唱曲より第1集 2. バーバー：生まれかわり 3. ライマン：ヨハネ伝第3章16節　日本初演 4. カーゲル：7つの合唱作品「ルルルル…」　日本初演 5. ヘンツェ：「鉄条網の向こうのオルフェウス」より 1. 地獄はどんなところだったのか、2. 忘れてはならないことは、3. 昔とは違う、4. オルフェウス　日本初演 大谷研二（指）、松永加也子（p）　東混
	8.26	同上 第5夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ケージ：フルート2重奏のための3つの小品 2. ストラヴィンスキー：ダンバートン・オークス協奏曲 変ホ長調 3. ラッヘンマン：コードウェルへの挨拶 4. アイスラー：雨を描写する14の方法 5. リゲティ：ピアノ協奏曲　日本初演 本多優之（指）、佐藤紀雄／黄敬（g）、野平一郎／白石准（p）、小泉浩／西沢幸彦（fl）、星野正（cl）、大林典代（vn）、川中子紀子（va）、松岡陽平（vc） フェスティバル・アンサンブル［小泉浩／高桑英世（fl）、柴山洋（ob）、十亀正司（cl）、大畠條亮（fg）、藤田乙比古／安部雅人（hrn）、井川明彦（tp）、古賀慎治（tb）、加藤恭子／喜多弘悦（perc）、高田あずみ／高田はるみ／手島志保／山本友重／吉野薫／勅使河原真実／桐山なぎさ（vn）、東義直／金子なお／森田芳子（va）、庭野隆之／山本裕康（vc）、笠原勝二／溝入敬三（cb）］

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1993	8.27	同上 第6夜　管弦楽Ⅱ （サントリーホール 大）	1. シュニトケ：夏の夜の夢（ではない） 2. バルトーク：ヴァイオリン協奏曲第2番 3. コリリアーノ：交響曲第1番　日本初演 マイケル・ダウス（vn）、岩城宏之（指）　日本フィル
	8.23	**ジュニア・オーケストラ・コンサート** ～平成4年度こども音楽コンクール最優秀校による （サントリーホール 大）	1. カバレフスキー：組曲「道化師」 2. チャイコフスキー：バレエ組曲「白鳥の湖」より「ワルツ」 3. ボロディン：歌劇「イーゴリ公」より「ダッタン人の踊り」 4. リムスキー＝コルサコフ：交響組曲「シェヘラザード」より第4楽章 5. ベルリオーズ：「ローマの謝肉祭」序曲 6. ドボルザーク：交響曲第9番「新世界より」 1～4＝千葉県船橋市立小栗原小学校合奏クラブ　宮野智（指） 5～6＝愛知県刈谷市立朝日中学校オーケストラ部　浜田毅（指）
	8.28	**第3回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	1. 高橋　裕：ピアノ協奏曲（第1回「芥川作曲賞」受賞記念委嘱作品） 2. 鈴木行一：篳篥とオーケストラのための森と星々の河 3. 猿谷紀郎：ファイバー・オブ・ザ・ブレス（息の綾） 4. 菊池幸夫：ピアノと管弦楽のための「曜変」 海老彰子／高橋アキ（p）、八百谷啓（篳篥）、小松一彦（指）　新日本フィル
	8.30	**サマーフェスティバル93** 音楽の現在～海外の潮流 Part Ⅳ （サントリーホール 大）	1. ペルト：入祭文～弦楽合奏のための～　日本初演 2. リンドベルイ：コレンテⅡ　日本初演 3. サーリアホ：…煙の中に　日本初演 4. シチェドリン：懐かしいロシアのサーカスの音楽～ オーケストラのための協奏曲第3番　日本初演 木村かをり（p）、ペトリ・アランコ（A-fl）、アンシ・カルトゥネン（vc） 井上道義（指）　東京都響
	10.28	**作曲家の個展93** 「池辺晋一郎」 （サントリーホール 大）	1. 交響曲第1番 2. エネルゲイアー～60人の奏者のために～ 3. ピアノ協奏曲第2番「Tu m'…」おまえは私を… 4. 交響曲第6番「個の座標の上で」　委嘱作初演 木村かをり（p）、岩城宏之（指）　新日本フィル
	11. 4	オペラ「沈黙」（全2幕） （日生劇場）	松村禎三：オペラ「沈黙」（遠藤周作＝原作）委嘱作初演 若杉弘（指）、鈴木敬介（演）、若林茂熙（美）、吉井澄雄（照）、小栗哲家（舞監） 田代誠、直野資、大島幾雄、宮原昭吾、小林一男、釜洞祐子、秋山雪美、池田直樹、水野賢司、青山智英子　新星日本交響楽団
	11. 5	オペラ「沈黙」 （日生劇場）	田中誠、戸山俊樹、宇野徹哉、勝部太、吉田弘之、澤畑恵美、志村年子、山口俊彦、竹沢嘉明、白土里香 他は11月4日に同じ
	11. 6	オペラ「沈黙」 （日生劇場）	11月4日に同じ
	11.25	**音楽の20世紀** ～古典と現在Ⅲ （大阪いずみホール）	1. ショスタコーヴィチ：24の前奏曲とフーガ 作品87より No.1, 7, 4 2. デニソフ：シューベルトの主題による変奏曲 3. A. チャイコフスキー：「IN C」主題と4つの変奏曲とフーガ 4. ドミトリエフ：イマージュのための12の練習曲 5. シュニトケ：ヴァイオリン・ソナタ第2番「ソナタ風」 6. ショスタコーヴィチ：弦楽四重奏曲第7番 作品108 田原富子／河野美砂子（p）、小栗まち絵／岸辺百百雄／梅原ひまり（vn）、山本由美子（va）、河野文昭／高橋宏明（vc）、種谷睦子（mar）
1994	2. 8	**サントリー音楽賞記念** 「練木繁夫」 （サントリーホール 小）	1. 武満徹：カトレーンⅡ 2. メシアン：世の終わりのための四重奏曲 藤原浜雄（vn）、チャールズ・ナイディック（cl）、堤剛（vc）、練木繁夫（p）

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1994	3.25	**室内楽個展94** 「石井眞木」 （大阪いずみホール）	1. 虚空～龍笛と打楽器群のための～ 作品74（1987） 2. 4つのバガテレン 作品3 3. 飛天生動Ⅲ～マリンバ独奏のための～ 作品55 4. サーティーン・ドラムス 作品66 5. 夜の響き 作品82 6. 讃春 作品98　日本初演 7. 失われた響きⅠ～ヴァージョンC 作品32 石井眞木（指）、中野慶理（p）、小栗まち絵／篠崎功子（vn）、芝祐靖（龍笛）、持田洋（fl）、宮本淳一朗（cl）、吉原すみれ／山本毅／安永友昭／喜多弘悦／須清智子／渡辺領子／岩浅由里子／種谷睦子（perc）、西垣英子（hp） プレ・コンサート・トーク　石井眞木＋小石忠男
	8.22	**ジュニア・オーケストラ・コンサート** ～平成5年度こども音楽コンクール最優秀校による （サントリーホール 大）	1. 芥川也寸志：交響管弦楽のための音楽 2. 山田耕筰（白井誠編）：からたちの花、この道、待ちぼうけ、赤とんぼ 3. J. S. バッハ：教会カンタータ第147番より「主よ人の望みの喜びよ」 4. 芥川也寸志：弦楽のための3楽章より第1楽章 5. ベートーヴェン：交響曲第5番 ハ短調 作品67「運命」より第1楽章 6. J. シュトラウス：歌劇「こうもり」序曲 7. チャイコフスキー：交響曲第1番 ト短調 作品13より第4楽章 8. レスピーギ：リュートのための古代舞曲とアリアより「シチリアーナ」 9. チャイコフスキー：交響曲第4番 ホ短調 作品36より第4楽章 1～5＝千葉県習志野市立谷津小学校管弦楽クラブ　佐治薫子（指） 6～9＝福島県郡山市立郡山第二中学校管弦楽部　斎藤正徳（指）
	8.23	**サマーフェスティバル94** 「20世紀の音楽名曲展」 第1夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. ウェーベルン：管弦楽のための5つの小品 作品10 2. ベルク：ヴァイオリン協奏曲 3. シェーンベルク：モノドラマ「期待」作品17 古澤巌（vn）、緑川まり（S）、大野和士（指）　東京フィル
	8.24	同上 第2夜　室内楽 （サントリーホール小）	1. ドビュッシー：フルート・ヴィオラとハープのためのソナタ 2. ノーノ：ポリフォニカ・モノディアーリトミカ 3. ベルク：抒情組曲　メゾ・ソプラノ付 4. メシアン：異国の鳥たち 本多優之（指）、小泉浩（fl）、木澤香織（va）、木村茉莉（hp）、木村かをり（p） フェスティバル・アンサンブル［西沢幸彦／高桑英世（fl）、柴山洋（ob）、十亀正司／千葉直師／星野正（cl）、大畠條亮（fg）、山根公男（B-cl）、大倉滋夫（tp）、宗貞啓二（A-sax）、藤田乙比古／安部雅人（hrn）、依田彰子（p）、前田茂／永曽重光／藤本隆文／松倉利之／石内聡明／西川圭子／畑中暢行（perc）、小川明子（Ms）］ 岸辺百百雄弦楽四重奏団［岸辺百百雄／田渕洋子（vn）、時村美影（va）、高橋宏明（vc）］
	8.28	同上 「シュニトケ作品集」 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. モーツ＝アルト・ア・ラ・モーツァルト 2. 弦楽四重奏曲第4番 3. チェロ・ソナタ 4. ピアノ五重奏曲 佐藤紀雄（指）、高桑英世／鈴木章浩／小泉剛／秋山万己子／古川仁美／高桑良子／西沢幸彦／秋山君彦（fl）、木村茉莉（hp）、山中光／鈴木星彦（vn）、川中子紀子（va）、河野文昭／山本裕康（vc）、山口佳代／河野美砂子（p）
	8.29	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. モーツ＝アルト・ア・ラ・ハイドン　日本初演 2. ヴァイオリン協奏曲第4番 3. 交響曲第7番　日本初演 徳永二男（vn）、井上道義（指）　東京交響楽団
	8.25	同上 音楽の現在～海外の潮流5 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. タネジ：この静けさ　日本初演 2. バートウィッスル：5つのディスタンス　日本初演 3. グバイドゥーリナ：バッハのコラールによる瞑想　日本初演 4. ヘンツェ：ピアノ五重奏曲　日本初演

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1994			佐藤紀雄（指）、西沢幸彦（fl）、柴山洋（ob）、武田忠善／星野正（cl）、井手詩朗／藤田乙比古（hrn）、堂阪清高／大畠條亮（fg）、水野佐知香／城戸喜代／高田あずみ／北村京子／五島龍伸（vn）、秋山俊行／中山洋／川本嘉子（va）、荒康子／松岡陽平（vc）、大西雄二／溝入敬三（cb）、松永加也子（cemb）、山口佳代（p）
	8.30	同 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. バートウィッスル：アンティフォニーズ　日本初演 2. リゲティ：ヴァイオリン協奏曲　日本初演 3. ルトスワフスキ：交響曲第4番　日本初演 矢沢朋子（p）、サシュコ・ガヴリーロフ（vn）、沼尻竜典（指）　東京都響
	8.27	**第4回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	1. 山田　泉：十二の風景（第2回「芥川作曲賞」受賞記念委嘱作品） 2. 江村哲二：ヴァイオリン協奏曲第2番「インテクステリア」 3. 正門憲也：管弦楽のための「遊戯」 4. 小山　薫：ヴァイオリン協奏曲 白尾偕子（va）、高田あずみ／荒井英治（vn）、小松一彦（指）　東京フィル
	10.19	**作曲家の個展94** 「芥川也寸志」 （サントリーホール 大）	1. エローラ交響曲 2. オペラ「ヒロシマのオルフェ」（大江健三郎＝台本） 飯守泰次郎（指）　東京交響楽団、東混、荒川少年少女合唱隊 中村眞理（舞監）、黒田博（Br）、小林晴美（S）、岩森美里（A）、長裕二（T）
	10.22	**音楽の20世紀** ～古典と現在Ⅴ （大阪いずみホール）	1. ブリテン：チェロ・ソナタ ハ長調 作品65 2. タヴナー：「処女マリアの最後の睡り」日本初演 3. ウィアー：2台ピアノのための「アードナマハン岬」日本初演 4. マートランド：2台ピアノのための舞曲Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 5. タネジ：「解放」日本初演 上村昇（vc）、三木香代／小室弥須彦／藤島啓子／岩崎宇紀（p） 岸辺百百雄弦楽四重奏団［岸辺百百雄／田渕洋子（vn）、時村美影（va）、高橋宏明（vc）］、石丸美佳（cb）、北野徹（h-b）、野田燎（S-sax）、小串俊寿（A-sax）、永瀬和彦／大中一巳（B-cl）、池田俊（tp）、呉信一（tb）、花石眞人（perc）
1995	3.24	「関西の作曲家」 第1夜 （大阪いずみホール）	1. 大前　哲：触感・ポリマーⅡ 2. 大前　哲：ダブル・トークⅡ 3. 鈴木英明：素描 4. 中村滋延：サンプリング・ランドスケープ 5. 稲垣静一：弦楽三重奏曲 モルフォーゼ 6. 松永通温：時のゆらめき 持田洋（fl）、鈴木豊人／本田耕一（cl）、北野徹／山本毅／喜多弘悦（perc） 岸辺百百雄弦楽四重奏団［岸辺百百雄／田渕洋子（vn）、時村美影（va）、高橋宏明（vc）］、桑田康雄（mand）、佐野健二（g）、松永みどり（vn）、田村次郎（vc） 中村滋延（コンピューター・オペレーター）、川崎義弘（ミキシング・オペレーター）
	3.25	同上 第2夜 （大阪いずみホール）	1. 中村滋延：クロスワード第2番 2. 松永通温：風の時、糸の間 3. 稲垣静一：散華 4. 鈴木英明：内なる波動 5. 大前　哲：フェストーネ 持田洋（指）、桂本めぐみ（S）、山本毅／喜多弘悦（perc, アクション）、寺本義明（fl）、本田耕一（cl）、永瀬和彦（B-cl）、呉信一（tb）、種谷睦子／渡辺領子／岩瀬由里子（mar）、須清智子（vib）、梅原ひまり（vn）、高橋宏明／田中次郎（vc）、酒井松道（尺八）、国嶋淳子（三十弦箏） 中村滋延（コンピューター・オペレーター）、川崎義博（ミキシング・オペレーター）
	6. 2	**サントリー音楽賞記念** 「五嶋みどり」 （サントリーホール 大）	1. J. S. バッハ：ヴァイオリン・ソナタ第2番 イ長調 BWV.1015 2. シューベルト：幻想曲 ハ長調 Op.159 D.934 3. ベートーヴェン：ヴァイオリン・ソナタ第4番 イ長調 Op.23 4. チャイコフスキー：なつかしい土地の思い出 5. シマノフスキ：夜想曲とタランテラ Op.28 五嶋みどり（vn）、ロバート・マクドナルド（p）

年月日	名称（会場）	曲目・出演者
8.22	**サマー・フェスティバル95** 音楽の現在〜海外の潮流 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ゴールドシュミット：弦楽四重奏曲第4番　日本初演 2. タヴナー：「処女マリアの最後の睡り」　東京初演 3. リーム：弦楽四重奏曲第9番　日本初演 4. メシアン：ピアノと弦楽四重奏のための小品　日本初演 ニューアーツ弦楽四重奏団［小林健次／平尾正伸（vn）、江戸純子（va）、刈田雅治（vc）］、山口恭範（h-b）、藤井一興（p）
8.23	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. フィールソヴァ：カッサンドラ　日本初演 2. ヒルボルク：ヴァイオリン協奏曲　日本初演 3. ヘンツェ：交響曲第8番　日本初演 木村まり（vn）、大野和士（指）　東京フィル
8.24	同上 「20世紀の音楽名曲展」 第1夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. ストラヴィンスキー：プルチネルラ 組曲 2. ラヴェル：ダフニスとクロエ 組曲 第2番 3. バルトーク：管弦楽のための協奏曲 秋山和慶（指）　東混、東京交響楽団
8.25	同上 第2夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ルトスワフスキ：パガニーニの主題による変奏曲 2. ケージ：「3つのダンス」 3. ドビュッシー：「白と黒で」 4. バルトーク：2台のピアノと打楽器のためのソナタ 木村かをり／高橋アキ（p）、菅原淳／前金奈千子（perc）
8.26	同上 「ベリオ作品集」 〜70歳を記念して〜 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. フルートのためのセクェンツァ 2. ハープのためのセクェンツァ 3. 声のためのセクェンツァ 4. ピアノのためのセクェンツァ 5. トロンボーンのためのセクェンツァ 6. ヴィオラのためのセクェンツァ 7. オーボエのためのセクェンツァ 8. ヴァイオリンのためのセクェンツァ 9. クラリネットのためのセクェンツァ 10. トランペットとピアノ・レゾナンスのためのセクェンツァ 11. ギターのためのセクェンツァ 木ノ脇道元（fl）、山崎祐介（hp）、畠中恵子（声）、小坂圭太（p）、小田桐寛之（tb）、松実健太（va）、柴山洋（ob）、江口有香（vn）、星野正（cl）、大隅雅人（tp）、佐々木和子（p）、佐藤紀雄（g）
8.30	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1.「アインドゥリュッケ（印象）」 2. バラード－オペラ「真実の物語」より　日本初演 3. シンフォニア 沼尻竜典（指）、ミルバ（バラード歌手）、エッペ・モラスキ（p）、大谷しほ子／秋島博子／渡辺千恵／荒かをり／半田暁／秋島光一／山田茂／渡辺克巳（声） 本多優之（声の指導）　東京交響楽団
8.27	**第5回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	1. 猿谷紀郎（第3回受賞記念委嘱作初演） 2. 田中カレン：ウェーブ・メカニクス 3. 伊左治直：畸形の天女／七夕 4. 宮崎滋：オーケストラのための2つのオード 中野真理（fl）、小松一彦（指）　新日本フィル
11.24	**音楽の20世紀** 〜古典と現在Ⅵ〜 （大阪・音楽の友ホール）	1. アイスラー：ピアノ・ソナタ第3番 2. ヘンツェ：ケルビーノ 3. リゲティ：ピアノのための「エチュード」第1集 4. ライマン：ピアノのための「スペクトル」 5. ラウク：ひとりの女流ピアニストのための「トリオ」 6. フランマー：瞬間の写生、5つのピアノ小品 7. ツインマーマン：「モノローグ」 韓伽／添田孝／中野慶理／戎洋子／長谷川美穂子（p）

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1995	11.26	**作曲家の個展95** 「高橋悠治」 （サントリーホール 大）	音楽のおしえ（委嘱作品初演） プレコンサート・トーク　高橋悠治×武田明倫 宮田まゆみ／石川高（笙）、八百谷啓／中村仁美（篳篥）、芝祐靖／角田眞美（横笛）、高田和子（三絃）、田中悠美子（太棹）、米川裕枝（箏）、新井弘順／海老原廣伸（声明）、数住岸子（va）、松崎裕／山本真（hrn）、神谷敏／山下秀樹（tb）、吉原すみれ／山口恭範／松倉利之（perc）、高橋悠治（コンピューター・打物）
1996	3.13	**サントリー音楽賞記念** 「和波孝禧」 大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	1. ベートーヴェン：ロマンス第2番 ヘ長調 Op.50 2. ヒンデミット：ヴァイオリン協奏曲 3. ブラームス：ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 Op.77 和波孝禧（vn）、ウリエル・セガル（指）　大阪センチュリー
	3.21	同上　東京公演 （サントリーホール 大）	大阪公演と同じ 和波孝禧（vn）、手塚幸紀（指）　東京シティ・フィル
	3.22	**室内楽個展96** 「廣瀬量平」 （大阪いずみホール）	1. フルートとピアノのためのソナタ 2.「プンダリーカ」 3.「アスラ」 4.「ポータラカ」 5.「エレギア」 6.「メディテーション」 7.「“みだれ”による変容」 8.「カラヴィンカ」 武田博之（指）、韓伽（p）、清水信貴（fl）、宮本淳一朗（cl）、呉山平煥（ob）、山岡重治（rec）、西垣英子／三浦由美子（hp）、梅原ひまり／久合田緑（vn）、山本由美子（va）、齋藤健寛（vc）、種谷睦子／山本毅（perc）、島田重弘（十七絃）
	8.23	**サマー・フェスティバル96** 「20世紀の音楽名曲展」 第1夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. スクリャービン：交響曲第4番「法悦の詩」Op.54 2. ショスタコーヴィチ：ピアノ協奏曲第1番 Op.35 3. プロコフィエフ：カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」 横山幸雄（p）、大隅雅人（tp）、マリアンナ・タラーソワ（Ms）、秋山和慶（指） 東京交響楽団、東混、東京工業大学混声合唱団コール・クライネス 大谷研二（合指）
	8.24	同上 第2夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. シェーンベルク：月に憑かれたピエロ Op.21 2. メシアン：世の終わりのための四重奏曲 畠中恵子（声）、西沢幸彦（fl）、星野正／生島繁（cl）、木村まり（vn）、城戸喜代（vn, va）、菊地知也／河野文昭（vc）、松永加也子／藤井一興（p）、佐藤紀雄（指）
	8.26	同上 「リゲティ作品集」 第1夜　管弦楽とオルガン （サントリーホール 大）	1. ヴォルーミナ 2. ロンターノ 3. チェロ協奏曲 4. 2つのエチュード～オルガンのための～ 5. マカブル・コラージュ　日本初演 保田紀子（org）、堤剛（vc）、沼尻竜典（指）　東京フィル
	8.27	同上 第2夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. チェンバロのための3つの作品 2. コンティヌウム 3. ハンガリア風パッサカリア 4. ハンガリアン・ロック 5. 弦楽四重奏曲第2番 6. ピアノのためのエチュード第2集 7. アヴァンチュール 8. 新アヴァンチュール 森川栄子（S）、畠中恵子（A）、加賀清孝（Br）、小泉浩（fl）、南浩之（hrn）、田中雅弘（vc）、猪俣研介（cb）、ローラン・テシュネ／小谷彩子（cemb）、野平一郎／フベルトス・ドライヤー（p）、松倉利之（perc）、アルベリ弦楽四重奏団［戸澤哲夫／林智之／中島久美／入澤百合子］ 本多優之（指）、岡村春彦（演）

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1996	8.28	同上 「音楽の現在」 ～海外の潮流～ 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. E. カーター：弦楽四重奏曲「断片」　日本初演 2. L. ソウラリンソン：弦楽四重奏曲第3番　日本初演 3. K. ペンデレツキ：クラリネット四重奏曲　日本初演 4. B. ランズ：弦楽四重奏曲第2番　日本初演 ニューアーツ弦楽四重奏団［小林健次／平尾眞伸／江戸純子／苅田雅治］ 鈴木良昭（cl）
	8.30	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. G. ベンジャミン：サドゥン・タイム　日本初演 2. J. アダムス：ヴァイオリン協奏曲　日本初演 3. B. ランズ：オーケストラのための歌　日本初演 木村まり（vn）、井上道義（指）　東京都響
	8.29	**第6回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	1. 江村哲二：プリマヴェーラ（春）（第4回芥川作曲賞受賞記念委嘱作初演） 2. 権代敦彦：DIES IRAE / LACRIMOSA（怒りの日／嘆きの日） 3. 金子仁美：フルート協奏曲 4. 立原　勇："Sinfonia" — for Orchestra — 豊田喜代美（S）、木ノ脇道元（fl）、小松一彦（指）　新日本フィル
	10.23	**作曲家の個展96** 「柴田南雄」 （サントリーホール 大）	＜人間について＞三部作初演 第1部「歌垣」 第2部「生の種々相」 第3部「人間と死」 田中信昭（指・演）、村本和修（Bs）、森一夫（T）、上杉紅童（石笛）、関一郎（尺八） 東混／稲門グリークラブ／桜楓合唱団／法政大学アリオンコール／新しい合唱団／東京放送児童合唱団／東京荒川少年少女合唱隊／ひばり児童合唱団
1997	3.21	**室内楽個展97** 「柴田南雄」 （大阪いずみホール）	1. ピアノ・ソナタ 2.「古典組曲」 3.「エッセイ」 4. マリンバのための「像」 5. オルガンのための「律」 6. 合唱曲「無限曠野」 坂本恵子（p）、ジグムンド・サットマリー（org）、中野振一郎（cemb）、上野博孝（b.vn）、吉田治人／秋月孝之／松原健二（tp）、池田俊（指）、種谷睦子（mar）、当間修一（指） 大阪ハハインリッヒ・シュッツ合唱団
	3.26	**サントリー音楽賞記念** 「今井信子」 大阪公演 （大阪いずみホール）	1. J. S. バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第6番 変ロ長調 BWV.1051 2. 武満徹：鳥が道に降りてきた 3. ヒンデミット：無伴奏ヴィオラ・ソナタ Op.25-1 4. ブラームス：ヴィオラ・ソナタ ヘ短調 Op.120-1 今井信子／店村眞積（va）、向山佳絵子／長瀬夏嵐／趙静（vc）、井戸田善之（cb）、野平一郎（p, cem）
	4. 1	同上 東京公演 （サントリーホール 大）	1. J. S. バッハ：ブランデンブルク協奏曲 第6番 変ロ長調 BWV.1051 2. 武満徹：鳥が道に降りてきた 3. ヒンデミット：無伴奏ヴィオラ・ソナタ Op.25-1 4. モーツァルト：協奏交響曲 変ホ長調 K.364 5. バルトーク：ヴィオラ協奏曲 豊嶋泰嗣（vn）、今井信子／川本嘉子／岡田伸夫／店村眞積／小倉幸子／金丸葉子／菊地崇／阪本奈津子／篠崎友美／武生直子／松実健太／柳瀬省太（va）、藤森亮一／堀了介／向山佳絵子／長瀬夏嵐／趙静（vc）、井戸田善之（cb）、野平一郎（p, cem）、原田幸一郎（指）　フレッシュ・アンサンブルしらかわ
	8.23	**サマー・フェスティバル97** 「ヤニス・クセナキス作品集」 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ST／4 2. ジャロン 3. フレグラ 4. テトラ 5. ペルセファサ アルベリ弦楽四重奏団［戸澤哲夫／林智之／小畠茂隆／入沢百合子］

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1997			アンサンブル・ノマド・プラス［西沢幸彦／木ノ脇道元（fl）、浅間信廣／庄司知史（ob）、菊池秀夫／柴欽也（cl）、大畠條亮／堂阪清高（fg）、白谷隆（hrn）、大隅雅人（tp）、古賀慎治（tb）、渡辺功（tub）、寺岡有希子／山本千鶴（vn）、城戸喜代（va）、菊池知也（vc）、山本修（cb）、木村茉莉（hp）、佐藤紀雄（指）］ 菅原淳／松倉利之／藤本隆文／加藤恭子／横田大司／伊藤優（perc）
	8.25	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. シルモス 2. シナファイ 3. ST／48 4. キアニア 永野英樹（p）、岩城宏之（指）　東京フィル
	8.26	同上 「音楽の現在」 ～海外の潮流～ 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ハインツ・ホリガー：二重奏曲Ⅱ　日本初演 2. ロディオン・シチェドリン：ピアノ三重奏曲　日本初演 3. ロイス・V・ヴィアーク：スピン2　日本初演 4. サバスティアン・カリアー：弦楽四重奏組曲　日本初演 ニューアーツ弦楽四重奏団［小林健次／平尾眞伸／江戸純子／苅田雅治］ 松永加也子／蛭多令子／藤井一興（p）
	8.28	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	和解のレクイエム　日本初演 ルチアーノ・ベリオ／フリードリヒ・ツェルハ／パウル＝ハインツ・ディットリヒ／マレク・コペレント／ジョン・ハービソン／アルネ・ノールヘイム／バーナード・ランズ／マルク＝アンドレ・ダルバヴィ／ジュディス・ウィアー／クシシトフ・ペンデレツキ／ウォルフガング・リーム／アルフレート・シュニトケ＋ゲンナジ・ロジェストヴェンスキー／湯浅譲二／ジェルジ・クルターク 大野和士（指）、豊田喜代美（S）、坂本朱（A）、井上幸一（T）、黒田博（Br）、渡辺一訓（b-sop）　東京都響、東混、東工大「コールクライネス」メンバー　大谷研二（合指）
	8.27	同上 「20世紀の音楽名曲展」 第1夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	オリヴィエ・メシアン：トゥーランガリーラ交響曲 木村かをり（p）、原田節（ond.m）、秋山和慶（指）　東京交響楽団
	8.30	同 第2夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. アルノルト・シェーンベルク：室内交響曲第1番 ホ長調 Op.9 2. ジェルジ・リゲティ：ピアノ協奏曲 3. アルバン・ベルク：室内協奏曲 マリノ・フォルメンティ（p）、高関健（指）　クラングフォーラム・ウィーン
	8.31	**第7回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	伊左治直：美貌の青空（第5回芥川作曲賞受賞記念委嘱作初演） 1. 川島素晴：DUAL PERSONALITY 2. 手島恭子：記憶の書 3. 丸山貴幸：ナルシスの変貌 五十嵐一生（tp）、神田佳子（perc）、亀正司（cl）、小松一彦（指）　新日本フィル
	10. 6	**作曲家の個展97** 「細川俊夫」 （サントリーホール 大）	1. オーケストラのための「プレリューディオ」 2.「うつろひ・なぎ」 3. 児童合唱のための「歌う木」～武満徹へのレクイエム 4. チェロ協奏曲～武満徹の追憶に～　委嘱曲初演 細川俊夫×武田明倫（プレコンサート・トーク） 宮田まゆみ（笙）、ユリウス・ベルガー（vc）、十束尚宏（指） 東京少年少女合唱隊（長谷川冴子 指揮）、東京都響
1998	2.16	**サントリー音楽賞記念** 「園田高弘・湯浅譲二」 大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	1. 湯浅譲二：交響組曲「奥の細道」 2. 湯浅譲二：ヴァイオリン協奏曲～イン・メモリー・オブ武満徹～ 3. ブラームス：ピアノ協奏曲第1番 ニ短調 Op.15 堀米ゆず子（vn）、園田高弘（p）、岩城宏之（指）　大阪フィル
	3.11	同上 東京公演 （サントリーホール 大）	曲目、指揮、ソリスト大阪公演に同じ オーケストラ　東京フィル

年月日	名称（会場）	曲目・出演者
3.20	**室内楽個展98** 「西村朗」 （大阪いずみホール）	プレコンサート・トーク　西村朗×小石忠男 1. 瞑想のパドマ 2. 蓮華の花 3. 水の詩曲 4. 月の鏡（1995） 5. 赤光（1992） 武田博之（指）、種谷睦子／山本毅／安永友昭／細田真平／橋川敦子／須清智子（perc）、梅原ひまり（vn）、土橋薫（org）、岩崎宇紀／三木香代（p）、赤尾三千子（横笛）、中村明一（尺八）、吉村七重（二十絃箏）
8. 5	**サントリー音楽賞記念** 「東京交響楽団」 東京公演	1. 武満徹：弦楽のためのレクイエム 2. 西村朗：光の雅歌 3. ベルリオーズ：幻想交響曲 大友直人／飯森範親（指）　東京交響楽団
8.12	同上　大阪公演 （ザ・シンフォニーホール）	東京公演に同じ
8.23	**サマー・フェスティバル98** 20世紀の音楽名曲展 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. サミュエル・バーバー：弦楽四重奏曲ロ短調 2. カールハインツ・シュトックハウゼン：ルフラン 3. エドガー・ヴァレーズ：オクタンドル 4. ベンジャミン・ブリテン：チェロ・ソナタ ハ長調 Op.65 5. ブルーノ・マデルナ：セレナータ第2 新アドニス弦楽四重奏団［山中光／手島志保／東義直／平野知種］ 山崎伸子（vc）、若林顕／中川俊郎／黒田亜樹（p）、小坂圭太（cel）、菅原淳（vib）、西沢幸彦／木ノ脇道元（fl）、浅間信慶（ob）、菊地秀夫（cl）、内山厚志（B-cl）、大畠條亮（fg）、白谷隆（hrn）、高橋敦（tp）、古賀慎治（tb）、井上栄利加（hp）、松倉利之（perc）、寺岡有希子（vn）、城戸喜代（va）、山本修（cb）、佐藤紀雄（指）
8.24	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. ガーシュウィン：パリのアメリカ人～生誕100年に因んで 2. プーランク：クラヴサンと管弦楽のための田園の奏楽 3. マヌエル・デ・ファリャ：三角帽子 曽根麻矢子（cemb）、重松みか（Ms）、井上道義（指）　東京交響楽団
8.25	同上 ヘンツェ作品集 ～作曲生活50年の軌跡～ 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. 刑務所の歌 2. 美しくあること 3. 弦楽四重奏曲第5番 4. ピアノ五重奏曲 緑川まり（S）、菊地知也／服部誠／松葉春樹／三宅進（vc）、山崎祐介（hp）、本多優之（指）、山口恭範（perc）、中川俊郎（p）、ニューアーツ弦楽四重奏団［小林健次／平尾眞伸／江戸純子／苅田雅治］、松原勝也弦楽四重奏団［松原勝也／浜野孝史／馬渕昌子／河野文昭］
8.26	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. 交響曲第1番 2. 序奏、主題と変奏　日本初演 3. 交響曲第9番　日本初演 黒川正三（vc）、大野和士（指）　東京フィル 栗友会合唱団（栗山文昭 合指）
8.27	同上 音楽の現在 ～イギリス特集～ 第1夜　室内楽 （サントリーホール 小）	1. ジェイムズ・マクミラン：14枚の小さな絵　日本初演 2. イアン・ウィルソン：遠い国を目指して　日本初演 3. ジュリアン・アンダーソン：沈黙に近い詩　日本初演 4. ジェイムズ・ディロン：贖罪　日本初演 5. トーマス・アデス：簡潔な協奏曲　日本初演 木村かをり／矢沢朋子（p）、白石禮子／石井光子／谷口哲朗／田中雅子（vn）、百武由紀（va）、松岡陽平／平田昌平（vc）、西沢幸彦（fl）、野田祐介／西沢春代（cl）、小串俊寿（Br-sax）、井川明彦（tp）、古賀慎治（tb）、渡辺功（tub）、松倉利之（perc）、木村茉莉（hp）、那須野直裕（cb）、松倉康明（指）　戸澤哲夫弦楽四重奏団［戸澤哲夫／榎戸崇浩／増尾朗子／大友肇］

年	月日	名称（会場）	曲目・出演者
1998	8.28	同上 第2夜　管弦楽 （サントリーホール 大）	1. マーク＝アントニー・タネジ：恐れを払う　日本初演 2. ジョナサン・ハーヴィ：打楽器協奏曲　日本初演 3. コリン・マシューズ：チェロ協奏曲第2番　日本初演 堤剛（vc）、吉原すみれ（perc）、福田善亮／内藤知裕（tp）、沼尻竜典（指） 東京都響
	8.29	**第8回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	1. 権代敦彦：Father Forgive（第6回芥川作曲賞受賞記念委嘱作初演） 2. 伊藤弘之：シーシュポスの神話 3. 斉木由美：Goutte de VERBUM／ことばの雫 4. 田頭優子：LION… 5. 武智由香：テクストの出口 オーレン・タナベ（n）、長尾洋史／山田武彦（p）、板倉康明（cl）、小松一彦（指） 新日本フィル
	10.29	**作曲家の個展98** 「松村禎三」 （サントリーホール 大）	1. 交響曲 2. チェロ協奏曲 3. 交響曲第2番　委嘱曲初演 松村禎三×船山隆（プレコンサート・トーク） 堤剛（vc）、野島稔（p）、尾高忠明（指）　東京都響
1999	3.24	**室内楽個展99** 「池辺晋一郎」 （大阪いずみホール）	プレコンサート・トーク　池辺晋一郎×小石忠男 1. クレパ7章 2. アセンション 3. 君は土と河の匂いがする 4. モノヴァランスⅣ 5. バイヴァランスⅡ 6. クインクヴァランス 待永望（fl）、坂本恵子（p）、種谷睦子（mar）、小栗まち絵／梅原ひまり／稲垣琢磨／北浦洋子（vn）、竹内晴夫／廣狩亮／杉山雄一（va）、高橋宏明／斎藤建寛（vc）、奥田一夫（cb）、佐野健二（g）
	8.23	**サマー・フェスティバル99** 「作曲家の個展」 委嘱作品特集 池辺晋一郎／細川俊夫／松村禎三 （サントリーホール 大）	1. 池辺晋一郎：交響曲第6番「個の座標の上で」 2. 細川俊夫：チェロ協奏曲～武満徹の追憶に 3. 松村禎三：交響曲第2番 上村昇（vc）、野島稔（p）、尾高忠明（指）　東京フィル
	8.24	同上 石井眞木／林光／西村朗 （サントリーホール 大）	1. 石井眞木：風姿～管弦楽のための 2. 林　光：八月の正午に太陽は…… 3. 西村　朗：アストラル協奏曲「光の鏡」 緑川まり（S）、原田節（ond.m）、外山雄三（指）　新日本フィル
	8.25	同上 武満徹／湯浅譲二／一柳慧 （サントリーホール 大）	1. 武満　徹：オリオンとプレアデス 2. 湯浅譲二：啓かれた時 3. 一柳　慧：交響曲「ベルリン連詩」 堤剛（vc）、川本嘉子（va）、佐藤しのぶ（S）、大島幾雄（Br）、岩城宏之（指） 東京交響楽団
	8.26	同上 音楽の現在 ～海外の潮流・中国特集～ （サントリーホール 小）	1. 賈達群：言葉のない歌 2. 蘇聰：弦楽四重奏曲　日本初演 3. 韓永：光の襞　日本初演 4. 許舒亞：虚／実　日本初演 5. 譚盾：ピパと弦楽四重奏のための協奏曲　世界初演 6. 瞿小松：“寂（Ji）” No.7「静かな水」 7. 周龍：石窟傳奇　日本初演 孟暁亮／小川真由子／奥田有紀／山口恭範／吉原すみれ／ニツ木由紀（perc）、許可（ニ胡）、邵容（ピパ）、黄敬（g）、姜小青（中国古箏）、矢沢朋子／松永加也子（p）、木村茉莉（hp）、青山忠（mand）、ニューアーツ弦楽四重奏団［小林健次／平尾眞伸／江戸

年月日	名称（会場）	曲目・出演者
		純子／苅田雅治]、白石禮子／石井光子／長谷部雅子（vn）、百武由紀（va）、菊地知也（vc）、溝入敬三（cb）、板倉康明（指）
8.28	同上 管弦楽 （サントリーホール 大）	1. 陳怡：モメンタイム（動勢）　日本初演 2. 盛中亮：はがき　日本初演 3. 陳其鋼：五行（水・木・火・土・金）　日本初演 4. 陳遠林：序曲―ラプソディ　世界初演 5. 譚盾：ウォーター・パーカッションとオーケストラのための協奏曲 ～武満徹の追憶に　日本初演 クリストファー・ラム（perc）、譚盾（指）　東京都響
8.27	同上 20世紀の音楽名曲展 （サントリーホール 小）	1. ドビュッシー：ビリティスの歌 2. バルトーク：弦楽四重奏曲第五番 3. ケージ：コンストラクション第1「金属で」 4. ストラヴィンスキー：管楽八重奏曲 エストリータ・ワッセルマン（朗読）、篠崎史子／篠崎和子（hp）、小泉浩／高桑英世／木ノ脇道元（fl）、小坂圭太（cel）、松原勝也／鈴木理恵子（vn）、柳瀬省太（va）、山崎伸子（vc）、奥田有紀／小川真由子／小林巨明／畑中明香／菅原淳／吉原すみれ／山口恭範（perc）、菊地秀夫（cl）、大畠條亮／前田征志（fg）、高橋敦／山川洋樹（trp）、古賀真治／奥村晃（tb）、佐藤紀雄（指）
8.30	同上 （サントリーホール 大）	シェーンベルク：グレの歌 秋山和慶（指）、森川栄子（S）、竹本節子（Ms）、田中誠／経種廉彦（T）、谷茂樹（Bs）、宮原昭吾（n）　東響コーラス、大谷研二（合指）　東京交響楽団
8.29	**第9回　芥川作曲賞** 選考演奏会 （サントリーホール 大）	川島素晴：Manic-Depressive Ⅲ（第7回芥川作曲賞受賞記念委嘱作初演） 1. 土田英介：ヴァイオリン協奏曲 2. 久行敏彦：風の詩 3. 菱沼尚子：REFLEX 小松一彦（指）、野平一郎（p）、川島素晴（p-p）、漆原啓子（vn）、長尾洋史（p） 新日本フィル
10. 6	**作曲家の個展99** 「新実徳英」 （サントリーホール 大）	1. 生命連鎖 2. 創造神の眼～ピアノ協奏曲Ⅱ～　舞台初演 3. 焔の螺旋 4. 太陽風　委嘱作初演 岩城宏之（指）、高橋アキ（P）　東京都響
11. 4	**サントリー音楽賞記念** 「林光」 オペラアンソロジー 東京公演 （サントリーホール 大）	1. オペラ「森は生きている」より12場～16場 2. オペラ「セロ弾きのゴーシュ」より3場・6場 3.「岩手軽便鉄道の一月」 4.「三村ぬ姉小達」 5.「徳利小」 6. オペラ「吾輩は猫である」より1場「橋」、2場「庭」、3場「縁側」 7. オペラ「変身」より13場「ポップソング」、14場「コンサート」、15場「子守歌」16場「パストラーレ」、17場「出発」 山本清多（演）、荒田良（美）、成瀬一裕（照）、二瓶剛雄（舞監）、萩京子（音楽監督） 出演＝オペラシアターこんにゃく座 楽士＝寺嶋陸也（p）、手島志保／山田百子（vn）、橋爪恵一（cl）、高橋誠一郎（fg）、志村泉（p）
11. 8	同上 大阪公演 （ザ・シンホニーホール）	曲目・出演者は東京公演に同じ

あ　と　が　き

サントリー音楽財団は「日本人作曲作品の振興」をその活動の柱の1本としており、1989年、財団設立20周年の折の記念行事として秋山邦晴・石田一志・上野晃氏のご出席、筆者の司会という座談会形式により、『日本の作曲1969−1989』を編集・出版した。

そのときこのような出版物の継続を強く希望されたのは、秋山氏であったが、残念ながら氏は1996年に逝去された。

1999年の設立30周年にあたって、その続編の出版は財団の使命と考え、今回ようやく本書の出版にこぎつけることが出来た。思えば、秋山氏のみならず、この間日本の20世紀後半を支えてこられた多くの作曲家が物故された。ちなみに『音楽年鑑』（音楽之友社）によると、この10年間に物故された作曲家は以下のとおりである。

●物故者（1990〜1999）
池内友次郎（*1906-1991*）
石桁真礼生（*1916-1996*）
磯部　　淑（*1917-1998*）
市川都志春（*1912-1998*）
大築　邦雄（*1911-1991*）
小倉　　朗（*1916-1990*）
貴島　清彦（*1917-1998*）
柴田　南雄（*1916-1996*）
武満　　徹（*1930-1996*）
塚谷　晃弘（*1919-1995*）
寺原　伸夫（*1928-1998*）
松下　真一（*1922-1990*）
黛　　敏郎（*1929-1997*）
毛利　蔵人（*1950-1997*）
山田　　泉（*1952-1999*）
渡辺　浦人（*1909-1994*）

このデータは日本の作曲界の世代交替が進んでいることを如実に物語っている。また、この10年はいわゆるバブルの崩壊とともに「失われた10年」とも呼ばれるが、若手作曲家の台頭にはめざましいものがあり、また作風の多極化も加速度的に進んでいる。

そうした日本の作曲界の全貌を把握することはほとんど不可能であるが、出来るだけ広くカヴァーすることを意図して、今回は引き続きお願いした石田、上野氏に加えてより若い世代である白石美雪、長木誠司、楢崎洋子氏にご参加いただき、前回同様の座談会形式で1999年11月24日及び2000年2月13日に延べ15時間にわたり行った。

上演データについては主要な資料である『音楽芸術』誌の休刊によって、とくに1999年の分については収集に苦労した。また取り上げた作品については作曲者ご自身から諸データの提供をお願いしたため、出版まで思いのほか時間がかかってしまった。ご協力いただいた諸氏に、この場を借りて厚く感謝する。

武田明倫

装幀●桝中　律

本文レイアウト●斉藤デザイン事務所

日本の作曲　1990-1999

発行日　2001年3月31日
発行人　堤　剛
編集人　武田明倫
発　行　財団法人 サントリー音楽財団
〒107-0052
東京都港区赤坂3－21－4 新日本ビル
TEL.(03)3589－3694
FAX.(03)3589－5344
協　力　サントリー株式会社
制作協力　ワイルドボア
株式会社 東京コンサーツ
印刷・製本　株式会社 アポロ社

定価　1500円(税込)
© Suntory Music Foundation 2001
Printed in Japan